

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

「武士道」にみるスポーツ規範形成に関する研究

平成27年3月

船場 大資

目次

章立て・構成

序章	1 頁
第 1 章 「明治武士道」規範と「文明の精神」	10 頁
第 1 節 「明治武士道」の形成	10 頁
第 1 項 西歐的規範の啓発論者にみる「武士道」—新渡戸稲造の『 <i>The Soul of Japan</i> 』—	10 頁
第 2 項 社会ダーウィニズムと「文明の精神」	15 頁
第 2 節 新渡戸稲造と増田義一にみる「武士道」の普及過程	20 頁
第 1 項 実業之日本社が果たした役割	20 頁
第 2 項 新渡戸稲造の「修養」と伝道活動	22 頁
第 3 項 増田義一の「新士道」論	27 頁
第 2 章 社会ダーウィニズムと「文明の精神」—西歐規範としての「武士道」の創造—	37 頁
第 1 節 東京大学予備門時代—F. W. ストレンジと運動会—	37 頁
第 2 節 木下広次校長時代	47 頁
第 1 項 木下広次のエリート像について	47 頁
第 2 項 寄宿舎の設置	55 頁
第 3 項 校友会の設置	56 頁
第 4 項 極東のパブリックスクール	58 頁
第 3 節 木下以降の校長時代	63 頁
第 4 節 新渡戸稲造校長時代	67 頁
第 3 章 フィールドにみるスポーツ規範と「武士道」	73 頁
第 1 節 スポーツにおける「明治武士道」の形成	73 頁
第 1 項 『戸外遊戯法』、『 <i>Outdoor Games</i> 』	74 頁
第 2 項 雑誌『運動界』にみるスポーツ規範と「武士道」の啓発	75 頁
第 2 節 一高野球部にみるスポーツ規範と「武士道」	87 頁
第 3 節 極東アジア選手権大会にみる日本選手団とアマチュアリズム	95 頁
第 4 節 英国スポーツ規範の普遍化の事例—「一日一善」の形成—	99 頁
終章 ファシズムによる「武士道」の変容	104 頁
結論 日本的スポーツ規範「武士道」の再考	110 頁

目的・方法

本研究は、明治期に創られた「武士道」と日本における近代スポーツ規範形成との関係を以下の観点から問うものである。

これまで、日本における近代スポーツ規範の形成は、西欧において発展したスポーツ規範と日本における伝統的な文化規範との折衷によるものであると説明されてきた。その際、日本における伝統的な規範に相当するものとして、「武士道」に言及することがしばしばであった。

例えば、岸野雄三、竹之下休蔵による『近代日本学校体育史』は、「日本には、英人教師の余暇指導として繰り広げたスポーツのなかに、それを日本的に摂取する武家風の感覚がひそんでいた。かくして自己犠牲、質実剛健、忠誠心などの徳目は日本的に消化され」と述べている¹⁾。また木下秀明『スポーツの近代日本史』も同様に、「スポーツが武士的名誉の強調と結びついてくると、西欧スポーツ思想とは相容れない側面が日本のスポーツに出現してくるのが避けられなくなる。その最大の特徴は、勝敗観にある」と表現している²⁾。

他方、西欧との融合であるとする折衷論を、帝国主義の脈絡から説明する立場も存在する。例えば、ドナルド・T・ローデンは、第一高等学校（以下一高と略す）の学生の生活を検証することで、日本のスポーツ規範形成には、帝国主義の影響下で浸透した社会ダーウィニズムの与えた影響が存在し、それによって一高野球部といった学生スポーツが形成されたと主張している。³⁾

社会ダーウィニズムとは、帝国主義の下で支配階層となる社会的エリートを創出する際の社会的淘汰の構造を正当化する理念であった。たとえば、大英帝国におけるエリート養成機関、パブリックスクールから輩出されたジェントルマンは、筋肉主義的キリスト教徒であることが期待された。筋肉主義的キリスト教徒とは、時代をリードする支配者は、筋骨たくましくあり、かつキリスト教紳士の理想にかなう徳性の高い人間であることが求められた当時のジェントルマンの理想像であった。こうした理想のジェントルマンになるための英国におけるエリートの素養について、阿部生雄は、「健全で頑強な“肉体”は帝国主義的躍進の武器、英国人の民族的強化の起点として位置づけられる」⁴⁾のものであったと述べている。また、筋肉的キリスト教徒である、Kingsley の作品である『*Westward HO!*』（1855年刊行）や『*Two Years Ago*』（1857年刊行）などは、「若者の愛国心を覚醒し、帝国主義的侵略戦争を正当化する作品」⁵⁾であったという。以上のような理念と身体を有し、帝国主義的躍進を果たせたものが新たな真のエリートであった。

日本でも社会ダーウィニズムによる教育は主唱されていた。入江克己は高島平三郎の『体育原理』（1903年刊行）のなかで、「近代的な帝国主義国へと脱皮するための布石として、体育の科学性と身体の修養を鼓吹している」とし、「社会有機体説や社会ダーウィニズムを摂取し、人格や身体の修養を説く点で、明治後期の全般的な帝国主義的教育論と共通している」⁶⁾と指摘している。

先に言及のローデンも世紀転換期に帝国主義を通じて浸透した社会ダーウィニズムの波及効果を日本社会に見出すと同時に日本で野球が人気を得た理由は、日本の支配階層であった武士階級に帰属する伝統的な諸徳目が、ベースボールの中で重視されていたためであるとしている。

一方で、アレン・グットマンは、ローデンとは異なる見解を提示している。ローデンの言うように、野球が「公式行事において賞賛される諸価値、すなわち、秩序、和、忍耐、克己心をまさに強調するように思われた」のではなく、「野球は伝統的に日本的でない価値を有していると思われたゆえに、日本人に人気を得た」とし、「もし日本人が、土着の文化を再認識したかったのであれば、バットではなく竹刀や弓道の弓を手にした」⁷⁾と述べている。すなわち、野球とは「伝統の権化だったのではなく、近代を象徴するものであった」⁸⁾として、西欧近代化の伝播を通じて、野球が普及したことを強調している。グットマンは、スポーツの世界化の脈絡を説明する際に文化ヘゲモニー⁹⁾ということばを用いて、文化帝国主義¹⁰⁾との微細な差異を主張している。それは、野球を通じて、ヘゲモニー国家アメリカが日本に文化的影響を与えたとする文化帝国主義の一面を認めつつも、伝播は定向伝播の構造や単一経路をとるのではなく、微細な権力構造のベクトルを介するとして、単純なる文化帝国主義を批判する立場でもある。

いずれにしても、こうした海外の研究者による日本スポーツ分析は、帝国主義または文化帝国主義、文化ヘゲモニーの概念を用いようとも、先に述べた西欧と伝統的な日本的価値観との融合をベースにした折衷論を批判継承したものであると言える。

他方、坂上康博は、明治期の学生野球に着目し、一高の「武士道野球」を検証している。その中で、ローデンの言及した日本スポーツ規範への社会ダーウィニズムの影響を批判しながら、野球との結びつきを「帝国主義とスポーツとが強固に結びつく時代に突入していたことは明白だが、少なくともこの段階においても、一高における野球は、帝国主義や天皇制国家のイデオロギーを伝達し、再生産していくような文化装置へと編成されたわけではなかった」¹¹⁾と否定し、かつ「帝国主義との関連といったイデオロギーレベルでいえば、野球と武術、この両者はまったく違ったものだった」¹²⁾と述べている。すなわち、坂上のいう「武士道野球」とは、「野球部員みずからが主体的に構築していった独自のスポーツ価値観」¹³⁾であった。

したがって、日本のスポーツ規範の形成過程は、未だに明瞭でない点があり、折衷の構造の明確化が必要である。また、先行研究において、「武士道」それ自体が定義されておらず、時代ごとの変容も問わず、日本の伝統的な価値観として一括りに概念定義化している点も問題であるように思われる。

すなわち「武士道」自体に着目した場合、必ずしもそれが固定的な概念であり続けたのかも疑問である。その上、時代ごとの「武士道」の概念の変容や融合の実態はこれまで精緻に整理されてきたとは言えないように思われる。

例えば、坂上は、「武士道野球」の価値観を独自のスポーツ観と表現しているが、この独

自のスポーツ観である「武士道」が、後述する幾つかの「武士道」のどの概念を野球における「武士道」としたのかが不明であるように思われる。

これについては、ローデンも、「武士道」を日本の伝統的な規範として扱っているが、それを細分化して定義してはおらず、スポーツ規範における「武士道」規範の概念は整理されていないといえる。

加えて日本固有のスポーツ規範と表現されてきた「武士道」とはいかなるものであり、日本におけるスポーツ規範形成にどのような役割を果たすものであったのかを問う研究は少なく、スポーツと「武士道」の関係は曖昧なままである。

一方、「武士道」の形成に関する研究に眼を向けると、「武士道」自体は伝統性を有していないことが分かるという矛盾に遭遇する。すなわち、菅野覚明が「明治武士道」と呼んだように、「武士道」自体、明治時代に形成されたことが次のように主張されている。

明治武士道は、武士道の復興を唱える思想である。その限りで、確かにそれは、かつて存在した武士たちのあり方に依拠して成り立っている思想である。だがそれは、人々に向かって、私の意地によって人を切る戦闘者たれと勧める思想では全くない。…中略…武士というあり方の根幹にかかわる部分が排除されたところで語られる、いわば武士道の断片、残滓であるにすぎない。とはいえ、明治以来今日に至るまで、人々が武士道の名で親しんできたのは、他でもないこの「明治武士道」である…中略…[なぜ「武士道」と名づけたのかについては] 欧米列強との関係ということが大きな理由となっている…中略…新生明治国家の国民道徳の指針は、日清開戦の四年前に、すでに『教育勅語』として発布されていた。日本民族の道徳的自覚は、広く天下に示されていたのである。しかしいうまでもなく、「国体の精華」が普遍的道徳であるという説明が、西洋人に通じるはずがない。日本民族の精神が、キリスト教道徳とも通じる普遍的道徳であることを理解させるためには、もっと別の説明が必要である。だが、そんな言葉が果たしてあるのか。その言葉は、何と当の日本人すらも忘れかけていた、封建時代の「旧弊」の中にひっそりところがあった。それが「武士道」である…。¹⁴⁾

このように「武士道」と呼ばれた理由は、欧米列強が、日本が普遍的道徳を有していることを理解するうえで分かりやすかったためであったとされている。さらに、菅野は、「武士道」には、「井上哲次郎のような国家主義者よるものと、新渡戸稲造…中略…ら、キリスト教徒によるものとの二つがある」¹⁵⁾と「武士道」が単一の思想ではなかったことを指摘している。両者に共通する点は、「武士道を日本民族の道徳、国民道徳と同一視している」¹⁶⁾ ことにあると述べているように、ナショナル・アイデンティティを形成する点においては両思想は同様の構造を有していた。

また佐伯真一も、新渡戸稲造が「〈武士道〉の用例を知らなただけではなく、そもそも日本の歴史や文化そのものにあまり詳しくなかった」¹⁷⁾と新渡戸の「武士道」は明治期

に、新渡戸の手によって創りだされたものであり、歴史や伝統と乖離していることを指摘している。

以上のような指摘を吟味すれば、スポーツ規範における「武士道」とは伝統の維持にかかわっていたのか、佐伯や菅野らがいう、新しい「武士道」との関係において生じた概念であったのかという問題を考慮する必要がある。

次に、西欧化自体が抱える問題について述べておきたい。すなわち、何をもって外来規範の流入とみるかという点で、西欧化自体に対し、分極化して捉える構造分析が必要であり、先に述べたように、帝国主義的脈絡の影響を受けた社会ダーウィニズムによるものか、文化帝国主義ないし文化ヘゲモニーによる伝播に起因するものかといった分析が不可避である。

西欧近代とスポーツの関係は、疑いの余地がないとしても、帝国主義的脈絡のもとで派生した社会ダーウィニズムに基づくものであったのか、あるいはキリスト教青年教会（Young Men's Christian Association 以下 YMCA と略す）を通じて、インドアスポーツを伝えた植民地でのキリスト教布教活動の影響によるものであったのか、さらに、アマチュアリズムに集約されるイギリス文化¹⁸⁾の模倣を意味するものであったのか、北欧流の徒手体操やドイツの規律訓練（トゥルネン）¹⁹⁾に求めるものであったのか、プロフェッショナルリズムを重視したアメリカ流のスポーツ²⁰⁾への迎合を意味するものであったのかなど、西欧と一括りに言っても、それぞれに異なる特徴を有しているこうした特性の何と「武士道」が結びつく必然性にあったのかという因果関係も不明である。

そこで、拙著「日本における近代スポーツ規範形成に関する研究—増田義一著『思想善導の基準』（1921）にみる英国化とその限界—」（平成 24 年度山口大学大学院教育学研究科修士論文）の中では、イギリスのスポーツ規範の影響に限定して注目した。その中では、イギリス発祥のボーイスカウト運動が日本で広まると、その理念が翻訳された。一例として、「一日一善」にみられるような英国規範の普遍化をみることができた。

こうした例は、スポーツにおける「武士道」を再評価する際、日本のスポーツ規範にイギリスのスポーツ規範の影響を加える必要があることを暗示している。「武士道野球」を体現したのは一高の野球部であったと言われている。彼らの学校生活は、国家を担うエリートになるために、自治制の全寮寄宿舎で生活し、そこで愛校心を育み、課外活動として、スポーツに打ち込み、身心を鍛え、スポーツ規範を学ぶことでエリートの素養を身につけ、日々学問に励むというものであった。しかし、こうした学校生活はイギリスのパブリックスクールにもみられる。

池田恵子が、「イギリスのエリート養成教育機関、パブリック・スクールから輩出されたジェントルマンは、新国家体制を担う未来のリーダーとして養成される必要性から、マスキュラー・クリスチャニティの理想に貫かれたスポーツ教育イデオロギー、すなわちアスレティシズムのもとで教育されていた」²¹⁾と述べているように、十九世紀後期のイギリスにおけるエリート教育とは、国家を担うエリート（ジェントルマン）になるための素養を

自治制の全寮寄宿舎の中で生活し、愛校心を高め、スポーツによって備えられる筋骨たくましい身体とアマチュアリズムの精神が育むというものであった。

イギリスではアスレティシズムとして、日本では「武士道」として、スポーツによる人格陶冶が行なわれていたことは、単なる偶然ではないように思われる。

これに関し、思想善導とアスレティシズムの関係を明らかにするために、たとえば舩場大資と前述の池田は、日本における西欧化の構造を細分化し、とりわけ日英同盟期にもたらされた英国規範の影響に着目している²²⁾。

以上を踏まえ、本研究では、以下の方法を用いて、日本のスポーツにおける「武士道」規範が、どのように構築されたのか明らかにする。

〈方法論〉

第一に、日本におけるスポーツ規範形成の構造を明らかにするには、明治期のスポーツに影響を与えた「武士道」論自体がどのようにして形成されたのかを前提とする必要がある(第1章 「明治武士道」規範と「文明の精神」)。

具体的には、西欧論者にみる「武士道」の影響について論じる。それらは、新渡戸稲造の言う「修養」と伝道活動に代表される(第1節 「明治武士道」の形成 /第1項 西欧的規範の啓発論者にみる「武士道」—新渡戸稲造の『*The Soul of Japan*』—)。加えて、社会ダーウィニズムや西欧流の「文明の精神」による影響について検討する(第2項 社会ダーウィニズムと「文明の精神」)。次いで、新渡戸が積極的に関わった雑誌『実業之日本』や、その発行者でもあり、「武士道」に言及された増田義一にみる「新士道論」の与えた影響について吟味し、当時の「武士道」論を整理し、複層経路からの融合的側面を捉える(第2節 新渡戸稲造と増田義一にみる「武士道」の普及過程 /第1項 実業之日本社が果たした役割 /第2項 新渡戸稲造の「修養」と伝道活動 /第3項 増田義一の「新士道」論)。以上を総じて、新渡戸ら西欧論者の主張が与えた「武士道」への影響を検討する。

第二に、「武士道」が西欧規範に基づくものであったのかについて問う。たとえばローデンは、一高野球部がアメリカに野球で勝利した際、「彼らの大勝利は、国家への没我的献身として新聞紙上では激賞され、学生たちもまた自らの社会的地位を高めたのであった」²³⁾と述べ、帝国主義的な様相と国家への奉公という姿を映し出すことで、それが帝国主義的社会ダーウィニズムによるものと結論づけている。

一方、坂上は、野球と帝国主義の結びつきを、当時の野球論を比較しながら検討している。高山樗牛の野球論について「野球とチームプレーの精神が帝国主義時代を勝ちぬくための共同的精神と結びつけられている。ここでは社会的ダーウィニズムとスポーツの結合がたしかにみられる」²⁴⁾としながらも、中馬庚の野球論を引き、「中馬は、社会ダーウィニズムとスポーツの結合を自明のこととして受けとめつつも、高山樗牛のように野球の価値をそうしたイデオロギーと結びつけて主張することはしなかった」、高山と異なり「野球の実践の場である学校に照準を定めて、野球がもつ独自の価値や学校文化としての野球の

魅力、パワーについてみずからの考えを主張したのである。帝国主義のイデオロギーとは次元が異なるこうした価値を彼は全面に押し出したのだ²⁵⁾と述べ、野球の価値が、社会ダーウィニズムと異なる点を重視している。

そこで、この両者の差異を明らかにするために、当時のエリート養成教育機関であり、「武士道野球」の体現者となる第一高等学校が重視した西欧規範について検討したい。

とりわけ、一高生にみる英国のトーマス・アーノルドの思想の影響、極東版『トム・ブラウンの学校生活』としての側面に注目した（第2章 社会ダーウィニズムと「文明の精神」—西欧規範としての「武士道」の創造—）。その際、東京大学と一高（東京大学予備門時代）に英国的なスポーツをもたらした F.W.ストレンジの果たした役割は無視できない。彼は教師としてもプレイヤーとしても一高生たちを魅了した。²⁶⁾ ストレンジに関する研究は、近年、阿部生雄や高橋孝蔵らによってその詳細が明らかにされている（第1節 東京大学予備門時代—F.W.ストレンジと運動会—）。

次に、一高に自治制寄宿舎や校友会を設置した木下広次²⁷⁾に着目する。彼の教育改革は、学生に「自治」や「男らしさ」という新しい価値観をもたらした。木下の行なった学校改革は、一高生が国家を担うエリートになるためになされたものであり、そのこととスポーツがどのような関係にあったのか、木下校長時代を考察していく（第2節 木下広次校長時代 / 第1項 木下広次のエリート像について / 第2項 寄宿舎の設置 / 第3項 校友会の設置 / 第4項 極東のパブリックスクール）。

次いで、木下によって創られた一高の伝統が、どのように定着していくのかを明らかにしておきたい。とりわけ「武士道」における第一人者であり、学生からの支持を得ていた新渡戸稲造校長時代は、より詳しく検証する必要があると考える（第3節 木下以降の校長時代 / 第4節 新渡戸稲造校長時代）。

このようにして、第2章では、社会ダーウィニズムと「文明の精神」が、当時のエリート校における教育改革を通して、スポーツに関与したことを明らかにするが、実際の学校生活や寮生活、そして部活動で培われていく校風論は、学生にどのような影響を与えていくかについての分析が必要になる。エリート学生にみるスポーツ規範についてより焦点化していく（第3章 フィールドにみるスポーツ規範と「武士道」）。

ここでもその形成と変容を詳細に検討するために、時期を区分した（第1節 スポーツにおける「明治武士道」の形成）。

まず、日本に近代スポーツが紹介された時期に着目する。英国人教師が伝えたスポーツとその中身を考察する。（第1項 『戶外遊戯法』、『*Outdoor Games*』）。

次に、ナショナリズムが高まる時期²⁸⁾にあたる日清・日露戦争期に着目したい。具体的には、1900年前後に刊行されたスポーツ雑誌『運動界』の記事からエリート学生のスポーツ観にどのような変化がみられるのかを考察し、文化ナショナリズムの影響について論じる（第2項 雑誌『運動界』にみるスポーツ規範と「武士道」の啓発）。

第2節では、学生スポーツの中でも特に人気を博した野球に注目した。野球は明治期に

において最も日本人を熱狂させたスポーツであった。その担い手であったエリート学生たちの姿は「武士道」野球と呼ばれた。この「武士道」野球における「武士道」規範の概念を検討する。その際「武士道」の中心にあった一高に注目する。一高野球部の勝利は、選手も学友も世間も熱狂させた²⁹⁾。不平等条約下で、西欧に日本が野球で勝利することは、エリート学生に何をもたらしたかを検討する。また、一高にみる「武士道」観の違いとして、野球部と撃剣部の価値観を「帝国主義との関連といったイデオロギーのレベルで」³⁰⁾、異なっていた点にも触れる（第2節 一高野球部にみるスポーツ規範と「武士道」）。

とはいえ、スポーツが、ただ帝国主義のイデオロギーに追随したわけではなかった点にも触れておく必要がある。フィールドにおけるスポーツの有様、実際のスポーツ選手の気質、エリート養成教育機関以外の地域の青年教育における規範教育の試みについても触れ、日本における近代スポーツ規範形成の全様を補完しておきたい。

陸上競技に着目すると、明治時代以降、イギリス人が持ち込んだ運動会³¹⁾とともに陸上は、学生に身近なスポーツとなり、国際的に活躍した選手は、1920-30年代に戦前のピークを迎え、国際舞台でアマチュアリズムが発揮された（第3節 極東アジア選手権大会にみる日本選手団とアマチュアリズム）。

後者に関しては、日本における青年会の組織作りや規範形成において重要な役割を果たした山本瀧之助に着目した。日本青年館は、彼のことを大恩人と評価している³²⁾。山本は、青年会にボーイスカウト運動を取り入れた人物でもあり、ボーイスカウトの規範を日本に普及させた。具体的にはボーイスカウトの理念であった「一日一善」といった英国規範が、民衆に日本的価値として定着していく過程を考察する（第4節 英国スポーツ規範の普遍化の事例―「一日一善」の形成―）。

以上により、エリート教育機関における帝国主義の意図とスポーツの関係、実際のスポーツ場面と「武士道」の関係が明らかになるが、入江克己が大正自由主義体育はファシズムへの連鎖を用意した³³⁾と述べているように、エリート教育機関で創られた「武士道」がファシズム下の「武士道」へと変容する契機についても言及しておく必要がある（終章 ファシズムによる「武士道」の変容）。

このように検討することを通じて、日本におけるスポーツ規範形成と「武士道」の関係を明晰にしたい（結論 日本のスポーツ規範「武士道」の再考）。

註)

1) 岸野雄三、竹之下休蔵『近代日本学校体育史』東洋館、1959年、50頁。

2) 木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年、110-111頁。

3) ドナルド・T・ローデン（森敦監訳）『友の憂いに吾は泣く（上）（下）』講談社、1983年。

4) 阿部生雄「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成―チャールズ・キングズリを中心として―」『岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求』岸野雄三教授退

官記念論集刊行会、1832年3月、132頁。

5) 同上、133頁。

6) 入江克己『日本近代体育の思想構造』明石書店、1988年11月、279頁。

7) アレン・グットマン (谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳) 『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂、1997年8月、94頁。

8) 同上。

9) 文化帝国主義とは、ジョン・トムリソンによって「政治的・経済的領域でなく、集合体が、自らの活力を自覚できる活動全般に関する…支配の一形態」と定義されている。スポーツで言えば、アメリカの影響力の高い地域に野球が波及し、英国の植民地でクリケットが流行した現象をさす。力のベクトルで言えば、上から下にはたらく。(アレン・グットマン[谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳]『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂、1997年8月、8頁。)

10) 文化ヘゲモニーとは、アントニオ・グラムシが、「支配者と被支配者の政治的關係は、前者によつて絶対的支配と後者の絶対的服従の結果だと単純に規定されるものではない」という概念を文化の領域にて適応した概念である。すなわち、植民地において、ただ文化帝国主義の力のみで、スポーツが行われたのではないとする概念。(同上、7-8頁。)

11) 坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年、102頁。

12) 同上、100-101頁。

13) 同上、154頁。

14) 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年、232-274頁。

15) 同上、260頁。

16) 同上、261頁。

17) 佐伯真一『戦場の精神史』NHK ブックス、2004年、255頁。

18) リチャード・ホルト (池田恵子訳) 「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン - スポーツ文化の分析 -」『体育史研究』第27号、2010年、1-11頁。

19) 石橋武彦、佐藤友久『日本の体操』不昧堂、1966年。

20) 寺島善一、川口智久「6 新大陸におけるスポーツ観」体育原理専門分科会編『スポーツの概念』不昧堂、1986年4月、129-141頁。

21) 池田恵子「ジェントルマン・アマチュアとスポーツ—十九世紀イギリスにおけるアマチュア理念とその実態—」望田幸男、村岡健次監修、有賀郁敏編『スポーツ』ミネルヴァ書房、2002年、5頁。

22) Funaba, D & Ikeda, K, “*Britain and the Development of Modern Japanese Sport: from Sporting Amateurism to Fascism during the period of Japanese Imperialism*”, *Pan Asian Journal of Sports & Physical Education*, Vol.3 No.1., Mar 2011, pp.9-16”

23) ドナルド・T・ローデン (森敦監訳) 『友の憂いに吾は泣く (上)』講談社、1983年4月、232頁。

- 24) 坂上、前掲書、83頁。
- 25) 同上、86頁。
- 26) 高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師』小学館、2012年6月。
- 27) 富岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成—木下広次（一高校長）を中心に—」『京都大学教育学部紀要』第40号、1994年、237—246頁。
- 28) 籠谷次郎「国民教育の展開」井口和起編『日清・日露戦争』吉川弘文館、1994年10月、170—195頁。
- 29) ドナルド・T・ローデン、前掲書、229—233頁。
- 30) 坂上、前掲書、100—102頁。
- 31) 平田宗史「わが国の運動会の歴史」『運動会と日本近代』青弓社、1999年12月、85—128頁。
- 32) 後藤文夫「序文」日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1985年12月。（ただし、「序文」が書かれたのは、初版が刊行された1931年11月である。）
- 33) 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年9月。

第1章 「明治武士道」規範と「文明の精神」

日本の近代スポーツ規範を語る際に「武士道」という価値観は、しばしば重要視される。序章でふれたように、菅野によれば、そもそも「武士道」という概念は、明治期に創られたものであり、「明治武士道」¹⁾と呼ばれている。また「武士道」といっても、西欧論者による「武士道」、国体論者による「武士道」があると指摘されている。

そこで、本章ではこの「明治武士道」が、どのような規範を携えることで、近代国家の国民を形成していく媒体となり得たのかを検証し、スポーツ規範における「武士道」との関連を明らかにする。

第1節 「明治武士道」の形成

第1項 西欧的規範の啓発論者にみる「武士道」—新渡戸稲造の『*The Soul of Japan*』—

菅野が言及しているように、「武士道」には二つの潮流があり、西欧論者による「武士道」といった区分が存在する。

加えて、「武士道」の著名な西欧論者として、菅野や佐伯真一は、新渡戸稲造に着目している。新渡戸は第一高等学校の校長を務めた時期があり、一高における武士道野球の伝統を考える上で彼の武士道論を無視することはできないであろう。

周知のように、新渡戸稲造著の『*The Soul of Japan*』（1908年に『武士道』として、翻訳出版された）は、1899年のアメリカにて出版された。日本では、翌年にあたる1900年に英語版が刊行され、そして、和訳版は1908年にそれぞれ刊行された。また今なお彼の「武士道」に関する著作は出版され続けている。

しかし、この新渡戸の「武士道」論が、伝統性を有していないことはこれまでも指摘されている。例えば、佐伯は、「新渡戸は、〈武士道〉の用例を知らなかっただけでなく、そもそも日本の歴史や文化そのものにもあまり詳しくなかつたようである。それは新渡戸『武士道』の内容の問題でもある。この書の歴史記述の貧困さについては、早く津田左右吉の書評〈武士道の淵源について〉などによって指摘されており、最近では西義之や太田雄三が厳しく批判している」²⁾と述べている。

しかし、こうした明治期に登場する「武士道」論の歴史性を問う問題は、新渡戸だけのものではない。佐伯は、「歴史的に用いられてきた〈文字の出所〉には関係なく、当時〈普通に汎称〉されている言葉としての〈武士道〉に基づき、その内容としては自分の抱いている武士道徳のイメージを当て、根拠としては古来の逸話を適宜拾い出すという手法は、近代〈武士道〉論が出発点から抱え込んでいたものであった。歴史的根拠が先にあつたのではなく、幕末から明治にかけて漠然と形成された通念、あるいは明治時代後半の流行に基づいて、歴史的根拠が探索されたわけである。〈武士道〉の用例を探しあぐねた〈武士道〉論者にとって、やがて訪れる『葉隠』の発見がどんなに喜ばしいものであつたか、想像にかたくない」³⁾と述べて、明治期に「武士道」が創られていく背景に言及している。

こうした指摘は、「武士道」が可変的なものであり、流行に即した新しい「武士道」論が、次々と誕生したことを示唆している。

周知のように、新渡戸の「武士道」論は、日本でも好評を博するが、このことに関し、佐伯は、『武士道』が大好評を博したのはアメリカで発表されたからであり、日本でも好評だったのは、欧米で好評だったからであろう。最初から日本で発表されていたとしたら、西洋嫌いの〈武士道〉論者、〈武士道〉は世界に二つとない日本固有の伝統だと主張していた者たちに、猛反撃をくらっていたかもしれない⁴⁾と述べているように、新渡戸の「武士道」論は、当時の感覚からしても西欧的なものであったと言える。

事実、新渡戸自身も「もと本邦の道德観念の…中略…外人に示さん目的なれば、彼等の理解し易き実例と文体を取り、欧米の歴史文学に比較することを勉めしを以て、邦人にして一読せられんか論述の方法固より迂遠視せられん。故に余は今日まで其の和訳を躊躇せしならん」⁵⁾と外国人に読んでもらうことを目的にしているため、和訳を許可しなかったと述べている。

すなわち、新渡戸は、日本人を啓発するために「武士道」を著したのではなく、西欧人に分かるように、西欧の規範を元に「武士道」論を展開した。つまり、世界に対して、日本が先進国の一員となるべく規範を携えていることを示す目的があったように思われる。その証拠として、新渡戸の『*The Soul of Japan*』は、西欧の文明を日本的脈絡になぞらえて紹介している。このことは、「武士道」の用例の説明でてくる人物が、「日本人が二〇名であるのに対して、外国人名は一四〇名を超える」⁶⁾ことからもうかがえる。また、新渡戸も「凡そ歴史上、欧州^{シヴァリ}武士道と日本武士道との如くに、酷似せるものあるは甚だ稀なり」⁷⁾と述べているように、騎士道と「武士道」を同義のように考えることができると説明することで、西欧規範を「武士道」として紹介する下地を整えた。こうした西欧規範を「武士道」として紹介する論者は、新渡戸だけではない。

例えば、その新渡戸が編集顧問に就いていた当時の人気雑誌『実業之日本』に、衆議院議員濱口鱒は、ケンブリッジ大学での留学経験から「余の実見せる英人の武士的精神」（1908年）を投稿している。

また菊池大麓も「余の英国にて感じたる競争上に於ける武士道」を投稿している。菊池については後述（第2章）する。まず、濱口の「武士道」論に着目したい。

『英人の紳士道と我国の武士道』（旧字体は常用漢字に直した。また句読点と送りがないを加えた。）

アイアム、エ、ゼントルマン（我は紳士なり）と言う一語は恰も「天川屋儀兵衛は男で御座る」というのと、同一なる重味ありて、其の裏には虚言を言わぬというとも、高尚なる品性も、公明正大と言う事も、勇気も、礼儀も、不撓不屈の精神も、人倫五常の道も、何も彼も皆な含まれて居るので、英人は「彼はゼントルマンでない」と云る事が、社会的に死刑の宣告を受くると同様に感じて、只其の後れざらん事のみ力

むるのであるが、我国の其の昔、武士の一語に身命を賭けたのと、其の状毫も変りないのである⁸⁾

ここでは、ジェントルマンシップと「武士道」の同一化を図ろうとしていることを読み取ることが出来る。濱口は、イギリスという世界最高峰の先進国に留学したことで、文化等を体感し、感銘を受けたと思われるジェントルマンシップを理想としている。そこで、イギリス人が重視していた高尚な品性や、公明正大、勇氣、礼儀といった徳が、「武士道」の徳であると説明されている。佐伯の指摘しているように、イギリスのジェントルマンシップという西欧規範に、あとから日本古来の逸話を持ってくるという手法はここでも見られる。さらに言及すると天川屋儀兵衛は商人であり、武士階級の間人ではない。しかし、庶民に人気のある話（赤穂義士）に登場し、赤穂義士を支援する彼の一言は、濱口からすれば、フェアプレイの精神を持った江戸時代の間人と後付けするのに適した故事だったのであろう。

『英人は彼方に向いて居る兎は撃たぬ』

私が英人の気風に関し最も感心するのは、その^{フェアプレー}公平ということである。例えば、英人が獵に行く、兎が彼方に向いて伏して居るを見付けても、決して其れを撃たぬ。必ず人が来たということに気が付いて、逃げ出す時でなければ其れを撃たぬのである。

…中略…

此の一例に依て英人が禽獣の小なるものに対しても、尚且つ双方同一の地歩に立ち、^{フェアプレー}公平を為すの用意を見るべく、況んや人事の百般に対しては、一層適切に此の^{ジェントルマンシップ}武士道精神を發揮して居るのは云ふまでもなく、誠に美しい事である。

…中略…

我が上杉武田の両将相戦う時も、塩を送って敵の欠乏を慰めたといふ美談もある。…中略…。男らしい気風の致すところで、実に桜花国の武士の精神は此くまで床しい所があったのである。英人が政治、商業其の他に關し戦闘するその態度は、誠に此の如しである。⁹⁾

上記では、イギリス人が油断している兎を撃たないという狩獵のスタイルを「フェアプレイ」として紹介している。ここで濱田が啓発した規範とは、イギリスのスポーツ規範であるフェアプレイであった。続けて、それは日本人も古来から有していた価値観であると述べた。

しかも、それを「武士道精神」であると表現し、ジェントルマンシップのルビを付している。上では、上杉が武田の危機に塩を送ることで窮地を救うという有名な故事をあげているが、佐伯によれば、「現在、これを史実と見る人はほとんどいないだろうし、『武将感状記』自身はこれを美談とせず、信玄が北条や今川と戦っている間に自らが北国を従えよ

うとした深慮遠謀である」¹⁰⁾と説明している。さらに、「しかしそれでも、卑怯な策略を排し、正々堂々と戦うことをよしとする価値観が、江戸時代前期にはある程度一般的なものとして存在したことが一応認められるのではないか。だが同じ江戸時代前期に読まれた書物である『理尽鈔』に、もしもこの謙信の話が取り上げられたならば、愚の骨頂ともいうべき行為として罵倒されたことは疑いない」¹¹⁾と述べている。

上杉と武田の故事の真偽はさておきたい。重要なことは、江戸時代において、武士階級からすればその評価は分かれたようであるが、近代においては美談になる点である。なぜならば、濱口からすれば、ジェントルマン階級が理想とした徳義であるフェアプレイの精神に似通っている話であると引き合いに出すには十分な中身だからである。

すなわち、「明治武士道」は、西欧規範に類似する武士の故事を探し出し、西欧規範を「武士道」として紹介する手法を用いていると言える。この上杉と武田の故事は、新渡戸も『武士道』のなかで紹介している。彼らの川中島の戦いなどから見るライバル関係は「ブルータスの死を惜しむアントニウスとオクタヴィアヌス」¹²⁾の関係として例えられた。塩の故事は、以下のように評価した。

これは、カルミス（古代ローマの将軍）の言った「ローマ人は金をもって戦わず、鉄を持って戦う」との言葉にも匹敵し、なお余りあるものがある。ニーチェが「汝の敵を誇りとすべし、しからば敵の成功はまた汝の成功なり」と述べたのは、まさしくサムライの心情を語ったといえる。実に勇気と名誉は、ともに価値ある人物のみを平時の友とし、戦場の敵とすべきことを求めている。勇気がこの高さに到達するとき、それは「仁」に近づく¹³⁾

上記では、新渡戸も例示した塩の故事は、手放しに賞賛すべき行動であり、批判すべきでない物語へと変換されていた。またニーチェの言葉でサムライの心情を表現するなど、西欧の哲学が「武士道」に取り入れられていく様子がみてとれる。

この塩の故事を新渡戸はフェアプレイの論理として紹介（1899年）してはいないが、濱口はフェアプレイとして紹介（1908年）していく。

こうした西欧規範を「武士道」として紹介し、史実にすり替えるのが「明治武士道」であったように思われる。むしろ世の中がそうした修辞を受け入れた結果、新渡戸の「武士道」を元来のサムライの価値観とは異なる今日流の日本国民の伝統的規範道徳として定着させる錯覚を作り出したと言える。

新渡戸が、フェアプレイという言葉を用いて、「武士道」を説明している箇所も存在する。それは、第1章「BUSHIDO AS AN ETHICAL SYSTEM」（櫻井訳では「武士道の倫理系」）の中にあり、項目の見出しは、「Fair play in Fight!」であった。1908年に初めて和訳された櫻井鷗村訳『武士道』では、フェアプレイの語は、「喧嘩なら堂々とやれ!」¹⁴⁾と翻訳されていた。

一方で、2005年に刊行された（岬龍一郎訳）『武士道』では、「勇猛果敢なフェア・プレーの精神」¹⁵⁾とそのままフェアプレーのカタカナ表記を残している。

この表現の差は、年代が遡る翻訳においては、より日本的表現にするために苦心した結果ではなかったかと考えられる。初版の刊行から9年の歳月を経て、はじめて新渡戸が翻訳を許可し、翻訳にあたり、新渡戸も校閲したことから、かなり注意深い検討の後、和訳本を出版する必要があったことがうかがわれる。

実際、訳者の櫻井は「博士の此の著たる元、海外読者の為にせり」と前置きをした上で、「世人の或は解知に苦しむものあらんことを憂へ、博士と議り、原文に就きて、多少の修補削減を施したる所あり。而して訳文は悉く博士の校閲を経たりと雖も、文字の積は一に訳者に在り」¹⁶⁾と述べており、海外読者を念頭において書かれた書の翻訳であるゆえに、苦勞が伴ったこと、新渡戸自身の修正や校閲が必要とされた事実が示されている。

それゆえ、新渡戸は、あまり西欧的な中身に見えすぎないように、『武士道』の中身を日本語化したと考えられる。新渡戸のフェアプレイに関する叙述は、英語版も櫻井訳本も基共通しており、以下に示すように、イギリスの人気小説『トム・ブラウンの学校生活』から引用されている。また、その後続く説明として、「武士道」が登場する。

私たちはイギリスの小説の主人公、トム・ブラウンの「小さな子をけっしていじめず、大きな子から逃げなかった者、という名を後に残したい」という少年らしい願いに、微笑むであろう（まるでそんなことはもう卒業したかのように！）。だが、この願いこそ道徳律の萌芽であり、すべての道徳の壮大な建造物が築かれる礎石といえるであろう。もっとも穏やかで、もっとも平和を愛する宗教でさえ、この願望を認めているといえ、それは言い過ぎであろうか。このトムの願いの上にかの偉大な英国の大半が築かれたのである。そしてこれに優るとも劣らず、わが日本の武士道の土台もけっして小さくないことが、ほどなくわかるだろう¹⁷⁾

以上のように、主人公トムがパブリックスクールの生活のなかで、エリートとして成長していく物語になぞらえても、「武士道」は見劣りしないものであることを新渡戸は序盤で示している。またその理由は、この本を読み進めていけば分かるとも言及している。パブリックスクールは、「イギリスに独特なエリート教育のための学校」¹⁸⁾であり、「集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手段」¹⁹⁾としていた。

すなわち、新渡戸の『武士道』は、伝統的と考えられてきた武士道の精神とは異なり、先行研究が批判してきたように、「それまでの歴史からは断絶した、新しい〈武士道〉」²⁰⁾であった。そして、新渡戸が言うところの、西欧規範に見劣りしない「武士道」は、日本の故事を新渡戸自身が西欧の価値観に即して解釈し直すことによって成立している。

例えば、第七章「至誠 真実」（英文 VERACITY OR TRUTHFULNESS）では、「嘘をついたり、ごまかしたりすることは、卑怯者とみなされた。武士は支配者階級にあるだけ

に、誠であるかどうかの基準を、商人や農民よりも厳しく求められた」として次のように述べている。

「武士の一言」すなわちサムライの言葉は、ドイツ語のリッターヴォルト (Ritterwort) に当たるが、それはこの言葉が真実であることを保障した。…中略…サムライが八百万の神々や自分の刀にかけて誓ったことを私は知っている。…中略…ときには、その言葉を確固たるものにするために文字通り血判を押すという行為もとられた。こうした行為の説明には、読者のゲーテの『ファウスト』を参照にされることを勧める²¹⁾

武士が嘘をつかないという真偽はさて置き、その例として、ゲーテの『ファウスト』を提示するほうが西洋人には分かりやすい。しかし、『ファウスト』は、キリスト教の神と悪魔と人間の話である。それにも関わらず、サムライが、神や刀に誓う行為について『ファウスト』を参照せよと述べている。新渡戸は西欧文学の傑作を日本文化の一部のように紹介した。このように新渡戸の「武士道」論をはじめとする西欧論者たちの「武士道」は、西欧規範を日本規範に置き換え、日本にも「文明の精神」があるのだということを西欧列強諸国に示すための装置として機能したと考えることができよう。

以上のように、西欧論者の「武士道」論は、西欧規範を「武士道」に変換する構造を持っていた。こうした事実をもとに、スポーツという西欧文化が、どのように「武士道」として置換されていくのかを明らかにしたい。そこで、第2節では、新渡戸の『武士道』が、西欧社会の精神をどのように尊重していたかについて考察する。

第2項 社会ダーウィニズムと「文明の精神」

19世紀中葉頃から、英国では、近代スポーツによって人格を陶冶するという思想が登場する。スポーツを通じた人格陶冶として、スポーツ教育思想としてのアマチュアリズムやアスレティシズムが重視された。アマチュアリズムはフェアプレイの精神を重視し、アスレティシズムを通して「男らしさ (マンリネス)」の規範が、ジェントルマンの素養として啓発された。こうした精神の獲得は、英国のパブリックスクールの教育システムによって確立され、英国内にとどまらず、世界中に広がった。例えば、よく知られているように、近代オリンピックの創始者、ピエール・ド・クーベルタンはアマチュアリズムをオリンピックの中で最も重視した。彼は「オリンピックの国際主義的性格を主張」し、「オリンピック理念を普及させ、その啓蒙の光を広める」²²⁾ ために、世界各地でオリンピックを開催する。その際に、英国のパブリックスクールで用いられていたスポーツ教育思想をオリンピックの理想に反映させたと言われている。

新渡戸が『武士道』を出版したのはアメリカであった。当時の日本では西欧列強諸国からの侵略に備えた近代化が急務の課題であった。日本は、西欧の社会システムや西欧式軍隊を取り入れつつ、近代国民国家の確立に向けて整備を進めていく。このときに西欧思想

の吸収も重要な役割を果たした。W. G. Beasley は『*The Rise of Modern Japan*』の中で、日本の近代国民国家の形成に関して、福沢諭吉を引用しながら、「西欧規範の啓発と文化的保守主義 Enlightenment and Cultural Conservatism」の関係について以下のように説明している。

日本は中国やトルコと同様に、社会ダーウィニズム主義者の言うところの准文明国に位置づけられており、それゆえ、(文学、芸術、商業あるいは産業において、重大なことから些末なことに至るまで)、西欧諸国に劣っていると認識されている。加えて、次なる高次の進化を遂げるためには、単なる産業や軍隊の強化ではなく、日本国は「文明の精神」を獲得する必要がある²³⁾。

この目的を達成するために、(商業の鉄則として過去の慣習への盲従から決別すること)と福沢は主張する。とりわけ、ここでは絶対主義的で権威主義的な儒教のことを指している。なぜならば、これらは中国の伝統であり、彼が思うに、それらの放棄は日本の土着の文化の拒絶につながる、むしろ中国的要素をより優れた西欧的要素に置き換えるだけのことである。儒教的教訓に従う専制的な権力は、支配者が家来に、親が子に、夫が妻に対し行使してきたものであり、適切に定義されるところの文明というものとは、相いれないものであると彼は確信していた。²⁴⁾

ビースリーは、明治期に上記のような立場をとった人物として、福沢諭吉と徳富蘇峰といた人物の名を挙げている。

このように、「文明の精神」を獲得するために、これまでの慣習を西欧の慣習に置き換える必要があったことが示されている。それゆえ、新渡戸の『*武士道*』も「文明の精神」を啓発する上で、同様の構造を有していたと考えられる。また、新渡戸が福沢を尊敬していたことは有名であり、新渡戸稲造著『*西洋の事情と思想*』は、福沢諭吉の『*西欧事情*』が念頭にあったと鈴木範久は述べている。²⁵⁾ さらに、岬は『*武士道*』が「アメリカ、イギリス、ドイツ、ポーランド、ノルウェー、フランス、中国でも出版され、いちはやく世界的な大ベストセラーと」なった理由について、『*武士道*』は、人間としてかく在るべきという道徳規範の本であり、たとえ国や民族が違っても、人が健全なる社会を築き、美しく生きようとするときの“人の倫”に変わりはなかった²⁶⁾ ためであると分析している。『*武士道*』の「人の倫」とは、英国精神の拡大にみられように、コスモポリタンの特徴を持ち、時代の精神と合致するものであったと考えられる。

実際、新渡戸の『*武士道*』には、近代国民国家の思想を紹介する場面が存在する。例えば、ハーバート・スペンサーについては複数に渡って引用された。

イギリスの哲学者であるスペンサーの思想は近代国民国家形成に影響を与えた。彼は、「*mens sana in corpora sano*.すなわち、〈健全な精神は健全なる身体にやどる〉²⁷⁾ という身体壮健の思想を持っていた。村岡によれば、この思想は1830年代には見られないが、

1860年代にはいたるところに登場する言葉であるという²⁸⁾。E.バーガーによると、「社会有機体の思想を採ったものの、その思想を多少の矛盾はあるが〈人間対国家〉の対立に分解し、個人に対して極度の自由を主張した。他方、良質と悪質の遺伝説に影響された、以後の生物主義者は、国家の力を借りて自然淘汰を促進し、かくして社会主義者が経済についてするように、優勢術を政治的統制の手段にしようとしているかに見える」²⁹⁾という。したがって、スペンサーは、社会ダーウィニズム思想にたつものであった。

新渡戸の「武士道」論において、たとえば、茶道を奨めながらもスペンサーが述べた「優美とはもっとも無駄のない動き」³⁰⁾を引用する。新渡戸は「礼」とは、「礼」よりも高位の「徳」と関係しており、「徳」を高めるために必要な要素であると述べている。

「忠義」の項目では、「スペンサーの見解によれば、政治的服従、すなわち、忠義は、過渡的な機能を与えられたにすぎないことになる」³¹⁾と説明している。スペンサーの思想は帝国主義的理念とも関連し、「文明の精神」を説くものであった。新渡戸の「武士道」論は、19世紀中葉以降に登場した西欧哲学を紹介するものでもあった。その際、スペンサーの言う軍事社会と産業社会の段階的發展を、日本社会にあてはめ、その学説を支持している。

新渡戸はフランスの歴史家であり政治家であったギゾーとスペンサーの学説を共に正しいとし、「スペンサーは軍事社会においては、女性の地位は必然的に低く、社会がより産業化されて初めてその地位が改善される」³²⁾と述べている。その理由を以下のように説明した。

日本の武士階級は約二百万人の武士に限られていた。その上に軍事貴族ともいうべき「大名」と、宮廷貴族である「公家」がいたが、これらの身分の高い有閑貴族たちは名ばかりの武士だった。そして武士の下に農・工・商の一般大衆がいて、平和的な仕事にいそしんでいた。したがってハーバート・スペンサーが軍事社会の特徴として示したのは、もっぱら武士階級に限られていたとあってよいだろう。一方、産業社会の特徴はそれら上層と下層にあてはまった。このことは女性の地位をみるとよくわかる。というのも、女性の自由が制限されたのは武士階級だけであったからである。不思議なことに、社会階級が低くなればなるほど、たとえば職人の世界では、夫と妻の立場はより平等だった。…中略…このようにスペンサーの学説は、かつての日本において十分に例証される³³⁾

新渡戸は、スペンサーの唱える近代国民国家論は日本にも当てはまると説明する事で、日本は文明をもった国家であると主張した。スペンサーのいう軍事社会の構造は、武士階級を指し、産業社会は「士」を除いた「農工商」が担っていた構造であったという。

新渡戸が主張する「文明の精神」の根拠はスペンサーにだけ求めるものではない。19世紀の英国の哲学者ミルやベンサム、「英雄国家」を唱えたカーライル、経済学者マルクス、18世紀の哲学者バークリー、プラトン、ソクラテス、ニーチェ、アリストテレス、シェ

ークスピア、トーマス・モブレイといった哲学者、作家、詩人、芸術家をはじめ、数多くの西洋人知識者が登場する。それらの記述は、西欧の「文明の精神」を伝えるための叙述であった。

このことは、新渡戸が、学生時代に「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌なりたいのです」³⁴⁾と述べているように、『武士道』の目的の一つに、「文明の精神」を日本に普及させることにあったと考えられる。新渡戸は、西欧思想を日本へ伝えることを「太平洋の橋」と述べている。上述したように、こうした傾向は日本においてのみみられたものではなく、世界的潮流であった。とりわけ、スポーツ教育によってもたらされた人格陶冶は英国的スポーツの拡大と併行した。この現象は、英国から発信されて世界に拡大したスポーツがもたらした「時代の精神」であった。事実、中国でも社会ダーウィニズムの広がりが見られ、体育教育を通して人格形成がなされると考えられるようになった。³⁵⁾ また、入江克己が指摘しているように、「こうした社会ダーウィニズムを縫合する論理は、なにも社会教育学だけに属するものではなく、明治後期の帝国主義的な世界観に共通するものであった」³⁶⁾とし、浮田和民の帝国主義的教育論を例示している。

新渡戸の活動は、『武士道』の刊行以降、ますます盛んになっていく。第2節では、新渡戸とともに「文明の精神」を啓発した実業之日本社の果たした役割について検証したいと考える。

註)

1) 菅野によれば、明治の半ばを過ぎたころから、言論の世界のなかで「武士道」という言葉が大流行したという。武士はすでになく、自らも武士ではないのにもかかわらず、自分たちの思想は「武士道」であると唱えるものたちが、ひきも切らずにあらわれてくる。この現象と思想を「明治武士道」と呼んだ。(菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年10月、232頁。)

2) 佐伯真一『戦場の精神史武士道という幻影』NHK ブックス、2004年5月、255頁。

3) 同上、259頁。

4) 同上、263頁。

5) 新渡戸稲造「序」山方香峰『新武士道』実業之日本社、1908年4月、1頁。

6) 佐伯、前掲書、262頁。

7) 櫻井鷗村訳新渡戸稲造『武士道』丁未出版、1908年3月、239頁。

8) 濱口瞻「英人の紳士道と我国の武士道」『実業之日本』1908年5月1日号、24—25頁。

9) 同上、25頁。

10) 佐伯、前掲書、175頁。

11) 同上。

- 12) 岬隆一郎訳新渡戸稲造『いま、拠って立つべき“日本の精神” 武士道』PHP 文庫、2005年8月、48頁。
- 13) 同上、48-49頁。
- 14) 櫻井訳、前掲書、11頁。
- 15) 岬、前掲書、22頁。
- 16) 櫻井鷗村「訳序」、前掲書、16頁。
- 17) 岬、前掲書、22-23頁。
- 18) 村岡健次「「アスレティシズム」とジェントルマン—十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて—」村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年7月、229頁。
- 19) 同上、228頁。
- 20) 佐伯、前掲書、253頁。
- 21) 岬、前掲書、75頁。
- 22) アレン・グットマン（谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳）『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂、1997年8月、144-145頁。
- 23) W. G. Beasley, *The Rise of Modern Japan*, Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1990, pp.96-101.
- 24) 同上。
- 25) 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年5月、336頁。
- 26) 岬、前掲書、207頁。
- 27) 村岡、前掲書、249頁。
- 28) 同上。
- 29) 堀豊彦訳 E.バーガー『イギリス政治思想IV—H.スペンサーから 1914年—』岩波書店、1954年1月、7頁。
- 30) 岬、前掲書、66頁。
- 31) 同上、100頁。
- 32) 同上、156頁。
- 33) 同上、158頁。
- 34) 鈴木、前掲書、323頁。
- 35) Peter Alter, *Nationalism, Great Britain: A member of the Hodder Headline Group*, 1989, pp.23-25.
- 36) 入江克己『日本近代体育の思想構造』明石書店、1988年11月、204頁。

第2節 新渡戸稲造と増田義一にみる「武士道」の普及過程

新渡戸稲造の啓発活動は、多岐に渡った。彼は教育者である一方で、学者、評論家、外交官、役人など様々な経歴を持つ。鈴木範久は、「職業となると、やはり一言で決めがたい」とし、また新渡戸は『武士道』以外、どういう考えの持ち主であったかとなると、ほとんど知られていないのが実情である¹⁾と述べている。そこで、第2節では前節を踏まえ、彼の『武士道』から始まる「文明の精神」の啓発活動を考察する。特に対象としたのが、第一高等学校校長時代と同時期に執筆活動の場としていた実業之日本社編集顧問時代である。前者については第2章で述べる。第2節では、新渡戸と実業之日本社及び同社社長である増田義一の啓発活動に着目する。彼らの最大の共通点は、西欧文明を日本文化に吸収する形で「文明の精神」を啓発した点にある。

第1項 実業之日本社が果たした役割

実業之日本社は、現在にも続く出版社であるが、これまであまり歴史資料として注目されてこなかった。同社の詳細な研究は、近年、馬静によってなされている。馬自身、「これまでの研究や著作において、『実業之日本』と実業之日本社はほとんど評価されていない。というよりは、ほとんどそれらの対象となっていない²⁾と指摘している。しかし、同社の雑誌は、明治期から大正期にかけて販売数を伸ばした。1907年に開かれた『実業之日本』創刊10周年記念園遊会では、「政界・経済界・教育界・学会など七〇〇人を越える著名人が参加した。…中略…実業之日本社が確固たる地位を築いたということを示す歴史的な出来事でもあった³⁾」ように、同社は確かな社会的影響力を持ちえていた。同社の影響力や発展の過程については、馬によって明らかにされたが、馬が指摘しているように、未だに同社についてあまり知られてはいないのが実情である。そこで、以下では馬の研究を紹介しつつ、同社の発展とその影響力について触れておきたい。

実業之日本社の発展のきっかけは、アンドリュー・カーネギーの『実業の帝国』（小池靖一訳、1902年）を出版したことにあった。この書が、『東京日日新聞』、『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『時事新報』といった主要新聞で紹介されたことで、「実業」という言葉の普遍化につながり、同時に「実業之日本社」が社会的に認知されることになった。⁴⁾

次なる発展は、雑誌『実業之日本』の初の臨時増大号として『成功大観』（1903年）を世に送り出したことにある。初版は完売し、再版に再販を重ねても、ただちに売り切れる状態であった。この『成功大観』は、雑誌『実業之日本』が「確立期の日本の資本主義の担い手とすることを目指すものであり、それによって日本社会の発展、ひいては国家の発展を期すこと」に定めたという⁵⁾。こうした実業之日本社の動きは雑誌『太陽』、『中央公論』も後追いし、雑誌のコラムに「成功」の欄を追加した。「当時の人々は、近代社会の一定の展開の中で、新しい出口を求めていた。そのような時に〈成功〉という言葉が突如として湧き出てきて、それが一つの導きの糸となり、皆が〈成功！〉〈成功！〉と叫ぶように」

6) になった。また「成功」が突出したキャッチフレーズとなり、青年読者をとりこにしたと言われている。このようにして、実業之日本社は雑誌界、民衆に影響を与えながらその地位を確固たるものにしていく。馬は、「結果から言えば、〈成功〉はこの時期に、『実業之日本』によって“発明された”（ホブズボウム）ものといえる」⁷⁾と述べ、さらに、他雑誌との差異は『実業之日本』は〈品性〉の大切さも論じていた⁸⁾と説明している。このことは、この雑誌が「文明の精神」の伝達装置としての役割を果たしていたことを物語っている。

日露戦争後に同社はさらなる発展期を迎える。それは雑誌『婦人世界』の拡大によるものであった。1906年に発行された『婦人世界』の執筆者には、大隈重信、与謝野晶子といった著名人が名を連ねている。『婦人世界』は最高発行部数31万部、平均発行部数10万部という驚異的な数字を残した。『婦人世界』を皮切りに、各出版社が『婦人之友』（1908年）、『婦女界』（1910年）、『婦人公論』（1916年）などの女性誌を刊行していく。このような「婦人雑誌」の刊行が後に続いたことを考えると、実業之日本社による『婦人世界』が果たした役割は明らかである。こうして実業之日本社は1907年には、全国の雑誌の中でも発行部数において最上位をしめるようになった。⁹⁾同時に、実業之日本は社会一般への影響にとどまらず、他雑誌の刊行にも影響を与えた。

しかも、実業之日本社を語る上で、新渡戸稲造のかかわりは無視できない。新渡戸と実業之日本社との最初の出会いは、新渡戸が農学者として雑誌『実業之日本』に投稿したことにあつた。そして、1908年から第一高等学校校長として中間層にむけて「修養」について論じる。同誌に第2稿として「新時代に処する実業家の武士道」を執筆して以来、毎号投稿した。しかし、この新渡戸の「通俗雑誌」への投稿には、吉野作造をはじめ各方面から強い批判の声があがったという。これに対して、新渡戸は「日本の現状に鑑み、最も大切なのは大衆教育だ。…聞けば工員達が一番読んでいる雑誌は『実業之日本』だということだ…これ自分が増田社長の要望に応じて執筆を決心した」¹⁰⁾と反論している。やがて、吉野も後年、同雑誌に投稿するようになる。

1908年に、社長増田義一は、新渡戸に編集顧問に就任して欲しいと申し出た。増田と新渡戸にとって「道德観を養うことが肝要」であるということが共通した考えであった。新渡戸は、増田が「どのような階級に属する若者であっても、彼等が人生の目標を見出し、社会のよき担い手となるように手助けし、それによって将来強力な国家を作り上げることができると考えていた」と評価している¹¹⁾。新渡戸と増田は「強力な国家」形成に関心を寄せ、世界から文明国とみなされるために、国民を成長させることを雑誌刊行の目的としていた。「強力な国家」を創る上で重視された「文明の精神」のひとつに、英国流「アスレティシズム」に基づくスポーツを通じた教育があり、この思想を後押しした潮流が社会ダーウィニズムであったことはこれまで述べてきたとおりである。

新渡戸は、国家に「文明の精神」を啓発していく上で同様の価値観を持ち、また増田がその力に長けていると判断した。詳しくは後述するが、増田は、「新士道」論を啓発し、新

渡戸は、大衆に向けて『修養』を説き、民衆や経済界に向けて「武士道」論を啓発していく。

以上を踏まえると、同社の活動は、新渡戸の「武士道」論を考察する上で重要である。また増田義一に注目することで、同社が社会に与えた影響、『武士道』の刊行以後に彼らがどのような「文明の精神」を普遍化させようとしたのかが明らかになる。

第2項 新渡戸稲造の「修養」と伝道活動

本項では、新渡戸の「武士道」論の変容を検証する。彼は、エリート学校の教育者でありながらも、実業之日本社の下で経済界と一般大衆に向けて「文明の精神」を啓発した。その中身を検討する事で、彼の理想とした国民のあり方を明らかにする。

実業之日本社と新渡戸の関係は前節で示したとおりであるが、新渡戸は実業之日本社の顧問に就任することになった理由を以下のように語っている。新渡戸は、当初編集顧問の仕事は断っていたが、増田と何度か面会し、「社の主義方針等を聞き、僕が平素懐抱していた主義と相一致する」¹²⁾ ためだと述べた。そして、なぜ同社の顧問になったかを五項目に分けて本誌で説明した。以下にその五つの理由を示す。同雑誌にてフォントと大きさをかえて強調されている部分については、太字にて示した。

(一) 中学校を中退したものや登校できなかつた青年に教育する事が重要である。しかし、現在学校以外で、青年教育する機会がない。学問を修めることのできなかつた人に学識と徳藻を涵養させる機関もない。『実業之日本』は、発行部数が8万を越え、一部を三人が通読すれば、24万人が読むことになる。**読者の範囲の広さはこれでわかる。**事実、以前書いた記事に手紙を寄越したものが非常に多いし、八百屋の丁稚から医学生まで幅広くきた。『実業之日本』はすでに**社会教育を行なっていた。**僕が今回顧問となったのも、この雑誌を通して、学問のない人に学問を与え、煩悶している人に、**慰安を与えたい**ためである。

(二) 専門の研究を公にする雑誌は相当にある。しかし、学者は卑近のことをいうと俗化すると言って喜ばない。俗人は分からないようなことを言われると高尚だと言って喜ぶ。これでは意味がない。高尚な説も卑近にして何人にも解り何人にも味わえるようにしなければならない。『実業之日本』は**高尚なことを説かないで、卑近な何人にも解り易く、又何人も知らなければならないことを説いている。**

(三) 日本の諺に猫に小判というのがある。西欧にも豚の前に真珠という諺がある。如何に立派なものでも使うことができなければ、何の価値も無い。だが、『実業之日本』の読者は真面目に読んでくれるらしい。批評的に中傷的にしないで、満腹の信用を持って読んでくれるらしい。僕の所にくる手紙はこれを証拠だててくれる。また読者が

知識は別として真面目である。更に熱烈な感情で読んでくれるらしい。『実業之日本』の読者は多いというが、多い上に尚こういう人がいるということは、僕の感激せざるを得ないところである。

増田君は僕のところにきて「読者があまりに真面目なのでギビが悪くなった。関心するばかりでなく、一種の宗教のように信仰しているものもいる」や「実業之日本を読んで発奮して成功したもの」、「自殺を思いとどまったもの」などの話をした。僕も読者から受け取った手紙をみても、この話はもっともらしく思える。このような真面目な読者がいて、僕のようなものの話を精読してくれようとする人がいるならば、僕も及ぶべきことをしようと思った。

(四) 例えば、哲学は高尚な学問である。しかし、それを人生日常の事物に応用するのは実業である。『実業之日本』は高尚な原理は説いていない。また実業上の技術に関する精密なことを論じていない。しかし、実業に従事する人が心得ていかなければならないことを卑近に説いている。説は卑近である。しかし、それは原理を説いたので之を行なえば国も富めば個人も富むものである。日本が重大な負債を有する今日（日露戦争による負債）、僕は実業家の修養を説いて国富の増進に努めている同誌により、我国実業の健全な発達を切望するものである。

(五) 新渡戸は増田と新聞雑誌に対する観念が同じであったためという。新聞雑誌を卑しいものと考え、新渡戸の校長職などの品格を貶めると忠告する友人もいた。しかし、増田は「いや、我々はその考えを一転させたいのである。記者の事業の賤しむべからざると」とし、雑誌刊行は「金儲けのためでない。金儲けをしたいなら他に多くの簡単な方法がある」、「我々は雑誌を編集するに自己の利益の念はない。読者の利益を願っている」と述べたという。新渡戸は**利益を第一の目的としないで事業を目的とすることは、僕の同感とする所である**と述べた。¹³⁾

以上が、新渡戸が顧問に就任した理由であった。読者の啓発という目的が増田と一致し、かつ一定以上の読者層を有した『実業之日本』という明治後期から大正にかけて日本で最大の読者層を有した雑誌が最適であるとした。こうした面からも雑誌『実業之日本』は、「文明の精神」を伝達し、社会的エリート及び中間層を啓発する上で格好のジャーナリズムであったといえる。

新渡戸の就任記事の次号（1月15日号）には、著名人からの声が掲載された。早稲田大学教授浮田和民は、「私の最も喜ばしく感ずるのは、博士の力によって、我実業社会に武士道的精神を注入せらるる」¹⁴⁾ ことであるとし、昔の武士は勝つために嘘をついてよいという風習であったが、これは世界では通じない。日本の商人は見本と違う品を売りつけるなどの現状を嘆き、嘘をつかず、挙国一致して時間を守り、信用を尊ぶことが「世

界的武士道」であると述べた。そして、「幸いにも新渡戸博士は日本の武士道にも精通し、西洋の武士道は特に深く研究せられており、西洋の文明の根本たるキリスト教の精神をも十分理解しているから、日本の武士道の欠点をうまく補い調和させて世界的武士道とし、それを実業社会に注入して欲しい」¹⁵⁾と期待をこめた。また浮田の教育思想とは、「帝国主義の外交政策を行なうに先んじ、帝国主義の教育を施さざる可からずとは吾人の宿論なり。蓋し帝国主義とて、別に普通の教育と全然異なるものにあるべきに非ず。要唯教育の主義方針を遠大にして、個人的にも、社会的にも、将た国家的にも、世界的生存競争に適合すべき人民を養成するにあるのみ」¹⁶⁾と、社会ダーウィニズム論にたつものであった。体育についても「帝国主義的競争の勝敗を決定する根本的な条件が身体健康にあるとみて、〈生存の義務を以て倫理の大本となすときは、国民教育の第一義は体育及び衛生にあることを知る可し〉と述べて」¹⁷⁾いた。これらを通して、浮田の社会ダーウィニズム論を、入江は「スペンサーの体育論を援用しながら、〈人生における成功の第一要件は善良なる動物たるに在り。而して善良なる動物の国民となる国民的繁盛も第一条件なりとす。戦争の事変が、しばしば兵卒の体力及び強硬によりて勝敗の運を転ずるのみならず、商業の競争も半ば生産者の肉体的忍耐によりて決せらるるなり〉と言っており、この独善的な倫理には、帝国主義的な膨張政策の対象として抑圧される他民族や国家に対する認識は、完全に欠落してしまっている。こうした論理は、昭和二〇年八月一五日の終戦を迎えるまでさまざまな体育論に潜在している」¹⁸⁾と指摘した。

浮田の社会ダーウィニズム論は、体育とは国家戦争や商業競争にとって重要なものであり、新渡戸の同雑誌での後押しをする事は、自明であった。また、このことは同時に、新渡戸の啓発する中身が、社会ダーウィニズム論を後押しするものであったことを意味している。

徳富蘇峰も「新渡戸を〈天下の逸品〉と褒め、第一高等学校校長の現職を辞し全身を実業之日本社に投じて貰いたい」¹⁹⁾と述べた。それは、「博士にして既に自ら進んで社会教育に力を尽さんと決心して、『実業之日本』の編集顧問にまで歩を進めた以上は更に断然現職を捨て、寧ろその全身を此新方面に投げられんことを希望したい」²⁰⁾ためであった。このように新渡戸が編集顧問に就任した事実は、著名人が注目しただけでなく、『読売新聞』、『東京日日新聞』、『日本新聞』、『報知新聞』といった全国規模の新聞によって報じられ、全国的に注目された。

しかも、ここで徳富蘇峰の名が登場するのは偶然ではないように思われる。ピースリーが指摘しているように、国民新聞社長主筆の徳富蘇峰は、明治期に、日本国民が「文明の精神」を獲得する必要があると考えていた一人であった。彼が、新渡戸の文筆活動を評価したのは、新渡戸が社会に向けて「文明の精神」を啓発していたためであると考えられる。そして、日本が先進国にならなければならないと考えていた徳富は、「文明の精神」を世に広めるためには、校長という立場よりも大衆雑誌を通じたメディアを用いる方が、効果的であると考えていたことを物語っている。

また、浮田も「世界的武士道」の啓発を期待した。「世界的武士道」とは、キリスト教を基調とした西欧社会における常識を意味しており、新渡戸の活動が、「文明の精神」の啓発にあったことを裏づけている。これは、クーベルタンが、この時期に近代オリンピックの創始において、最も強調した特性と一致している。²¹⁾

1908年以降の新渡戸稲造の「武士道」論

新渡戸は、実業之日本社の編集顧問になると同誌にほぼ毎号執筆するようになる。その皮切りが、1908年5月15日号「新時代に処する実業家の武士道」であった。本記事は西欧社会の規範を「武士道」に置きかえて紹介するという体裁のものであった。

「廉恥と英語のオノアー」（オノアーは英単語の「Honour」であり、名誉を意味する。）

我が武士道とは、意味の頗る広い言葉であるが、約むると廉恥の一言に帰すると思う。体面を重んじ恥を知ることは、古の武士が最も意を用いた所で、若し其の体面を重ずることが出来ず、其の廉恥を傷けられることがあれば、切腹をして申訳をする。彼等には『死』ということよりも其の体面ということが大切であったのである。

英語にオノアーという語がある。日本では名誉と訳して居るから妙に響くけれども、是は日本でいう廉恥である。ただ廉恥といえは消極的であるが、オノアーといえは積極的の様に思われる。こうすれば、武士の体面を汚しはせぬか、あすれば武士としての責任を空うすることはないか。常に積極的に廉恥を傷つけはせぬかとのみ思う。

英語のオノアーということが、こうすれば紳士の体面を保つことが出来る、あすればオノアーを高むるという風に、常に積極的に人の行為を奨める様であるのと少し異う。

…中略…

武士道が不正をするな、廉恥を傷くる勿れとまで云ったが、一步進めて善いことを行えといわなかったことは如何にも残念である²²⁾

新渡戸は、日本の「武士道」における「廉恥」とジェントルマンシップの「Honour」の差異を示した。武士は名誉を守るために行動し、西欧では、名誉を高めるために行動するというものである。新渡戸は、後者の名誉を高めるための積極的な行動を推奨した。

新渡戸にとって理想の「武士道」とは、「武張った徳で堅苦しい所がある Stern Virtue」という厳格な美德ではなく、「Gentle Virtue」にあった。この紳士的な美德を、「武士道の精華はここにあることと思う」と述べ、西欧の行動規範が「武士道」の理想であるとして啓発した。

このジェントルマンの素養こそ、新渡戸の啓発したい「文明の精神」であったと言えよう。続けて、「相見互」について言及している。新渡戸は、武士には「義のためには敵でも尚これを許す」という美しい精神があったという。しかし、現状をみれば、「華族連中でも

随分不正な事もある」とし、「之を濫用しお互いに不正を隠しあうようになってはならぬ」と正直な心を持つように啓発する。

また、自身の経験から、商売敵といえども陰口をいうことは汚いことだと説明し、争いは堂々とせよ、陰口は卑怯であると教える。その経験談は以下のようなものであった。

新渡戸が、理髪店に入ると店主から、あなたは前に庄治の店で散髪されましたね、と尋ねられた。新渡戸は感心したという。さすが商売柄、一目でわかるものだと。なぜ分かったか理由を問うと、店主の答えは「段々がついていきますもの」だった。新渡戸はもうこの理髪所に行きたくなくなった。なぜならば、腕で勝てないから口で貶めるのは卑怯であるからだ。新渡戸が理想とした返答は「流石に庄治です。上手なものです。私も奮発して彼位に成りましょう」²³⁾であった。この体験談から、新渡戸は、「善を以て競争するがよい」と説明しており、正々堂々と戦うフェアプレイの精神を想起させるものがある。これこそが、「Gentle Virtue」であり、「武士道の精華はここにあることと思う」姿であろうと述べた。

新渡戸は、近代国民国家の一員としてどうあるべきかを「武士道」や「修養」、「平民道（デモクラシー）」という言葉を用いながら、1919年まで実業之日本社で執筆活動を展開する。1920年（－1926年まで）からは、国際連盟事務次長として国際舞台で活躍するに至る。

新渡戸は、『修養』の中で、西欧人の学者によれば、文明とは精力の貯蓄であるとして、次のように説明している。「野蛮人には余裕もなければ貯蓄もない」²⁴⁾。次いで、彼は「第八章 貯蓄」にて、文明人としてのあり方を説く。「人が貯蓄を始めるのは、一にはその人に先見の明があるや否や」を判断できるからであるという。新渡戸が言う貯蓄とは、「後日の不足を補う為に、予め貯蓄する」²⁵⁾ことであるという。すなわち、「スペンサーが言った如く、知能の発展は時間と空間に適応するものである。知能の程度が低ければ低きほど、時間に関する思想が短く、又場所に関する思想が狭い」²⁶⁾にあたる。子供も距離と空間理解によって成長するとし、貯蓄の概念を理解するに等しいと述べ、公言どおり、子供の成長という分かりやすい例を提示している。

さらに、「日本人と西洋人との間に非常に差異があることは、仕事をするに、この次は何、この次は何と、計画を立てると否にある」²⁷⁾と述べ、西欧合理主義に言及している。そして、質素儉約、禁欲主義を含蓄する貯蓄の概念から「文明の精神」を説明した。新渡戸は、どう行動すべきか、どう考えるべきかを解り易く説明していく。新渡戸は貯蓄の概念と「文明の精神」について以下のように述べた。

「人には三段の種類がある。第一は余力あれば直ちに総てこれを濫用するもので、これ即ち最も劣等な徒である。第二は濫用することをおそれて、なるべく余力ない様にし、不足なるを喜ぶもの、これは中等の人」。「第三は、余力あれば尚更節度を守り、今日必要でないものは、他人或は後日のために之を貯蓄するもの、これは最上である」とし、「ここに達せない国民は、たとえ戦争に強くとも、永遠に強国として世界に誇ることは出来ぬ」²⁸⁾のである。すなわち、西洋の常識を身につけねば、日清・日露戦争に勝とうとも、文明国

家として認知されないことを新渡戸は強調する。では何を貯蓄するのか。新渡戸は「金銭、体力、知識、精神的勢力」²⁹⁾を挙げる。

「金銭の貯蓄」

「日本人は概して金銭の貯蓄をけなし」たがり、「金銭を貯蓄しているといえ、如何にも小心な、意気地なしの如く推量」する。一方で、「乱費する者は、大胆で、偉い人の如く、人も褒めれば自分もその風にする」。しかし、「兵糧の続く間は、大言壮語して豪傑らしく振舞うが、一朝病気に罹るとか、不時の出来事で金の要ることが出来ると、今までの英雄豪傑がペタとなって仕舞う。その醜態は見られた様ではない」と、批判した。新渡戸は、先見の明なく豪傑を気取り、ただ浪費し、貯蓄をしない行為は恥ずかしいことであると貯蓄の概念について教えている。³⁰⁾

「体力の貯蓄」

健康の概念については、「体力の貯蓄」という言葉を用いて、近代的な健康の概念の普及について言及した。

「青年の中には一時の元気に任せて、蛍雪の苦を積むなどいって、乱暴な勉強をするものがある。粗食で、薄暗い燈下の下で、終日終夜詰めきりで勉強するものがある。その精神は誠に関心すべきであるが、之が為に体力を乱費し、他日之を利用せんとする大切な時に至って、役に立たなくなるものが、世間その例に乏しくない」³¹⁾と、健康について教える。新渡戸は健康を保持するために、「適度に運動し、冷水を浴びる等、普通に健康を保つに必要な衛生上の規則を守らねばならない」³²⁾と注意することで、運動や健康、衛生といった明治以降に西欧から輸入した近代的な知識を新渡戸は啓発した。

新渡戸の『修養』は、誰にでも解り易く読めるように、難しい言葉はなるべく用いず、語り口調で体験談などを用いながら「修養」を説明している。「修養」とは「武士道」と同様に、新渡戸が理想とする若者の生き方や精神を啓発する中身である。これまで述べてきたように、新渡戸は「太平洋の橋」となることで、外国の文化を日本に伝えることを目的の一つとしていた。新渡戸は、西欧社会の「文明の精神」を日本人に広め、国家を成長させようとした一人である。『修養』もまた、『実業之日本』を通して、近代国民国家の国民としてのあり方を説くものであった。

次に、新渡戸と同じ志を持ち、新渡戸とともに啓発活動に努めた増田義一に着目する。

第3項 増田義一の「新士道」論

本節では、英国規範がどのようにして普及したのかを、増田義一の『実業之日本』を通して検討していきたい。

増田は実業之日本社社長であり、同社の社会的影響力は前述した通りであるが、これまで着目されてこなかった。しかし、前述した通り、新渡戸は増田を評価し、共に啓発活動

に努めた。また、大隈重信も増田の理解者であった。大隈は早稲田卒の増田義一社長の成功を喜び、実業之日本社の催す種々の記念行事、講演会などにも率先して後援するなど、深い理解と援助を惜しまなかった。大隈自身が増田との関係を「吾人の朋友」と述べており、その両者の深い関係をみることができる。また大隈は、『実業之日本』を早稲田精神の伝播者であると評価している。早稲田大学は立憲的国民を養成し、国民の模範となるべき人材を養成し、国の文明を高め、富を増進し、国民道徳を高めるということを趣旨目的として教育事業に務めているが、実業界に奮闘努力する『実業之日本』は実業家を拵えようとする早稲田精神と一致しており、実業之日本社は経済的、実業的の両面において早稲田精神の伝播者、伝教者であるという。

増田は1912年に国民党より出馬し、衆議院議員に当選する。増田の政治活動は詳しくは不明であるが、馬よると、敬慕していた大隈重信を政治の表舞台でも裏でも支え続けた。1914年には、早大総長高田早苗と西洋諸国に周遊に赴いている。モスクワ、ドイツ、イギリス、フランス、イタリアで遊学していたようであるが、第一次世界大戦勃発の危機を知るとイギリスからアメリカに渡った。イギリスでは、英国議会議会を傍聴し、感銘を受けたことが『思想善導の基準』に記載されている。渡米すると9月28日に大統領ウイルソン（当時）を訪れ、その2日後に野口英世と面会している。こうして7ヶ月にわたる遊学を終えた。日本に戻ると、国民党と大隈内閣の間で論争になった師団増設問題が生じていた。増田は大隈への恩義と政党に板ばさみになりいったんは政界を引退した。この時増田は引退の辞として「余は欧米視察によりて得たる所を提唱し、…社会の革新に貢献する所あらん」と述べている。増田が社会の革新に貢献するために、1918年から1921年にかけて雑誌論文に投稿された記事は、『思想善導の基準』（実業之日本社、1921年刊行）としてまとめられた。彼の信頼は高かったようで、1912年から1945年の間に衆議院に8回当選し、衆院副議長も務めた。³³⁾

以上のような経歴と人間関係をもち、出版業界を牽引した増田の書物を考察する事は、1910年から20年代に普及された「文明の精神」の影響力をみることに等しい。

増田が、大衆の道徳観を養うために刊行した書に『思想善導の基準』（増田義一著、実業之日本社、1921年刊行）がある。本書は、雑誌『実業之日本』や、その増大号に掲載された増田の論稿が再収録されたものである。1921年の書は、一連の主張を纏め上げた書ということになる。

彼の言う「思想善導」とは、1928年に生じた3・15事件以降に声高になる、いわゆる国体の擁護を骨子とした国粹主義に傾倒するスポーツと密接な関係にあった「思想善導」政策³⁴⁾とは異なる趣きがある。

その中身は、「英国は礼儀作法の正しきを以て世界第一と称されている。文明の進歩と共に国民の礼儀作法も美化されねばならぬ」と主張するもので、「真の文明の精華は其の国民が日進の知識に富むと共に…中略…文明と逆行するが如き無作法の振舞多きを見て遺憾に堪へない」、「余は斯る方面からしても国民の品性を向上せしめたい」³⁵⁾と述べているよう

に、とりわけ英国規範を啓発することにあつた。また、英国的な道德思想を奨励する際、次の二点に留意する必要があると述べた。

如何なる外来思想でも之を日本化することが必要である。即ち日本の立場を忘れて良く之を消化するのである。我々は自己が日本人である。日本人として世界列国の間に伍し、以て現代の文化に貢献せんとする自覚を有せねばならぬ³⁶⁾

武士道と言えば直に古臭いと思う人もあろうが、その形式はたとえ古くとも其の精神は日本国民の精神の真髓である。この精神を深く味わい之を現代化することが最も肝要である³⁷⁾

以上のように、増田は外来思想を日本化する必要があると考えていた。また時代遅れの感を醸し出すと思われ始めた「武士道」を現代化する必要があると述べ、「武士道」の再編を試みようとしていた。こうした傾向は、ビースリーが指摘しているように、「文明の精神」を日本的なものに置きかえるという時代の現象に合致している。

同書の中で増田は、新しい時代を担う若者の理想像を説き、その際「新士道」という言葉を用いている。

「新士道」は、「現状と国体と合致し、国民性に適応し、新時代の新思想に適応しなければならぬ」とし、「日本の武士道及び西洋の武士道、英国固有文化である紳士道のそれぞれの長所を融合させたものが必要」³⁸⁾と説明している。すなわち、日本の「武士道」に騎士道と紳士道を融合させることで、新しい近代的な「武士道」を養おうとしたと言える。

より具体的には、増田は英国のジェントルマン像に倣って、日本人の品性の陶冶を求めた。デモクラシーの理想を通じて、デモクラシーの担い手である大衆に直接的に思想を善導する手段を英国的規範に求め、大衆を啓発した。

また、「新努力主義」として以下のことを奨励した。「人類生活の根本意義から出発して、自発的に努力其のものを味わい、且つ楽しむもの」とし、「努力其のものを楽しむことが出来れば、努力は決して苦痛でもなく勿論苛役でもない。…中略…努力及び勤労を神聖と称するのである。卑しい意味は少しも含まれていない」³⁹⁾と述べた。これらは勤労の教説を想起させるものがあり、増田の言う「新努力主義」とは、英国のアマチュアリズムやアスレティズムにおいて重視された協同の精神を喚起させるものがある。

以下に示すように、増田が言う社会組織とは、協同の精神を重視している。協同の精神の啓発にあたり、「ソリダリチー即ち連帯協同の精神が天然の原則であり、礼儀、規律、秩序、公德もこの範囲に入る」⁴⁰⁾と、英語を用いながら説明した。大衆教育を重視した増田にとっては、「社会的に生活する以上は連帯精神が最も必要である。然るに従来日本人にはこの大切な連帯精神が欠乏して居る。協同一致出来ぬのも、公德心の発達せぬのも、時間勵行の出来ないのも、一はここに原因してゐる」⁴¹⁾と述べている。

増田の書には、英国の重要なスポーツ規範である「アスレティズム」を連想させる論述も存在している。アスレティズムとは、村岡建次によると、「集団スポーツを人格陶冶のため有用な教育手段として重要視する態度のことで、これら競技形式の集団スポーツは、男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレイの精神を養うものと考えられた」⁴²⁾ 以下には増田の書の『青年出世訓』（1925年）の一節を示しておきたい。

剛健の気象を養うには、青年の身体を強壮ならしむるが重要である。体質強壮なれば外部に対する抵抗力強く、剛健になる。英米独の教育を見るに、頗る体力養成に重きを置いている。彼等の大学に於ては運動遊戯を奨励し、学生の体育に注意することは邦人の想像以外である。

英国が少年義勇団を組織して以来、この事業は全欧を風靡したが、其の目的たる社会の悪風に感染せず、種々の危険思想に誘惑せられざる剛健の気風を養はんが為である。入団の時、忠君愛国、規律確守、公共のための自己犠牲として尽すという三か条を宣誓せしむるのである。

用語に多少の相違あるも、その実はわが武士道と合類する点が多い。我が武士道的教育は夙に欧米に研究されていたが、彼等は今や新しき形を以て武士道の精神を採用せんとするのである⁴³⁾

ここで注目したいことは、英国のスポーツ教育思想であるアスレティズムが強調した剛健の気風を養うために、少年義勇団を奨励している点である。また、剛健の気風を得るために、この運動の意義を「忠君愛国」、「自己犠牲」という理念を通じて説明している。これはアスレティズムが重要視した「loyalty」、「self-sacrifice」の規範に一致している。すなわち、剛健の気風を身につけることは、「武士道」の獲得ではなく、アスレティズムの規範を身につけることであった。

しかし、むしろ日本の伝統的な概念とされる「武士道」という言葉を用いて解釈し、上に示したように新しい「武士道」としてアスレティズムを日本文化に内包しようとしたように思われる。重要なことは、剛健の気風がアスレティズムの中で強調された「British Manliness」における最も重要な概念であったことである。また剛健の気風を養うために、「武士道」を引き合いに出しつつも、その中身は武道や弓道ではなく、「山野を跋涉」⁴⁴⁾ することと述べられている。増田はボーイスカウト運動を意識しているに他ならない。加えて、運動で体を鍛えることは国運に関係すると、運動の重要性を、帝国の政策として奨励している点は、ボーイスカウト運動の創始者バーデン・パウエル の考えと一致している。剛健の気風を得るために増田は以下の三点を重視した。

青年の留意すべき三要点

余は武士的精神の鼓吹と共に青年自身の特に留意を促したいことがある。

其の一は…中略…東西の偉人の一代は総て剛健の気を以て一貫している。…之を読み之に私淑する者は知らず知らずの間に多大な感化を受け、剛健の氣象を自ら勇起するを覚ゆるであろう。

其の二は山野を跋渉して不屈の体力を養うことである。…青年は剛健にあらざれば、惰弱に流れるものである。跋渉は能く惰弱の悪風を一掃するに足ると思う。

其の三は常に剛健の氣象を養うことに留意するのである。聞くところによれば近時徴兵検査に於ける我国壮丁の体格は低下の傾向にありと。又学生の體質も一般に虚弱に流るるの風ありと。…洵に国運の成長に関する大問題である。

世界に対する日本の立場を了解するものは、今の青年の双肩にかかれる責任の重大なること空前なるを感ずるであろう。これを感ずると共に、青年が空しく煩悶すべき時にあらざるを覚ゆるであろう。是に於て、余は世の父兄も教育者も、剛健の氣性を青年に鼓吹するに力めんことを望む⁴⁵⁾

すなわち、増田は、若者が武士的精神を育むための方法として、偉人は剛健の氣性を有していると説明し、剛健の氣性を宿らせるために山野の跋渉を行い、体力を高めて精進する必要があると述べた。こうした若者が育つことで、国家が成長するという社会ダーウィニズム論を説明した。

このように、増田の主張は英国的規範を自国の「武士道」に置き換えることで、読者が、英国規範を日本の伝統的な規範として違和感なく受け入れられる構造を用意するものであった。次に、ここで増田のいう「新士道」と Samuel Smiles (サミュエル・スマイルズ) の言う「真のジェントルマン」の類似性について比較しておきたい。

「新士道」と「真のジェントルマン」

英国文化を日本的に受容し、新しい国民を作り上げようとしたときに目指した時代の理想像が、『思想善導の基準』を通して啓発された「新士道」であった。「新士道」とは、武家社会に存在した階級構造を批判し、四民平等及び、男尊女卑否定の立場をとり特権階級の規範ではなく全ての若者を対象とするものであった。

次に、人格を強調し、教養のある人物が求められていた。Richard Holt (リチャードホルト) によるとアマチュアリズムの重要な要素にはキャラクター (人格) がある。⁴⁶⁾ また増田の「新士道」は、実業によって富を築く近代資本主義の倫理を受け継ぐ「成り上がり者」を重視している。このような英国規範を受容する際に増田が用いた構造がある。例えば、礼儀については、織田信長や貝原益軒の言を引用しつつも、実際には英国の『自助』の作者であるスマイルズの言から多くのヒントを得ていた。すなわちスマイルズの言葉を伝統的な武士の脈絡の中に織り込むことで、あたかも従来から日本規範に含まれているように紹介し、英国規範の受容を促したのである。奇しくも、1870年に翻訳されたスマイルズの自助は、『思想善導の基準』と同年の1921年に復刻再販されている。⁴⁷⁾ また、臨

時増刊された『処世大観』ではスマイルズに関する特集⁴⁸⁾を組んでいる。以上のような西欧の規範は、近代の英国において形成されたものである。

表1には、村岡による、英国の19世紀のクリスチャン・ジェントルマンの時代のスマイルズが奨励した「真のジェントルマン」について示した。

19世紀以前の正統なジェントルマンとは、封建社会における特権階級の貴族であり、生まれや家柄によって構成されていた。しかし、真のジェントルマンは、19世紀における中流階級の台頭によって生じたものであり、成り上がることでジェントルマンになろうとした集団である。そのため、真のジェントルマンを目指すものは、ジェントルマンが通っていたパブリックスクールで学ぶことが重要であった。そこで、これからの国家を担うジェントルマンに成長するために、キリスト教やスポーツなどを学んだ。こうした彼らの姿を描いたのが『トム・ブラウンの学校生活』である。彼らがパブリックスクールで学んだ徳義が、表1の「理念の性格」に対応している。

例えば、「理念の性格」の正直や公明正大、剛直とは、アソシエーション・フットボール(サッカー)にオフサイドルールが形成した過程に見ることができる。中村敏雄によれば、「密集から〈離れていく行為〉や〈離れている〉行為が〈よくない〉行為とされ、やがて禁止されるようになった理由としては、第一に、それによって〈突進や密集〉の少ないフットボールが行われるようになり、フットボールの真髄でもあり、また楽しみや面白さの中心でもある〈男らしさ〉を示すプレーがみられなくなる」、「第二に、フットボールを〈一点先取〉というルールで行われる競技として受け継いでいく以上、この一点が容易に得られないようなルールや技術構造のものにしておく必要があった」⁴⁹⁾のである。このように、容易に得点できるような「狡猾な行為」は、排除していった。それが、まさに真のジェントルマンたる素養であった。

次に、「文化的伝統」にみられる「筋肉的キリスト教徒」とは、英国のエリート教育機関であるパブリックスクールから輩出されたエリートがスポーツ界を席卷するだけでなく、筋肉主義的キリスト教徒と呼ばれ、筋骨たくましくあることがエリートとの素養となり、社会的淘汰の構造が、支配階層となる社会的エリートを創出することに関わったとする優生社会学の立場が反映された帝国主義的理念であった。阿部生雄によれば、「健全で頑強な“肉体”は帝国主義的躍進の武器、英国人の民族的強化の起点として位置づけられる」⁵⁰⁾。また、筋肉的キリスト教徒のKingsleyの作品である『*Westward HO!*』(1855年刊行)や『*Two Years Ago*』(1857年刊行)などは、「若者の愛国心を覚醒し、帝国主義的侵略戦争を正当化する作品」⁵¹⁾であった。

表1に対応し、表2には「新士道」の規範の中身が英国的規範を啓発し、スマイルズの言う「真のジェントルマン」と同様に「成り上がり者」(偉人)を重視していたことを示す。

	階級的基盤	階層関係	理念の性格	教養	文化的伝統
真のジェントルマン	●中流階級以下 ●産業階級 (注・下層階級は対象ではない)	「成り上がり者」	「生産倫理」の投影 公明正大・自制堅忍・剛直・正直「勤労の教説」 「忍耐・不屈・協同の精神」「節約論」	「実地の経験」 (自己教養)	「ヘブライ主義」 (プロテスタントイズム) 筋肉的キリスト教徒

表1 「真のジェントルマン」の特徴

出典：村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』（ミネルヴ書房、1980年、209頁。）

村岡健次によると、「〈真のジェントルマン〉は、世間に一般に知られた正統なジェントルマンとは著しく、いや対蹠的といつていいほどに異なるもう一つのジェントルマンであった」とし、「人生最高の目的は、男らしい人格を形成し、できうるかぎり肉体と精神——知性、良心、感情、魂——を最善に発達させるということである。…中略…知性、公共の精神、道徳善もまた力であり、それらの方がはるかに高貴なものである」ことがスマイルズの思想の骨組みである。⁵²⁾ではどのような人間が「真のジェントルマン」なのであるのか。村岡によると、「偉人中の偉人」は「成り上がり者」であるという。

そこで、増田の「新士道」と比較するために、表1の項目に合わせて、表2 新士道の理念 を作成した。

	階級的基盤	階層関係	理念の性格	教養	文化的伝統
新士道	四民平等	エリート、成り上がりもの、一代で成功するもの	能力主義・質素儉約・連帯協同の精神・義勇奉公の精神・献身犠牲 礼儀・規律・秩序・高德・正直 社会奉仕・ボランティア 富に対する道徳的訓練 富者と社会奉仕・新努力家	実質的人間価値 (教養・修養)	不明

表2 新士道の理念 (船場作成)

「真のジェントルマン」と「新士道」との共通点は、「成り上がりもの」である。それゆえ増田がスマイルズのいう「真のジェントルマン」を日本化して、「新士道」とした可能性がある。事実、英国に精通していた増田は、スマイルズの言葉を引用している。彼はスマイルズの著書を明らかに意識しており、増田もスマイルズも成り上がり者という偉人を求めていることは興味深い。

また「理念の性格」についても共通する規範が多く見られる。それは、「正直」、「連帯協同の精神」、「自制の堅忍」、「自己犠牲」、「富に対する道徳的訓練」、「質素儉約」、「実地の経験」の重視などである。また、英国のジェントルマン像を例に挙げ、「ボランティア」、「礼

儀」について説明している。

それゆえ、増田の紹介した「新士道」とは日本版「真のジェントルマン」であったといえる。以上のように、増田は英国規範を兼ね備えた若者を育てることを目的として『思想善導の基準』を執筆した。そしてあたかも、英国的規範が、自国に元来存在した規範のように紹介し、武士や維新の英雄もそれに賛同してきたという修辞を用いることで、伝統を操作し、元から存在したかのような受容の構造を形成していった。増田は、伝播した英国規範を尊重しながらも、日本的に変換することで、英国精神を日本の伝統文化の中に包摂した。すなわち、増田の「新士道」とは、英国規範を日本的に受容した規範を学ぶことであり、新渡戸稲造と同様に「文明の精神」を「武士道」に置きかえながら、近代国民国家にふさわしい国民形成を啓発するものであった。

以上のように、新渡戸の「武士道」と実業之日本の果たした役割を検討すると、それらはまさに、ビースリーが述べる「文明の精神」の啓発を、「明治武士道」を通じて啓発しようとしたことを物語っている。具体的には、新渡戸稲造や大隈重信、菊池大麓といった著名人や実業之日本社から発信された。こうして「明治武士道」が形成された。「明治武士道」とは、明治期に創られ、西洋社会の精神を日本的脈絡を通して翻訳することにあつた。しかも、「明治武士道」を通じて「文明の精神」であるスポーツ規範が伝えられた。すなわち、フェアプレイやアスレティズム、健康や衛生の概念、禁欲主義、協同の精神、名誉など、第1章で挙げた徳目がそれにあたる。

次章では、スポーツの具体的な関与を当時最大のエリート学校であつた第一高等学校に着目して、スポーツを通して体现された「武士道」の普及プロセスをより詳細に論じることとする。

註)

- 1) 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年5月、319頁。
- 2) 馬静『実業之日本社の研究 近代日本雑誌史研究への序章』平原社、2006年7月、4頁。
- 3) 同上、88頁。
- 4) 同上、40-42頁。
- 5) 同上、44頁。
- 6) 同上、49頁。
- 7) 同上、51頁
- 8) 同上、52頁。
- 9) 同上、79-80頁。
- 10) 同上、96頁。
- 11) 同上、94-98頁。
- 12) 新渡戸稲造「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」『実業之日本』実業之

日本社、1909年1月1日号、5頁。

13) 同上、5-11頁。

14) 浮田和民「博士は世界的武士道鼓吹の最適任者」『実業之日本』実業之日本社、1909年1月15日号、17頁。

15) 同上。

16) 浮田和民「帝国主義の教育」『教育時論』第五八七号、1901年8月、24頁。

17) 入江克己『日本近代体育の思想構造』明石書店、1988年11月、205頁。

18) 同上、206頁。

19) 徳富猪一郎「記者としての新渡戸博士は天下の逸品」『実業之日本』実業之日本社、1909年1月15日号、16頁。

20) 同上。

21) クーベルタンは、祖国フランスの現状と比較しつつ、イギリスのパブリックスクールにおける学生のスポーツ生活に深い感銘を受けた。その根本原理である、一に徳育、二に体育、三に社会教育からなり、それらの軸となる二つの原理と方法は「自由とスポーツ」からなっていた。このイギリスでの体験と自覚は、クーベルタンの生涯における活動と切り離すことができないという。以上のように、クーベルタンの基本的教育概念は、英国のパブリックスクールにあった。(日本オリンピック委員会監修『近代オリンピック100年の歩み』ベースボールマガジン社、1994年7月、63頁。)

22) 新渡戸稲造「新時代に処する実業家の武士道」『実業之日本』実業之日本社、1908年5月15日号、25頁。

23) 同上、28-29頁。

24) 新渡戸稲造『修養』実業之日本社、1911年8月、265頁。

25) 同上、266-267頁。

26) 同上、167頁。

27) 同上、268頁。

28) 同上、273頁。

29) 同上、273-274頁。

30) 同上、275-277頁。

31) 同上、184-196頁。

32) 同上、295頁。

33) 馬、前掲書、24-25頁。

34) 思想善導政策とは、1928年の「3.15」事件を受け、「鳩山文相は昭和六年七月、学生思想問題の根本的対策を講ずる目的で設置された学生思想問題調査会の答申」に基づき、「国民精神文化研究所を設置した。以後、思想対策はさらに強化され、具体的には教員の思想弾圧」する政策であった(入江克己『ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年、90頁。)

- 35) 増田義一『思想善導の基準』実業之日本社、1921年9月、312頁。
- 36) 同上、23頁。
- 37) 同上、33—34頁。
- 38) 同上、184頁。
- 39) 同上、140—141頁。
- 40) 同上、320頁。
- 41) 同上、316—317頁。
- 42) 村岡健次「『アスレティシズム』とジェントルマン」村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年、228頁。
- 43) 増田義一『青年出世訓』実業之日本社、1925年、126—128頁。
- 44) 同上、123頁。
- 45) 同上、123—124頁。
- 46) リチャード・ホルト（池田恵子訳）「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン—スポーツ文化の分析—」『体育史研究』第27号、2010年、85頁。
- 47) H. Kinmonth “Nakamura Keiu and Smuel Smiles: A Victorian Confucian and a Confucian Victorian”, *The American Historical Review*, Number 3 June, 1980, pp.535—556.
- 48) 『処世大観』は、1905年4月8日に臨時増刊号として刊行された。
- 49) 中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』平凡社、2001年11月、231頁。
- 50) 阿部生雄「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成—チャールズ・キングズリを中心として—」『岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求』岸野雄三教授退官記念論集刊行会、1982年3月、132頁。
- 51) 同上、133頁。
- 52) 村岡健次、前掲書、200頁。

第2章 社会ダーウィニズムと「文明の精神」—西欧規範としての「武士道」の創造—

第2章では、第一高等学校において展開された教育と社会ダーウィニズムとの関係について考察していく。周知のように、第一高等学校は、明治新政府という新国家体制の中で、新しい国家を担うエリートを育成することを目的に設立された。とりわけ、校友会や自治制の全寮制寄宿舎が設置されたことが一高の最大の特徴であった。この制度は、日本の将来を担うエリート、一高生の人格を陶冶する上で重要な役割をなした。

しかしながら、その教育システムは日本独自の教育規範形成を通して醸成されたのではなく、欧米の教育制度を取り入れた留学経験者の知識に基づき、とりわけ、英国のパブリックスクールの特徴を取り入れたように思われる。以下では一高の教育指導者たちが、どのような社会的価値観を尊重し、どのような脈絡を通して、なぜ、スポーツ規範を重視していくのかについて論じる。

第1節 東京大学予備門時代—F.W.ストレンジと運動会—

本節では、東京大学総長、菊池大麓の英国留学経験が縁となって来日した英人教師、F.W.ストレンジが果たした役割に着目する。1867年から1889年にかけて、日本で活躍した官雇の外国人は約2300名であったと言われている。¹⁾ 国別の上位3カ国の内訳を見ると英国928人、アメリカ374人、フランス253人となっている。このことから当時のお雇い外国人には、英国人が多かったことが分かる。さらに、『資料御雇外国人』によれば、お雇い外国人は日本に限られたことではなく、中国（清国）やタイ、トルコなどの地域でも職を得ており、西欧文明に倣おうとする文明化の潮流は、世界規模で生じた現象であった。

1874年に設立された東京英語学校は、1877年に東京大学予備門となった。²⁾ 1882年には、「上に掲げる所の学科の外、体操課を副置し、各級生徒をして正課の余暇を以て演習せしむ。ただし寄宿生は必ず演習せしめ、通学生は適宜これを課す」³⁾ と書かれており、体育は正課の余暇が、後に変化したことがうかがえる。1884年に学科課程が4ヵ年に変更された年の体操は、「軽運動・歩兵操練が週4時間」⁴⁾ となり、全学年、全学期を通じて週4時間の「軽運動・歩兵操練」が行われるようになった。⁵⁾ また、課外の体育活動としては、1883年に運動会が開催されるようになる。それ以降、運動会は、ボート競技会と並ぶ一高の主要な学校行事に成長した。この東京大学予備門時代に、英国スポーツを普及させることに尽力したのがストレンジであり、運動会を創始したのもストレンジであった。

次いで、1886年に第一高等学校へと改名されると、1890年には木下広次校長の下で、校友会が設立した。この時の校友会には、「文藝、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ロンテニス、陸上運動、遠足」⁶⁾ が含まれている。一高においてスポーツ文化は以降も着実に発展していく。そうした背景には、英語教師として、イギリスから赴いた

ストレンジのような外国人講師や一高の指導者たちが一致して奨励したスポーツ教育の重要性が関わっていた。

ストレンジの関与は偶発的なものではなかった。特に、ストレンジから木下広次校長時代へと受け継がれたスポーツ教育を吟味してみると同校におけるエリート教育とスポーツとの関係は無視できないことがわかる。

「F.W.ストレンジ研究」について

これまでストレンジについては、阿部生雄や高橋孝蔵によって明らかにされてきた。本稿では、こうした先行研究の重要性を引き継ぐとともに、当時のエリート教育とスポーツ教育との強い関連性を指摘しておきたい。

高橋孝蔵は、英国人教師、ストレンジは「日本近代スポーツの父と呼ぶべき人物」⁷⁾であると述べ、近代スポーツ伝播に果たした彼の重要性を強調している。近年、阿部や高橋らによってストレンジの活動や経歴が明らかにされた。ストレンジは、英国のパブリックスクールの一つであったロンドンのユニヴァーシティ・カレッジ・スクールで、彼の同期の幕府留学生と出会う。それが後の東大総長、菊池大麓であった。高橋は、ストレンジが大学での「日本人留学生との出会いが、ストレンジの進路に大きな影響を与えたのはまず間違いないだろう」⁸⁾と述べている。日本人留学生は、江戸幕府から派遣された留学生であったため、幕府の大政奉還（1867年）の後、新明治政府が誕生すると帰国することになる。留学生の在英期間は約一年であり、在学期間は一学期間であったという。⁹⁾

留学生はストレンジに影響を与えると同時に、ストレンジも留学生に多くの影響を与えた。事実、留学生の一人であった林董三郎は、「旧幕府軍に参じ、函館五稜郭に立てこもって戦う」¹⁰⁾が、助命された後、駐英公使となり、日英同盟の立役者になっている。¹¹⁾中村敬輔は、「中村正直としてサミュエル・スマイルズの〈セルフ・ヘルプ〉を翻訳し、『西国立志編』を著し」¹²⁾た。外山正一と菊池大麓は学問の道に進む。彼らは東京大学総長を務め、文部大臣も歴任することになる。¹³⁾このように、幕府留学生は帰国後、英国規範を日本に紹介するなど、日英の関係を深めた。その貢献はイギリスとの関わりによって生じたものであった。

ストレンジの訪日には、菊池大麓が関与したと高橋は推測している。菊池は、1870年に新政府からイギリス留学を命じられ、再び留学している。このときケンブリッジ大学で日本初のボートマンになるなど、積極的にスポーツに関与している。高橋は、この期間にストレンジと菊池が「再び邂逅したに違いない」¹⁴⁾とし、その理由を「後々の二人の関係や、あるいは〈ストレンジ先生は菊池博士に伴われて来日した〉という話もあり、実際、この期間は二人が再び接近する条件は整っていた」¹⁵⁾と憶測している。高橋は、「ストレンジから菊池にアプローチがあり、菊池が日本国内の様子をうかがいながら、ストレンジを在英要路あるいは文部当局に紹介したのではあるまいか」¹⁶⁾と述べ、当時二人が共にロンドン市内に滞在していたという事実や、二人が同時期にボート熱にかられていたことな

どをその根拠としている。

ストレンジのように日本人留学生との縁により日本に赴いた英国人は例外ではない。先にも述べたように、当時の日本は、近代化を推し進めるために多くの外国人を雇用していた。ヘンリー・ダイアー教授（現在の東京大学工学部にあたる、工部大学校の初代都検を務めた）も、英国に使節団として滞在していた伊藤博文が日本へと誘った。¹⁷⁾

ストレンジのスポーツ普及

ここで注目しておきたいことは、ストレンジは、英語教師として活躍したのみならず、スポーツを普及させた人物であったことである。

特に、1883年に開催された第一回陸上運動会を通じて、東大生や予備門生にスポーツを伝える。高橋によれば、運動会の準備はストレンジ自身が整えたという。¹⁸⁾ 全体の指揮監督には菊池大麓も関わっている。

ストレンジは、この運動会を開催するために東京大学総長の加藤弘之にその必要性を説いていた。高橋は当時理学部長に就任していた菊池大麓の援護は強力であったと述べている。¹⁹⁾ さらに、ストレンジは「スポーツは体力のみを練ることを目的としているのではない。知徳を磨くためである」とし、「スポーツを行なう真の意味は人間形成や人格陶冶にあると考えていた」、「近代日本におけるスポーツの必要性を説き、満場から割れんばかりの大拍手を送られた」²⁰⁾ という。すなわち、彼は運動会を通じて人格は陶冶されるという英国流のスポーツ教育観を東大・同予備門というエリート校にもたらしたのであり、そうした考え方が当時の学校関係者から支持されたということになる。このように、ストレンジは、イギリスで普遍的であったスポーツ教育の価値観を日本に伝えた重要な人物であったと言える。

次にこの運動会にあわせて、ストレンジが執筆した『*Outdoor Games*』（1883年）に着目しておきたい。その中身は、ストレンジがフットボール（サッカー）やホッケー、陸上競技の走跳投の種目等を紹介する内容になっており、全34種目記載されている。クリケットなどの英国発祥の近代スポーツも含んでいたが、当時スポーツと考えられていた伝統的な英国の遊戯も紹介している。

例えば、「Leap-Frog」について、「これは素晴らしいスポーツで機敏さを必要とする。簡単である上に、何人でも楽しめる」²¹⁾ と叙述している。「Warning」については、「これをプレイすることで、少年達はほとんど走りっぱなしになるため、冬季に最も適したスポーツである」²²⁾ と述べている。

「Hare and Hounds」については、「イギリスではこの戸外遊戯が最も人気がある。田舎で楽しめるのが通常であるが、3時間の余暇があれば楽しめるので、〈都市〉の半休の日にも行われている」²³⁾ という。

フットボールの紹介は、「このゲームは、イギリスのウインタースポーツの中でも最も人気なスポーツである」から始まり、「二つのゴールをはさんでプレイする」と基本的なルー

ルを紹介している。ただし、本書が書かれた時期は、アソシエーションフットボールが設立（1863年）して間もない時期である。そのため、まだ今日のような1対1のゲーム形式についての言及はなく、同数で行なうようにといった記述にとどまっている。²⁴⁾

さらに、ストレンジは、野球も紹介する。そこには、「ベースボールはアメリカの人々の国技である。だが元々は英国の Rounders [ラウンダー] から派生したスポーツである」²⁵⁾と紹介している。ストレンジは予備門の野球部の創設にも尽力しており、英国スポーツの流れを汲むスポーツとしてこれを奨励した。以上のように、『*Outdoor Games*』から、ストレンジが日本に当時の英国でスポーツと呼ばれていた伝統的な遊戯や揺籃期の近代スポーツを普及させた事実を知ることができる。加えて、彼が開催した運動会は、日本人エリートにさらに英国流スポーツの精神を伝播させることにつながった。

東京大学の運動会

ストレンジの開催した運動会は、どのようなものであったのか。彼の運動会は、日本エリート学生にどのような影響を与えたのであろう。

1883年6月16日に東京大学・同予備門にて開催された運動会の種目は、ヤード競争・跳躍・投擲などが種目に掲げられた陸上競技大会のような競技会であった。高橋は、当時の様相は「本格的な陸上競技は初めての経験で、学生たちは準備段階から興奮気味であったという。放課後の運動場は教授も学生も全校総出の大賑わい。勢揃いして練習に励んだ」²⁶⁾と述べている。その興奮ぶりがうかがえる。しかし、その練習風景は「ハンマー投げでは投げた当人が頭を抱えるほど滑稽なありさまだった」。さらに、「どうすれば速く走れるかは、実際走ってみればすぐにわかることだった。武士に受け継がれてきた摺り足の動きより、自由奔放に手足を動かす方が遥かに速かった」。²⁷⁾ エリート学生たちが初めて英国流の近代スポーツに触れた様子がうかがえる。

当日、ストレンジは「シルクハットにフロックコート」²⁸⁾という、いかにもイギリスジェントルマンのいでたちで登場した。観客は数千人にも及んだという。学生が全力で投げたハンマーを片手で簡単にそれ以上の飛距離で投げ返すストレンジの勇ましい姿に観衆は驚嘆したという。²⁹⁾ こうしたスポーツマンらしいストレンジの姿は、英語教師としての姿だけでなく、エリートの証とはスポーツマンであるという素養を一高生に印象づけたように思われる。



(図1 「運動会 (明治十九年)」 出典：『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月)

運動会を通して、学生たちは、イートン校で培われたストレンジのスポーツマンぶりに大いに触れ、吸収した。当時、ストレンジに心服していた武田千代三郎（大日本体育協会初代副会長や県知事などを歴任）は、「定日定刻を厳守せよ」、「男子事に当たる宜しく奮闘力戦斃れて而して後己むの概あるべし。敗れて負惜みするは懦夫怯者の亜流のみ」、「ストレンジはベストを尽すことを厳しく求めたが、勝敗には必ずしもこだわらず、負けても毅然としていることを望んだ」、「審判に服従せよ」、「儉はスポオツマンの第一の信条たるべし、人の金品の憐みを乞条て迄も美服し、美食し、車行せんと欲す勿れ」³⁰⁾と教えたとし、英国流の規範をストレンジから学んだと述べている。上述の道德規範は、イートン校などのパブリックスクールにおけるエリート教育の中で遵守されていた信念に他ならず、それらは周知のように、スポーツ教育によって浸透していたものであった。

武田は、後年こうしたスポーツマンシップをストレンジから学んだと述べている。時間を守ること、審判への服従、負けても堂々とし、負け惜しみを言わないというようなスポーツマン的態度は、日本のエリート学生によって作り出された道德観ではなかったことがうかがえる。一高生は、フェアプレーなど、英国のアマチュアリズムを貫いていた規範に、運動会を通して初めて触れ、西欧の文化規範に魅了されていった。その意味では、ストレンジは運動会といった英国スポーツを伝えただけでなく、一高生にエリートとしての規範、「文明の精神」とは何かを伝えることにつながった。

菊池大麓も英国の学校でボート競技やそのスポーツ規範に触れ、英国文化に魅了された一人であった。菊池の考えは雑誌『運動界』に、まさしく「運動の精神」と題された評論記事を通して紹介されている。以下に示す「運動の精神」は、上記の雑誌に掲載された、菊池東京大学総長時代の演説であった。

「運動の精神」

菊池は、自身の留学経験から、イギリス人の気性がどこで養成されているのかを運動によるものだと主張する。「其の氣象は、即ち、英人をして世界到る所に植民地を作り、彼の

如く小さな島国をして盛んなる世界の大帝國となした」。³¹⁾ スポーツ規範と英国の強さは関係していると冒頭で断言する。

その精神とは、「マンリネス（男らしい剛健の気性）」、「ブラック（不屈の精神）」、「フェアプレイ（公正さ）」、「マグナミチー（magnanimityの語と思われる〔船場による補足〕。寛大さ）」、「オーダー（秩序）」の五つから構成されているという。

「マンリネス」について、菊池は「男らしきことである。運動を為し、競争上裏に立つには男らしくなければならぬ」³²⁾と説明している。そもそも、マンリネスとは、英国のパブリックスクールにおける教育思想である「アスレティシズム」の成立とともに、崇拝される諸徳目として学生に涵養された徳性であった。これについて、村岡健次は、『トム・ブラウンの学校生活』の主人公、トムはラグビー校で、たくましく男らしいジェントルマンに成長していくとし、彼の成長は、「丈夫な身体の礼賛、スポーツの奨励、男らしさの宣揚、英雄崇拝の是認といったことがらを意味するもの」であった³³⁾と解説している。スポーツによって涵養される男らしさとは、パブリックスクールの学校生活の中で尊ばれた特別な価値観であった。

「ブラック」について、菊池は、「不屈の精神」と訳している。これは、「英人は負けても自分は負けたと云うことを知らぬ、それが英人の勝つ所以であると言って居る。之で無ければいかぬ。勝つ時には威張り、負けたときには弱ってしまう様な精神は、国民として甚だ困ることである」³⁴⁾と述べている。一例に、オックスフォード対ケンブリッジの競漕の話を引き合いに出している。オックスフォードのチームが圧倒的な差でゴールし、号砲がなったが、ケンブリッジは最後まで全力で漕いだという。しかし、日本はというと、号砲がなると総ての艇が漕ぐのをやめる。それは、「甚だ不体裁である」とし、「ストレンジと云う英人が大学の競漕会も席に此のことを終止気にしました。それは英人の目から見ると、気に障って堪らないのである」³⁵⁾と述べている。勝敗にこだわらず、最後まで全力で戦うというスポーツ精神を教えている。

概して「フェアプレイ」については、「スポーツといえばフェアプレーの精神、そして、フェアプレーといえばアマチュアリズム」に他ならず、「フェアプレイ」は、英国アマチュアリズムの中核を貫くスポーツ規範であるとされてきた。³⁶⁾ また、ピーター・マッキントシュは、「フェアプレイは、第1にスポーツにおける立派な行動に対する英国人の言葉であり、第2には人生の他の諸相においても比喩的に使われる同国人の用語である」³⁷⁾と説明しており、フェアプレイとは、英国人にとってスポーツ以外の事柄にとっても重要な精神であった。

菊池は、「勝ちさえすれば宜いと云う様な精神は止さなければいかぬ」と述べ、こうした精神がなければ、「大国民とは成れない」³⁸⁾とする。加えて、「此の〈フェアプレイ〉を養成するにはどうも運動会が余程適当して居る」という。すなわち、フェアプレイの精神がなければ運動会は成り立たない。潮の流れが悪いから「ぐずぐずして居て漕ぎに出て来な

いで時間を延すこと」や、「良い權が有るとそれを隠して納って置く」ことなどは、「随分聞く所である」³⁹⁾と、明治期の日本学生のスポーツ規範の欠如を問題にしている。フェアプレイの精神が足りないと運動会は上手くいかない。したがって、学生たちが運動会を成立させることを通じて、フェアプレイの精神が啓発されると主張した。

「マグナミチー」(magnanimity)は寛大であることであると主張している。寛大さもまた、英国のエリートにとって重要な規範である。例えば、英国の小説である『Yeast』(1848年)の主人公 Lancelot が「紳士的で寛大で勇氣ある“優れた”人物になること」を「信条とする狩猟や競漕に関心を持つスポーツマン」⁴⁰⁾であったように、英国のエリートにとって、欠くことのできない態度であった。菊池は、勝った負けたで相手を罵ったり、「いまいましさに、それに向かって害を加へるとか云う風なことが折々日本の運動会にあるようだ」⁴¹⁾と述べている。「マグナミチー」の必要もまた、運動会を通じて奨励された。

「オーダー」については、規律を守ることである。菊池は、「自ら委員を選んで置きながら又自ら判定者を置きながら、判定者の言うことを聞かないで、判定者に議論を仕掛け、委員の命令を聞かない、時間も正しくなければ、規則もかまわない」⁴²⁾といった態度では、運動会は成立しないのであると述べる。マッキントッシュが「〈フェアプレイ〉は自尊心から発達する行動の仕方であるという考えを保持している人は、次のことを当然伴っている。…中略…(d) 常にレフェリーへの積極的な協力によって発揮されるレフェリーに対する信頼」⁴³⁾と説明しているように、審判に対する信頼、協力は英国のフェアプレイに対する考えの中で重視されていたものである。仮に審判のジャッジが間違っているとしても、審判に従うことが「オーダー」を意味し、近年メディアによるビデオ判定(「チャレンジ」)が採用されるまで、英国におけるこの考え方は永らくスポーツ界を支配してきたと言ってよいであろう。

以上の五つの英国スポーツ規範を教養として持ち合わせていることが、当時の日本人に必要とされる徳性であることを菊池は示した。菊池が、日本の学生にはまだ乏しいものであったと述べているように、一高での運動会は、単なるスポーツ競技大会の浸透を意味しない。言い換えれば、西欧からもたらされた文明の規範を身につけることによって、帝国日本の指導者を養成する気質を涵養しようとした試みであったに他ならない。事実、菊池は、こうした価値観は、「それで、運動会競争はこの気象を養成するに適當なる一つの手段である。右等の如き慣性を作る為めに最も有効なりと認めました」⁴⁴⁾とストレンジの創った「運動会」を通じて培われていくだろうと演説している。

さらに、菊池は、これらの精神は「古より武士気質として尊んだものと一致して居る。即ち日本には特に武士には昔より固有の精神があるが、どうも近来は動もすると此等の気象が消失したかと思わしむることがある。それで運動会競争は斯の気象を養成するに適當なる一つの手段であり」⁴⁵⁾と、古来日本の武士の気質を引き合いに出して、その浸透が進むように導いている。しかも「武士」という言葉を巧みに利用し、ナショナリズムを喚起しようとしているかに見える。英国に二度も留学し、新たな文化に触れたはずの菊池

が英国のスポーツ精神を単純に伝統的な概念である「武士道」に置きかえることは、時代の精神に逆行する。なぜならば、こうした精神を「武士道」の概念に容易に置換できるのであれば、わざわざ英国人のストレンジを日本に招聘する必要がないからである。運動会に賛同する必要もない。仮に、真に日本の武士気質に通じる必要があると考えたのであれば、武道や武術の師範を雇用すればよいはずである。ではなぜ、武士気質に言及したのかということが、問題にされなければならないであろう。西欧列強に屈しない近代国民国家のエリートを育成するためには、西欧流のスポーツ文化を英国人から学ぶ必要があることを菊池は理解していた。それは、文明社会に通用する近代国民国家形成を成し遂げる上での近代日本の礎としての規範を獲得させることが目的であったに他ならない。それゆえ、近代的な新しい価値観を武士気質の語に例えて普及させようと試みることは、こうした脈絡に関与した文化ナショナリズムの影響を考慮しておく必要があるということになる。これについては後述したい。

以上のように、ストレンジの果たした役割は、英国スポーツ文化やパブリックスクールで学んだスポーツ規範を東大や一高というエリート校にもたらしたことであったが、単なるスポーツの奨励ではなく、スポーツによって学ばれるべき近代的徳性をもたらしたことが重要であった。

運動の推奨は一高校長の木下へと受け継がれていく。ストレンジが運動会を根付かせるために組織を作ることに奔走した結果、「渡邊洪基総長を会長に据えて〈運動会〉は発足」⁴⁶⁾する。この「運動会」は、現在の大学の「体育会」のもとを形成し、校友会の名で定着していく。それを具現化したのが第一高等学校の木下広次校長であった。また木下は渡邊総長とも親交が深く、ストレンジのスポーツ教育を継承していく。

ストレンジが一高生にエリートに不可欠とされたスポーツ規範を伝えた功績は評価すべきものである。しかし、当時、日本にスポーツを伝えたのはストレンジだけではない。例えば、サッカーを日本にもたらしたとされている、英国海軍の Arcbald Lucius Douglas (ダグラス) もまた、運動会を日本で実施した一人である。このように、スポーツを日本に伝えた外国人教師は珍しいことではなかった。山口県で言えば、H.A.ステーブンスが札幌農学校のウィリアムス・クラークの来日より5年も早く、岩国市に西欧文化をもたらしたことで知られている。⁴⁷⁾ またそれは、世界的な現象でもあり、決して日本だけで起きた現象でもなかった。このことは、スポーツが19世紀中期以降に世界中に伝播しているという事実からも検証可能である。

註)

1) 『資料御雇外国人』は、官雇の外国人をほぼ全員掲載しているが私雇の外国人については不明な点が多く部分的である。同一人物の可能性が高くても、登録されており、二重登録を勘案すれば、正確な実態は表していない(ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、1975年5月、493頁)。

- 2) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、1頁。
- 3) 同上、66頁。
- 4) 同上、80頁。
- 5) 同上、80－82頁。
- 6) 同上、100頁。
- 7) 高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師 お雇い外国人 F.W.ストレンジの活躍』小学館、2012年6月、7頁。
- 8) 同上、70頁。
- 9) 同上、71頁。
- 10) 同上、72頁。
- 11) 同上、73頁。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上、94頁。
- 15) 同上、97－98頁。
- 16) 同上、102頁。
- 17) 同上、103－104頁。
- 18) 同上、139頁。
- 19) 同上、158頁。
- 20) 同上、159頁。
- 21) F. W. Strange 『*Outdoor Games*』丸家善七（出版人）、1883年6月、13頁。
- 22) 同上、7頁。
- 23) 同上、10頁。
- 24) 同上、21－22頁。
- 25) 同上、37頁。
- 26) 高橋、前掲書、142頁。
- 27) 同上。
- 28) 同上。
- 29) 同上、143頁。
- 30) 同上、159－161頁。
- 31) 菊池大麓「運動の精神」『運動界』第3巻第2号、運動界発行所、1899年2月、1頁。
- 32) 同上。
- 33) 村岡健次「「アスレティシズム」とジェントルマン—十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて—」村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年7月、250頁。

- 34) 菊池、前掲論文、1頁。
- 35) 同上、2頁。
- 36) 池田恵子「ジェントルマン・アマチュアとスポーツ—十九世紀イギリスにおけるアマチュア理念とその実態—」望田幸男、村岡健次監修 有賀郁敏編『スポーツ』ミネルヴァ書房、2002年5月、4頁。
- 37) 水野忠文訳ピーター・マキントシュ『フェアプレイ』ベースボール・マガジン社、1983年7月、序文v頁。
- 38) 菊池、前掲論文、2頁。
- 39) 同上、2頁。
- 40) 阿部生雄「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成—チャールズ・キングズリを中心として—」『岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求』岸野雄三教授退官記念論集刊行会、1832年3月、120頁。
- 41) 菊池、前掲論文、3頁。
- 42) 同上、2頁。
- 43) ピーター・マキントシュ、前掲書、173頁。
- 44) 菊池、前掲論文、3頁。
- 45) 同上、3頁。
- 46) 富岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成—木下広次（一高校長）を中心として—」『京都大学教育学部紀要』第40号、1994年、246頁。
- 47) 上杉進「英学事始め—in Iwakuni—岩国英国語学所と英国人教師ステーベンス」『英学史研究』日本英学史学会 第31号、1998年、30頁。

第2節 木下広次校長時代

第1項 木下広次のエリート像について

木下広次校長の誕生

ストレンジが運動会を開催した5年後に、一高の教頭に着任したのが木下広次である。

木下広次は、「明治8年より7年近くの間、フランスのパリの大学に留学」¹⁾しており、西欧社会を十分に視察してきた人物である。その後、第一高等学校の教頭及び校長を歴任すると、自治制寄宿舎や校友会の設置などの改革を行なった。²⁾

赴任以前の木下は、帝国大学法科大学教授を務めていたが、同時に一高の教頭職を兼任した。「明治16年事件」³⁾が起きるなど一高の風紀が乱れていた時期であった。木下はこの事件の際に事態収拾に携わった。

一高を改善しようとした森文部大臣から木下は直接依頼され、一高の教育方針を一任されたために、帝大教授と一高教頭職を歴任するに至った。⁴⁾彼は教頭職を1888年から1889年まで担うと、そのまま校長となり1893年まで務めた。その後の彼は、文部省専門学務局長を経て京都帝国大学の初代総長として活躍したことからも、彼の一高での教育活動は高く評価されたことが分かる。当時の木下の評判は、以下のように記されている。

其の始め入りて法科大学教授の任に就くや、主として学生の品行上に着目し、又大いに人材陶冶の点に心を傾けたり、或人之を評して曰く、大学に人傑あり、上に渡邊総長ありて之を統治し、下に木下評議官ありて之を助く、以て益々帝国大学の基礎をして鞏固ならしめたり⁵⁾

木下は、教員として学生の品行に注目しており、大学での人格陶冶と教育の面での活動が賞賛されていた。彼の評判は、人格陶冶においての手腕への評価であり、加えて、ストレンジの手によって作られた「運動会」の会長である渡邊総長の腹心であった。ストレンジがもたらしたスポーツ文化は、木下へと受け継がれた。事実、木下は、一高生や京大生に積極的に校友会でのスポーツを奨励し、京大でも運動会を開催するなどスポーツを推奨し続けた。加えて、ストレンジがもたらした東大の運動会を理想とするなど、木下は英国的な規範を重視しながら、スポーツを奨励した。

このことは、木下のスポーツ観や彼が奨励した運動会をみると東大の運動会の影響を受けており、英国流を推奨していることから分かる。京都大学総長時の演説が、雑誌『運動界』に掲載されている。

まず彼は、1899年に京都大学で陸上競技運動会を開催した。彼は運動会開催の理由について、以下のように述べた。

各人の嗜好一ならざるが故に、競技亦多数ならざるを得ずとせば尚可なり。其の多種

なるを望むの極遂に余興的・滑稽的・祭礼的の遊戯を加へ、新を競い、奇を衒い、揚々として観客に誇るに至りては吾人是を怨ずることを得ず。選択試験の主旨を以て執行せらるる東京帝国大学の競技会を見て、直ちに之を各所の学校に遷し、其の多種なるを以て、運動会の本旨実に斯の如しと為すに至れるもの滔々として皆然らざるはなし。之れ豈に嘆ずべきのことならずや⁶⁾

つまり木下は、京大生が滑稽とされる競技を行なうことで、観客が楽しむことを第一の目的にした運動会を理想としたのではなかった。東大の運動会を京大にもたらし、その精神を普遍化させていきたいと述べた。その精神とは、菊池大麓と同様に英国流スポーツ規範に他ならなかった。また木下は、競争競技を重視する理由を以下のように述べた。

或る軍人の談話に徴するに、我が帝国の軍隊を以て、欧米諸国の軍隊に比すれば、最も多く駆走する軍隊なりと云う事素より一場の談話に過ぎずして事実の之を明らかに証する者を得ずと雖ども、日清戦役に於ける我が軍隊突貫の多き、或は敵火を望見して早く已に突貫の用意を為せる者あるに至れりと云う戦術上の可否は、措て論ぜず。兎に角、駆足好きの軍隊なりと称するも不可なきものの如し。果たして然らば駆足は一長技として、大和民族専有に帰すべきもの。或は期するに難からざるべし。然るときは、学校の競技亦多数を要せず競争の一技を以て世界万国に当る⁷⁾

日本の軍隊が、疾駆する戦術をよく採用するため、学生は走ることを学ぶ必要があると述べた。事実、日清戦争において、突貫が多かったと述べた。それらを踏まえ、疾駆することを日本人の特色にするためにも、走る能力を学校で培う必要があると述べた。

さらに木下は、帝国主義国家日本の将来を見据えて、身体を鍛えたエリート青年が疾駆する戦場についても言及した。

支那四百余州を駆足するも善し、以て西邊利亜の広原を突貫するも可なり。駆足の進歩を企図せる大日本国の青年が駆足以て、身心を練磨するも亦妙ならずや。是れ其の競争を採用せる所以なり⁸⁾

当時の日本の国際関係を背景に、中国やシベリアで戦うことを前提に運動を通して鍛えられる身心の重要性を述べた。ここには当時の帝国主義的風潮が反映されている。繰り返すが、以下に示すように木下の理想の運動会は英国にあった。

諸外国の学校に於ける運動会に就きては、…中略…「ケムブリッジ」及「オックスフォード」両大学間の競技は全く競漕の一技に止まり、固と両大学間の他流試合に外ならず。而して之を行うもの非常の熱心を以て之に当るが故に、之を見るものも亦非

常の熱心を以て之を迎うるなり。若し此等の競漕をして単に観客の目を喜ばしむるを以て目的とするものならしめば、其の結果豈に此の如くなること得んや⁹⁾

オックスフォード対ケンブリッジの伝統の競漕の対抗試合を引き合いにだし、全力で戦えば、それに観客が感動するものであり、学生が全力で競技に打ち込む運動会こそ本物であるという認識が彼にはあった。賞品についても無報酬の精神を貫く英国流アマチュアリズムの精神を説いている。

大学生にして、現に青年者の標準となり、未来は社会の上流に立つべきものが賞品を得んと欲して競技することあらば、是れ余の諸君と共に屑とせざる所なり。故に賞品は、単に優勝者の名誉を表彰するに止めん¹⁰⁾

木下は、将来の日本を担うエリート青年が、金品といった賞品を目的にスポーツを行なうことは、あってはならないことだと述べた。アマチュアリズムを重視し、名誉の観念を持ち出す。彼の運動会は、英国流を尊重していた。そして、英国におけるエリート養成と同様に、国家を担う青年を育成すべき学校行事に重要な価値観を見出していた。

以上のように、木下が京都大学で積極的に運動会を開催した事実や、英国人ストレンジの創始した東大の運動会を理想としていたことは興味深い。これは、木下が西洋への留学経験や、東大、一高での校長時代を通して、スポーツが青年に与える影響の重要性を理解していたためだと考えられる。国家のためにエリートを育成することとは、近代国民国家形成まもない日本国を守ることに等しかった。木下が考える国家を担う若者を教育することは、一高での経験を原点とした普及活動に他ならない。ストレンジから渡邊、木下へと引き継がれたエリート教育の方針には共通項があった。それらの共通点はスポーツを積極的に取り入れたところにある。それは、エリートが有すべき特性の陶冶を帝国日本に浸透させる試みであった。

木下の演説

木下が一高に赴任すると積極的な改革に乗り出していく。全寮制寄宿舎の導入や彼の教育方針を考察する上で彼の演説に注目しておきたい。この演説は木下が教頭として赴任した際の全校生徒にむけた演説である。本演説は富岡らの研究で明らかにされているものであるが、ここでは、一高生がスポーツ規範を遵守するようになる上で、どのような教示がなされたのかに着目しておきたい。

木下は冒頭で「今日述る事は、後日に聞かず知らずを口実とする如きは予め謝絶」¹¹⁾すると述べており、学生に向けて彼の教育理念の徹底を図るとともにその強い意思を表した。

木下は一高生の存在を「後年社会の上流に立ち、学術にあれ、技芸にあれ、政治にあれ、

日本中の先達となりて日本を指揮すべき人びとなり」¹²⁾とし、一高生にエリートとしての自覚を促している。その彼の理想とするエリートとしての姿として、「品行は端正に、志は高尚にして、他の青年者の標準ともなるべきは素より当然」であるという。続けて、そのようなことをいまさら言うのもどうかと思うが、「今の有様を観察するに諸君は如何なる気風を有して社会の尊敬を得しや」¹³⁾と一高生に他の青年の模範となる品性を備えるように激励した。

さらに、今の一高生に、「志意高尚なるや、品行端正なるや、剛毅活発の気象あるや、自重自敬自守の精神あるや。余も人も未だ一として諸君か此等の点を以て世に貴重せらるるを觀ず」¹⁴⁾と木下の理想とする規範を携えた一高生の少なさを指摘し、加えて、「近来の社会一般擲るべきの規律を失い終に卑猥無作法をも觀て怪しまず。或は付するに書生風なる名称を以てせり」¹⁵⁾と述べて、「書生」による感化を危惧している。

なぜならば、一高生がそうした社会からの影響を受けて、現に「教員諸君に対せらるる様をみるに、大抵教えを受くるか為に敬礼さるるに非ず。多くは、落第を恐れて礼すると言う様な卑劣心より起ると思考す」¹⁶⁾と、教員に対して敬礼するのは、学生が成績を求めるためだけの行為であり、教員に真に敬意を払っておらず、私利私欲のために行動しているにすぎないと指摘する。しかも、それは一高生に「自重自敬自主の気風」が乏しいためであると説いている。木下はエリートの素養として、この「自重自敬自主の気風」を重視し、啓発していく。

では、どのようにして一高生に「(自重自敬) 自主の気風」を身につけさせていくのか。木下は校友会と自治制寄宿舎を設置した。自治制寄宿舎は、英国のパブリックスクールにおける最大の特徴である。村岡によれば、「パブリック・スクールは、イギリスに独特なエリート教育のための学校」であり、「寄宿舎を重要な一特色」とし、「学生が、学校ないし寮で共同生活を送る、そういう男社会であった」¹⁷⁾。エリート学校に自治制の寄宿舎を設置するという教育システムは、19世紀初めに英国で誕生した。もう一つの特色に、「学業以外の時間における生徒の校内自治とその上に築かれたプリーフェクト＝ファギング制」がしかれていたことをあげている。¹⁸⁾プリーフェクト＝ファギング制とは、監督生制度のことであり、最上級生をプリーフェクトに任命し、彼等が「下級生の指導ならびに生徒自治と規律の責任を負わせるものである」。¹⁹⁾またプリーフェクトは、「下級生に罰を加える権限も認められており、むち打ちによる体罰を加えることができた」。²⁰⁾ファギングとは、上級生が自治という大きな責任をもたされている一方で、「下級生をファグとして自分に奉仕させる特権も有し、学校生活の秩序を維持するために、生徒間のタテの人間関係を有効に活用した」²¹⁾ものであった。すなわち、このシステムは学校内の自治を維持するための方法であり、現在の体育会気質にも受け継がれている風習であるといえる。

木下の寄宿舎に関する研究は多く、寺崎昌男「自治寮制度成立史論」『旧制高等学校史研究』第15号や高橋佐門『旧制高等学校の教育と学生』、ドナルド・T・ローデン『友の憂いに吾は泣く 旧制高等学校物語』などがある。しかし、自治制寄宿舎に注目する一方で、

校友会についてはあまり考察されていないと富岡勝が指摘している。²²⁾そこで、次に、寄宿舎制度と学生スポーツによってどのような一高生が誕生したのか、またそれがスポーツにどのような影響を与え、どのような日本的スポーツ規範が形成されたのかについて考察していきたい。

「自重自敬自主の気風」

先に述べたように、「自重自敬自主の気風」とは、一高生が国家のエリートとして備えるべき気風であった。この気風を育てるために木下は自治制寄宿舎と校友会を設置したように思われる。

木下によれば、西洋諸国の青年にはこの気風が備わっているという。つまり、「西洋諸国に徴するに、自重自敬の風社会礼節の事は大抵家庭教育の然らしむ所なり」²³⁾と述べ、西欧の家庭教育の中では自然に育っているものであるという。木下は、日本にはまだ定着していないと考えて、自主性の啓発を試みている。

その背景には次のような木下の考えがあった。「諸君も此等の点は夙に家庭に在て發達成熟を得たるべきに、封建の主義廢れて新主義未だ確立せず。因て父兄も亦た家庭教育の方向に迷い、遂に今日の結果を起こせり」²⁴⁾という。すなわち、江戸時代が終わり間もないため、明治期という新しい時代を担う教育ができていないと考え、明治期という帝国主義の時代を担う教育に、西欧社会の教育をいち早く取り入れる必要性を説いていた。

木下は続けて、「余大学にて数年実験せしに、本校卒業生の大学に入る者ありて希に或は多数打揃ふて品行正しく、学業も隨て着実なる。…中略…その原因尋ぬれば、必ず其級内に於て二三の輩切磋して品行を重んじ団結して、一般の風習を避くるを務めたるより、他の同級生も自ら其の気風に感化せらしに原因せり」²⁵⁾と述べ、切磋琢磨して成長した優秀な先輩のエピソードを説明していく。そして、「互いに切磋し与論を起し、団結を大にし第一高等中学校の一大団結を為し、自重自敬の気風を養成され。世人に本校生は尋常凡庸の書生に非ず」²⁶⁾と演説している。木下は、学校生活の中で互いに団結し、切磋し、学びあいながら、エリートとして成長していくよう願った。加えて、上級生から下級生へとその気風を浸透させていこうとした。彼の教育策を見る限り、切磋琢磨するための場は、自治制寄宿舎や校友会であったと考えられる。木下が理想とするエリートとしての振る舞いは、西欧社会に通じるものであった。

諸君の行状を見るに、帽子の儘教室出入りするあり…中略…西洋にても斯くあらんと想像する人あらば殊の外量の見違ひなり。西洋諸国にて社会と宗教とか礼儀礼節に制裁を与ふるの嚴重なることは、恐らく諸君の想像外なるべし。当時の学生生徒の無作法、無礼讓なるは諸国に比例なしとて、或る外国人教師が大学にて余に向つて驚嘆したる位なり。今日よりして以来は是迄の通心得られては諸君の不幸を招くも知るべからず²⁷⁾

木下は、当時の一高生の作法に対して、エリート規範としてそぐわないものであると指摘した。そして、西欧社会のマナーを身につけるべきであると述べた。西欧の礼儀作法は木下にとっては重要であった。「校内に在て僅も礼儀を忘却する如き輩は、嚴重の処分を執るべし」。²⁸⁾ この一言からも木下の並々ならぬ決意が感じられる。このことから、彼の理想のエリート学生の礼儀作法とは、西欧の学生をモデルにし、学生に徹底していたように思われる。

次に寄宿制度について述べる。「第二に申すべきことは寄宿舎の事なり。外宿の風習は実に諸君に毒薬なり。校外一步皆敵の決心あらば寄宿舎の必用は多言を要せず」²⁹⁾ と外の世界から籠城するために全寮制を推奨している。³⁰⁾

第三に規律については「坐作進退の稽古なれば、又一の学問にして、無用のものに非らず」³¹⁾ と言及する。加えて、「軍人の規律の如く偏に柔順を旨とせず、男らしき多少の粗暴は諸君青年の天性なれば」³²⁾ 許すと述べており、「マンリネス」を涵養すべき場と考えられていたことが分かる。「マンリネス」は、先に述べたようにアスレティズムにおいて重視される徳目、「男らしさ、剛健の気性」であり、英国のパブリックスクールで最も尊ばれていた。全寮制寄宿舎を導入する上で、英国のパブリックスクール同様に、その空間で培われる徳性に期待している。

第四に、一高生は国家に有用たる人物に育たなければならないという。

諸君が本校に入りたるは學術競争の結果なり。諸君は天下の青年者を相手とし、劇しき競争に打勝ちて勝利を得たる人々なり。…中略…世人も此の人々は、我々の子弟を打ち越し競走の場にて勝ちを占めたる人々なれば、凡庸の青年者に非らず。必ず志意高尚、品行端正にして有為活濶の氣象あるに相違なく、他日国家の器用たるべしと云う羨望あるは事実なり。然るに諸君は其反対に出て卑劣柔弱の為行あらば、世人を欺むくの人なり。本校は此の如き人を容るるの余地なし³³⁾

木下は、受験競争に勝って一高に入ったからには、社会から尊敬され、また国家にとって有用な人物に育たなければならない。相応しくないものはこの学校には不要であると述べた。国家にとって重要な人物とは、外敵から国家を守り、そして発展させることができる能力を有するものであった。そのために、彼は就任演説で学生に礼儀を守ることを徹底するように求めていた。ここに木下の理想としていた教育思想の真髄として品性端正、国家に有用たる人物への成長をみることが出来る。それらは英国アスレティズムが尊ぶ、社会的フェアプレイ、卑怯な行為を卑しむ感性と共通している。

護国旗制定

さらに、木下は国家という概念を一高生に定着させようとする。そもそも国家を構成す

る国民の概念はどのようにして浸透するのか。ベネディクト・アンダーソンによれば、「国民とはイメージして心に描かれた想像の政治共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意思決定主体〕として想像される」³⁴⁾ものである。さらに言えば、「国民は一つの共同体として想像される。なぜなら、国民のなかにたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれる」³⁵⁾と説明している。すなわち、近代国民国家における国民とは、人が国家という概念を想像し、自己の内に創り出すことで、国民という共同体が誕生する。国家という想像の共同体が誕生したのは、「十八世紀がナショナリズムの時代の夜明け」³⁶⁾と述べられているように、18世紀以降、世界に国家が誕生していく。西欧列強との生存競争に負けないためにも、近代国民国家の完成を急いだ日本もまた、この共同体を創っていく。

国家の中樞を担う人物になるようにという一高生に対する木下の願いは、学校や国家全体の期待でもあった。それゆえ、彼は国家と学生自身が国民であることを想像させる必要があると考えていた。それが、護国旗にあらわれている。護国旗は、木下によって1889年2月5日に制定されて以来60年以上、「校旗とは呼ばず、常に護国旗と称され」た。³⁷⁾この旗にこめられた意味とは、久原（射弦）校長によれば、「特に「國」の字を入るるは、伝えて云う、森文部大臣の発意なりと。即ちこれ、将来国家最高の教育を受け、国家中樞の地位に立つべき本校生徒の、国家的精神涵養の対象たらしめんとせしものにして、実に本校教育の真髄を具現せるものというべきなり」³⁸⁾と記されており、木下を招聘した森が、国家に立つべきエリートに成長して欲しいという意図をこめた。そして、1895年には久原校長（木下は前々校長。前校長は嘉納治五郎である。また久原は木下校長時代の教頭であった。）が、次のように演説している。

木下前々校長が此の旗を作り…中略…吾人が此の旗を捧持する時は、恭敬赤誠吾人をして自ら国家的観念を助長し、国家の為には同一の精神を以て全校一致、身命をも顧みず砲烟弾雨を冒すの大決心を起さしめんが為にして、護国旗の称偶然に非ざるなり、故に此の護国旗の赴く所は水火も避ざるの意気を存すべきこと何ぞ軍隊の聯隊旗と異ならんや³⁹⁾

このように、木下によって命名された護国旗は、国家を守護するために、命を惜しまず、砲弾の中で戦う青年に成長し、生存競争に打ち勝てという意味が込められている。当時流行した社会ダーウィニズムの論理が十分に意識されているように伺える。

また護国旗は天皇への忠誠、忠君愛国の精神を生徒に鼓吹した。ローデンが、「一高生にとって、校旗の意味する全体的概念は理解できないところがあった」とし、木下が護国旗を作成した1889年頃には、「この時期には、かつての予備門時代に対する忠誠心は事実上存在しなくなっていたからであった」⁴⁰⁾と指摘している。なぜ護国旗は、久原校長の演説にみられるような意味をもったのであろうか。それは明治天皇が関わることになる。護

国旗の公開はわざわざ憲法発布の日に合わせてられた。加えて、木下は「校旗の公開の他に憲法発布の式典の一週間前から、その準備のために授業を休講にした。一高資料によれば、そんなある日、彼は全学生をグラウンドに集めて彼の前に立たせ、〈天皇陛下万歳〉を懇切丁寧に指導した」⁴¹⁾ という。

憲法発布の日になると、生徒は宮城へと行軍した。この時の旗手が若槻礼次郎であった。また「OUR TRUE HEART」と書かれたプラカードや、日本国旗、陛下万々歳と書かれた巨大な旗を翻した。最敬礼した一高生の姿と護国旗を明治天皇が謁見したときの様子が一高史に残されている。

本校一千の健児初めて此の護国旗を擁して…中略…畏くも陛下には護国旗に対し御会釈を賜りしと伝えられるる至上の光栄に輝くもの、正に本校永遠の重寶となすべし。

42)

この瞬間に単なる校旗ではなく、国家に忠誠を果たすための「護国旗」に変わったことは明白である。一高生に国家概念を想像させ、忠君愛国の精神を涵養しようとする木下の考えと学校と国家に対する忠誠心護国旗が体现している。

以上のように、護国旗には国家のために有用な人物へと成長して欲しいという願いが込められており、そして、生徒もその精神を理解し、一高の誇りとして大切に扱う。このことは、寮歌に「代表的な一高の寮歌から見て来ると、〈自治〉、〈護国〉、〈正義〉というような語を頻繁に用い」、「明治期はその伝統の〈護国調〉を完成した時期といえる」⁴³⁾ と指摘されている点と合致する。こうしたことから、「護国旗」は寮歌同様に一高生にとってエリート教育のシンボルとなり得、忠君愛国の役割を果たしたと考えられる。すなわち、一高生は、護国旗によって国家を意識し、国民という共同体の認識につながった。木下校長の教育方針は、まさしく近代国家の概念を日本にも普遍化させたといえる。これもまた「文明の精神」である。しかも、護国旗を日本の特徴とみる考え方は浅薄である。イギリスにおいてもエリートスクールへの忠誠心が、19世紀末に、大英帝国への忠誠心へと変容している。ポートルースにおける学校のロゴ（徽章）ないしエンブレム（紋章）はまさしく護国旗同然であった。英国の学校に精通していた木下が、この点を見逃すといったことの方が考え難い。

総じて言えば、木下の使命とは、国家の中枢を担う人物（エリート）の育成であった。そして、彼によって具体化された教育が、自治制全寮寄宿舎と校友会の設置であった。こうした木下の考えを通して、スポーツが奨励されていく。スポーツと社会ダーウィニズムは、近代日本を背負って立つエリート養成と、他国に侵略されない軍備、産業をソフトウェアの面から支える構造の中で、着実に接近した。その介在者となったのが、一高改革に力を注いだ木下であったと言える。

次項以降では、木下の一高の改革が極東版のパブリックスクールであったことをさらに

検証していく。木下が行なった教育方針は、一高生にどのような具体的影響を与えるものであったのかについて考察していく。

第2項 寄宿舎の設置

これまで述べてきたように、木下が理想とするエリートを育成する上で、重要であったのは自治制の寄宿舎というシステムであった。そこで期待されたことは、「男らしさ」や「自主性」の涵養などであり、英国的な規範を浸透させることであった。

自治制は1890年に取り入れられた。⁴⁴⁾ 東寮と西寮が建設され、木下が基本精神としての「四綱領」を示した。『第一高等学校自治寮60年史』によると、「木下校長の告示が、一高自治寮の立寮の意義を明確に表現したものとして、…中略…新しく入寮する者に対して、例外なく〈記事朗読〉として読み聞かせられるようになった。〈我が校の寄宿舎を設けたる所以のものは〉に始まり、〈諸子夫れこれを勉めよや〉で終わる約二千語の告示」⁴⁵⁾ が行われた。ここで、入寮者に徹底された当時の告示を『第一高等学校自治寮60年史』から確認したい。

(一) 近来わが国の風俗が乱れ、とくに学生たちの下宿生活は勝手気ままである。一高ではこの狂った情勢に対抗して徳義を維持しようと…中略…この乱れた下宿の学生たちと一緒にいるのでは、立派な行いをし、徳義を積むなどということは木に縁つて魚を求めるようなものである。

(二) こうした悪風に染まらずに修学するには籠城の覚悟がなければならない。

(三) 一高寄宿舎の目的を達成するためにも入寮者は四つの綱領を奉戴し、目的を達成するために努めなければならない。

第一に自重の念を起し廉恥の心を養成すること

第二に親愛の情を起し公共の心を養成すること

第三に辞讓の心を起し静肅の習慣を養成すること

第四に摂生に注意し清潔の習慣を養成すること

(四) 上の目的を達成するためには、区々たる規則に頼り、また管理者の手を借りて出来るものではない。寮生自身が己の地位と責任を自覚し、自ら治めようとする精神を奮い起こし、寮友同士がお互いに切磋琢磨して戒め合うべきである。

(五) 全国五つの高等中学校の首位を占めて世間に尊敬されること他校の比ではない諸君に、私(木下)は十分な信頼を置いている。従来のような干渉の制度を廃し、諸君の自治に委ねようとするものである。すなわち当校としては、寄宿寮主任を置いて大体を監督させ、寄宿係に細務を執らせ、会計の事務を会計係に扱わせることとするが、寮内の一切の規約は諸君の全体の会議で定め、学校の許可を経て実行するようにし、寮内の整頓の責任は諸君自らが当たるということにしたい。要するに自治である。諸君の努力を望む⁴⁶⁾

木下は、外部からの籠城、教育方針である四綱領、学生の自治を訓示した。四綱領では、廉恥心、公共心、静粛の習慣、清潔の習慣といった西欧社会の規範を示した。一高生をエリートとみなしたこの教育は、一高生にとって誇りとなった。当時二年生の赤沼金三郎は、これまでの寄宿舎は、「監督を厳しくし、我々を子供のように扱ってきた」が、木下校長は、「四綱領を示すだけで我々に寮の自治を与えようと言われた。寄宿寮を生徒の自治に任せ、規約の編成も生徒の手に委ねるなどということは、わが国の種々の官立学校に例がない」ゆえに、「もし自治に失敗したら天下の笑いものになろう。我々の立場やわが国の将来を思うとき、そのような不体裁をして世の人に笑われるくらいなら、今すぐ校長に頼んで適当に監督してもらおう方がましである」⁴⁷⁾と述べた。赤沼の発言からも、自治制が当時の日本の教育の中で、革新的であったことが分かる。

ローデンは、こうした一高生の寄宿舎での学生生活を読み解いた。『友の憂いに吾は泣く(上)(下)』の原題は『*Schooldays in Imperial Japan*』であり、帝国主義下エリート校の学生生活を検証している。“*Baseball and the Quest for National Dignity in Meiji Japan*” (試訳「明治期日本における国家の威厳の追求を担った野球」)では、一高生らエリート学生が、野球でアメリカに勝つことは、ナショナリズムを高揚させる上で重要な役割を果たしたことを指摘し、日本に社会ダーウィニズムの影響があったことを示している。

すなわち、ローデンは、英国において、19世紀中葉ころから増大した自治制寄宿制度が、帝国主義下で、エリート教育に採用されたことを論じている。木下の教育方針は、その自治制寄宿舎の伝播の波が、日本にも到来したことを示している。そこでは、英国のパブリックスクール同様にスポーツが奨励された。西欧流の「文明の精神」が、自治制寄宿舎とスポーツによって涵養されたことは、偶然ではない。スポーツの国際化と政治に詳しいマーティン・ポリーがまとめているように、「東のイートン校として知られたインドのマヨ・コレッジが、英国のパブリックスクールにおけるスポーツ崇拜の時期の付随していた価値がそのまま彼らの新天地に置換されたも同然だった」。またインドに限らず、カリブ海に浮かぶ西インド諸島の学校の状況も、熱帯地域版『トム・ブラウンの学校生活』に他ならなかったとポリーが述べていることと関連づけられる。ポリーは帝国を通じて、「忠誠心やチームワーク、規律、克己心、団体に対する自主的犠牲心、そして一おそらくもっとも重要であった一スポーツを実践するという考えがすべてスポーツを通じて教えられた」⁴⁸⁾と述べている。

このような視野を投げれば、一高で生じたことは、まさしく「極東のパブリックスクール」であったと言っても過言ではないだろう。

第3項 校友会の設置

木下は、自治制寄宿舎を設置するとともに、校友会を奨励した。設置の経緯にあたって、学生が運動部や弁論部、雑誌部などを網羅する校友会を組織せよと決議し、木下校長が賛

同したことで設置された。⁴⁹⁾

校友会が設置されたのは、1890年10月24日であり、「本校の職員生徒及び本校に縁故ある者を以て会員」とし、「文武の諸技芸を奨励する」⁵⁰⁾と、生徒のみならず学校関係者にも奨励した。当初の運動部は、「文芸、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ロンテニス、陸上運動、遠足」⁵¹⁾の九部からなる。一高の校友会は、他の高等中学校に比べ、運動部が多い。例えば、翌年の1891年に校友会を設置した第五高等中学校では、「雑誌部、演説部、撃剣部、柔道部、弓術部、戸外遊戯部」の六部であり、第二高等中学校は1893年に設置され、「文芸部、科学部、武芸部、雑誌部」の四部であった。⁵²⁾同時期のナンバースクールを比較すると一高の特徴として、運動部が多く、西欧スポーツを積極的に行なっていた。

一高の校友会の大幅な改変や規則の改定が行われたのが1908年である。規則は、「本会の目的は会員の親睦を厚うし心身の修養を図り、以て校風を發揚するにあり」⁵³⁾となり、スポーツによって心身を陶冶し、校風を形成することが明言された。こうした校風の啓発は、学生たちも望むところであった。1898年『一高校友会雑誌』(93号)に「悲しき哉、吾に吟ずべき国歌なきなり、吾に唱すべき校歌なきなり、吾に誼すべき寮歌あらざるなり。吾は、我が国民に大陸的な雄豪の意気を注入すべき国家を求めて已まず、吾は我校友に勤勉尚武の実を挙げ、文に武に天下学生界に覇たるべき英風を鼓吹すべき校歌を望みて已まず」⁵⁴⁾と投稿された。国歌と校歌、寮歌は並列的に価値付けられており、学生にとっては、校歌(寮歌)は国家への帰属意識を發揚する装置でもあった。この投稿には、国家への期待とその国家を担うエリートとしてどのような精神が必要とされていたのが記載されている。まさに、勤勉尚武と文武両道の精神を英国の学生生活から得ようとするものであった。学生たちは自治制寄宿舎の生活と校友会でのスポーツを通じて、英国的な気風を身につけることが期待されていた。

1908年には部の改変が行われ、各々の名称も変更された。部数は15に増加し、「文芸、端艇、撃剣、柔道、弓術、野球、陸上運動、水泳、弁論、旅行、庭球、ア式蹴球、ラ式蹴球、籠球、空手」⁵⁵⁾から構成された(ア式蹴球は、アソシエーションフットボールの略でサッカー部。ラ式蹴球は、ラグビーフットボールの略称)。

藤井泰によれば、アスレティズムは「運動競技、わけてもクリケット、フットボール(サッカーとラグビー)、ボートといった集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手段として重要視する態度」⁵⁶⁾であると指摘している。一高の校友会にみられるスポーツはアスレティズム的態度を涵養する集団スポーツが中心である。このことは、日本でも集団スポーツによって、エリートとして的人格を涵養するスポーツ教育が普遍的になったことを示している。

次に、1890年の発足時には、英名であったボート、ローンテニス、ベースボールの三競技が日本語表記に変化した。日清・日露戦争後というナショナリズムが高揚していた時期に和名に変化したことは、偶然ではないだろう。例えば、籠谷次郎は、1894-9

5年にかけて愛知県が行なった調査から日清戦争が従軍者の家族・児童の感情、一般の意向の変化を以下のように指摘した。「調査の結果、共通して述べられているのは、〈敵愾心〉の奮起、〈愛国敵愾〉の気風、〈忠君愛国〉の観念を強めたという指摘である。また国家思想を明確にしたこと」などがみられたという。⁵⁷⁾ それゆえ、部活動の名称が和名表記されたことは、スポーツと当時のナショナリズムの結びつきを示している。

加えて、『第一高等学校自治寮六十年史』によれば、ローンテニス部は、婦女子の遊戯として廃部とされた。⁵⁸⁾ 一高とは、パブリックスクールと同様に、男子学生だけで構成された男社会であり、女性的な要素は受け入れられないものであった。婦女子的な要素の排除は、アスレティシズムの中心にあったシンプル・マンリネス（質実剛健）の精神と共通している。こうした事実の中にも英国のアスレティシズムの影響の一端をみることができる。

第4項 極東のパブリックスクール

これまで述べてきたように、一高では自治制寄宿舎を導入しスポーツを奨励した。それらを通じて一高生は国家を担うエリートとしての特権意識を認識した。木下は、選ばれた男子学生を社会から隔離させ、自身や国家の理想としたエリートを創りあげた。スポーツ規範はこのようにエリート教育にとって重要な役割を果たした。

ところで、ローデンは、「もし仮りに、昔の武士道の教えが時代を間違えて出現するとしたら、ビクトリア朝時代のパブリック・スクールに流行した〈筋骨たくましいキリスト精神〉ぐらいのものであったろう」と述べ、「一高のスポーツ選手たちは、さながらエール大学のラグビー部の片ワレに酷似していた。そして、弱々しさ、女々しさ、それに快樂主義や博学主義をも認めようとしないやり方で人間を分析したダーウィン主義者の理論が、社会に適応時代には、一高運動部は格好のモデルとなった」⁵⁹⁾ と指摘し、一高生と西欧のエリート学生の類似性について言及している。

ここで重要な指摘に出会う。ローデンは一高の研究を通じて、日本的とされる特性を「武士道」と解釈し、それは世界的に見れば共通するものがあるとして以下のように述べている。「旧制高等学校の蛮カラ主義が日本人特有のものであるという仮説は、国際的な視点からは成り立たない。ビクトリア朝時代のパブリック・スクールやニューイングランドの東部の大学の同時代の記録には、日本の旧制高等学校とよく似た生活がつづられている。たとえば下級生への制裁、男らしさとか自己犠牲の尊重、成文化されてはいない習慣に対する過度の忠誠、などがそれである」。⁶⁰⁾ ローデンは、一高研究を通じて、「武士道」といった日本的徳性が、特に英国の学校で育まれた徳性と類似していたと論じている。つまり彼は、一高研究から社会ダーウィニズムの影響を示唆している。このことは、「文明の精神」形成の観点から次のように整理できる。西欧論者の言う「武士道」精神とは、「文明の精神」の受容の結果、登場した規範である。前章で示したように、明治期日本の「武士道」は創られた伝統であり、新渡戸の言う『武士道』は日本人に西欧流の「文明の精神」を啓発するものであった。

こうした事実を勘案すれば、一高生の姿は、ビクトリア朝時代のパブリックスクールに流行した「筋骨たくましいキリスト精神」と偶々類似したのではなく、彼らの規範は紛れもなく、西欧からとりわけ英国から取り入れた「文明の精神」の擦り込み過程を映すものであると考えれば辻褄があう。西欧のエリート教育からスポーツ規範を取り入れた。木下の行なった一高流のエリート育成の方法とは、まさに極東版パブリックスクールの実現であったといえる。そこで、涵養された「質実剛健」などの日本的とされる規範は、英国のアスレティズムが重視したシンプル・マンリネスの模倣としての帝国主義下の世界中で涵養された「文明の精神」であった。

しかし、これまで、国内における日本体育史ないしスポーツ史研究では、上述のような見解は主流なものではなかった。とりわけ、ローデン批判を行なった坂上は、「一高の野球部員たちの自己主張を、帝国主義、そのイデオロギー的表現としての社会ダーウィニズムとエリート意識の結合物としてとらえる彼の主張は、はたして妥当なものだろうか。学生野球は、本当にそのようなイデオロギーによって染め上げられてしまったのだろうか」⁶¹⁾とし、ローデンの指摘した社会ダーウィニズムによる影響について懐疑的である。

ローデンのいう当時のスポーツイデオロギーの様相は、近年明らかにされているアジアやカリブ海地域を含めた世界史としてのスポーツと帝国の関係史からみれば、個々の地域的特徴については差異があるにしても、ポリーが述べたように世界的なものであったことは疑いない。こうした状況の中で、日本だけが社会ダーウィニズムの影響から孤立無縁であり得たとは考え難い。たしかに、どの程度独自のスポーツ規範を成長させることは可能であったのだろうかという点も注視されなければならないが、一方でこれまで言及してきたように、実際には、木下が極東版パブリックスクールを日本にもたらしたに等しいという前提を無視することも浅薄な理解である。こうした背景を踏まえたとき、改めてローデンの言及した社会ダーウィニズムの影響を重視する必要があるように思われる。

そこで、次節以降では、木下以降の校長による、一高教育論を捉え、一高における「武士道」論の形成過程をより詳細に明らかにしていきたい。

具体的には、木下の校長時代の教頭であった久原躬弦校長や、『*The Soul of Japan* 武士道』の著者であり、それにより「文明の精神」を啓発した新渡戸稲造校長時代に焦点を絞る。

註)

1) 富岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成—木下広次（一高校長）を中心に—」『京都大学教育学部紀要』第40号、1994年、242頁。

2) 同上、240頁。

3) 東大及び同予備門学生が学位授与式を無断で欠席し、さらに騒ぎを起こし、145名が退学処分をうけた事件。ただし一年後に全員が復学を許可された（富岡勝、同上、240頁。）。

4) 同上。

- 5) 武藤巖男『肥後先哲偉蹟 後編』1928年『肥後文献叢書 別巻(二)』1971年、歴史図書社所収、648頁。
- 6) 木下広次「木下京都大学総長の運動意見」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年5月、1頁。
- 7) 同上、3頁。
- 8) 同上。
- 9) 同上、2頁。
- 10) 同上、3頁。
- 11) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、103頁。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上。
- 15) 同上。
- 16) 同上。
- 17) 村岡健次「「アスレティシズム」とジェントルマン—十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて—」村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年7月、228頁。
- 18) 同上、230頁。
- 19) 藤井泰「パブリック・スクール」松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『帝国社会の諸相』研究社出版、1996年1月、169頁。
- 20) 同上。
- 21) 同上。
- 22) 富岡、前掲書、237頁。
- 23) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、104頁。
- 24) 同上。
- 25) 同上、105頁。
- 26) 同上。
- 27) 同上。
- 28) 同上、105—106頁。
- 29) 同上、106頁。
- 30) 「籠城主義」という。富岡は、「社会一般、特に「書生」と呼ばれる学生一般の道徳的混乱状態を木下は指摘し、その影響が一高生にも及んでいると憂慮するのである」と述べ、「一般下宿に住んでいた生徒たちを校内に隔離する「皆寄宿舎制」の方針を打ち出した」と説明している。(富岡、前掲書、241頁。)
- 31) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、106頁。
- 32) 同上。

- 33) 同上。
- 34) 白石さや、白石隆訳ベネディクト・アンダーソン『創造の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年5月、24頁。
- 35) 同上、26頁。
- 36) 同上、34頁。
- 37) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、37頁。
- 38) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、194頁。
- 39) 同上。
- 40) 森敦監訳ドナルド・T・ローデン『友の憂いに吾は泣く（上）旧制高等学校物語』講談社、1983年4月、123頁。
- 41) 同上、125頁。
- 42) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、37頁。
- 43) 高橋佐門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』昭和出版、1978年9月、49頁。
- 44) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、31頁。
- 45) 同上、31-32頁。
- 46) 同上、32-33頁。
- 47) 同上、33頁。
- 48) 2014年3月日英比較スポーツ史研究会（於 山口大学）当日配布資料、マーティン・ポリー（池田恵子試訳）「スポーツと帝国・外交—19世紀及び20世紀における英国のイターナショナルなスポーツ—」、17頁。
- 49) 高橋佐門、前掲書、132頁。
- 50) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、100頁。
- 51) 同上。
- 52) 高橋佐門、前掲書、140頁。
- 53) 同上。
- 54) 同上、14頁。
- 55) 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、100頁。
- 56) 藤井泰、前掲書、170頁。
- 57) 籠谷次郎「国民教育の展開」井口和起編『近代日本の軌跡3 日清・日露戦争』吉川弘文館、1994年10月、182頁。
- 58) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、43頁。

- 59) ドナルド・T・ローデン、前掲書、241－242頁。
- 60) 同上、235頁。
- 61) 坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年7月、14頁。

第3節 木下以降の校長時代

木下広次が校長職を辞したのは1892年であり、在任期間は3年余りであったが、教頭時代を含むと、約5年間一高の運営を務めた。木下の後任として着任したのは、嘉納治五郎であった。

1893年9月13日に、嘉納は一高校長と高等師範学校兼任を命じ¹⁾られた。一週間後の9月20日に、嘉納は転任し、久原躬弦が校長（この時点では校長心得であった）に就任した。久原の校長職在任期間は1893年から1897年までの約4年間であった。久原は、大学南校卒業後、米国ジョーンズ・ポプキンス大学及びエール大学に留学している。久原もまた木下同様に西欧に精通していた人物であった。

久原は1895年に次のように述べている。「今日の文明開化も皆皇室の賜物にして、我国体の天下に比類なき所以亦是に外ならざるなり。苟くも此の国に生まれたるの臣民誰か忠君愛国の熱誠なきものにあらんや。吾人が孜々として學術を研究するも、聊か捐滲の微功を皇室国家に尽さんとするに在り」。²⁾ すなわち、国家の為に勉学に励み、国民として忠君愛国の精神を持つように促している。加えて、「国家の為には同一の精神を以て全校一致身命をも顧みず、砲烟弾雨を冒すの大決心を起さしめんが為」と述べ、身体もまた国家の為に尽すことを求めた。その理由は、「将来国家を維持するものは問はずして今日の青年、特に諸子の任なり、政府が年々莫大なる国庫金を費して諸子を養うは、此の大任を諸子に託せんと欲すればなり、故に諸子は、皇室国家の大恩を忘れざると共に忠君愛国の標旗たる護国旗に対しては十分赤誠の意を表すべし」³⁾ としている。このように、一高生は、将来国家のリーダーを担う人物であるとの自覚を促し、それゆえに国庫から多大なる恩恵を受けていることが強調されている。こうした方針は、近代教育システムの構築にとって要であった。

例えば、藤井は「パブリック・スクールの校長たちも帝国主義時代の風潮に無関係な人間ではなかった。むしろ熱烈な帝国主義者であった」⁴⁾ と指摘している。「今日の少年たちは明日の政治家であり行政官であります。イギリス帝国の将来は、彼らの手にあるのです。…中略…彼らの祖先が獲得した帝国を傷つけ、減少させる考えを軽蔑する、そういう人間に彼らになってくれますように！彼らとその帝国を拡大し、堅固にし、賛美しますように！彼らが大いなる志を抱き、大いなる努力を傾注し、大いなる勝利を獲得してくれるように！これが私の祈りなのであります」⁵⁾ とウェルドン校長（1881－98年在職）の演説を引き合いに出している。社会ダーウィニズムに依拠する青年の啓発は、英国の学校のみならず、帝国を越えて広く普遍化している。アジアにおける共通性の観点を映せば、中華民国時代の1910年代には、政府は軍事国家を担う国民形成のための教育を教育哲学を通して鼓吹し、そのことが結果的に軍事的で社会ダーウィニズムに基づくスポーツと体育を公的に推進させることにつながったと言われている。⁶⁾ 日本以外のアジアにおける一例を示せば、中国国民党（KMT）の幹部が1932年に党幹事と当時の文部省にあたる部局にあてた電信には次のようにある。

適者生存—誰もダーウィンの理論を無視することはできない。過去数年間、中国を旅し、中国の危機は国民の弱体的な身体状況にあるとわかった。国民が身体的に壮健であれば、国家は発展する。もし、国民が身体的に脆弱であれば、国は退化する。若者は国の未来を意味するにもかかわらず、中国の若者は—とりわけ都市の若者は—身体的に弱い・・・文部省は国中でスポーツと体育を奨励する計画に着手し、発展させるべきである。尚武の精神も主張されるべきである。この問題は、些細なことで大した問題ではないように思われるかもしれないが、実に重要なことであり、国家の存亡にかかわることである⁷⁾

同時代の一高生の状況について、ローデンは、1930年の高山秋月による調査では、一高卒業者のうち4859名(全体の約三分の一)が、「大学教授、国会議員、地方公務員、外交官、裁判官、経営者、医師、法曹家などといった職業に圧倒的に進出していることを明らかにした」と述べ、そのうちの四分の一は政治家、諸官庁の官吏であった。⁸⁾

藤井によれば、英国でも「パブリック・スクールの近代化の帰結は、大英帝国の指導者を育成する帝国主義の温床への道」であり、「大英帝国はパブリック・スクールの卒業者によって統治された」。⁹⁾ また、「パブリック・スクールの卒業生の多くは大英帝国の各地に散らばっていった」¹⁰⁾ のであり、周知のように、そうした英国人エリートがスポーツを世界各地に普及させた。彼らは、スポーツの技術を伝えると同時に、スポーツ規範を教えた。事実、アレン・グッドマンは、「英領アフリカ植民地に、〈スポーツの倫理〉が広く流布していたことは確かである」¹¹⁾ という。「アスレティズムが、アフリカに持ち込まれたことは疑いえない」。¹²⁾ インドでは、メイオ校というパブリックスクールを創り、その目的が「運動が嫌いで臆病な高位カーストの少年達を、インド亜大陸を統治しているイートン校出身者やハロー校出身者たちと同じ男らしい人物に変えることにあった」¹³⁾ と指摘している。このように、帝国主義下で、エリートを創出する際に、英国のスポーツが用いられていたことは世界的事実であった。世界的状況を鑑みれば、日本においても英国のパブリックスクール同様の教育システムを参照しつつ、エリートが創出されたことは否定できないであろう。一高生が英国のエリート青年と同様に、スポーツによって涵養されたのは「男らしさ」であり、日本では質実剛健と呼称された。

質実剛健とは、深谷昌志によれば、「良妻賢母は、〈国体観念〉に代表される体制イデオロギーの女子教育版であり…中略…中等教育の〈質実剛健〉などと並んで、国体観念の重要な側面を担う概念」¹⁴⁾ であった。こうした新しい男女の概念は、日清・日露戦争期にナショナリズムの台頭とともに登場した。質実剛健は、時代にそくした男子の中等教育の新たな理想であり、国家にとって有用な人物を育成する上で重要な役割を果たしたといえる。

こうした文化規範は、日本独自の伝統的文化とスポーツの融合にみせかけつつも、世界各国に普及したスポーツ精神に共通するものであり、その構造は、西欧流の「文明の精神」

の輸入に等しかったように思われる。

事実、木下や久原が活躍した時代について『第一高等学校六十年史』は、「此の期に於ける校内の一般的風潮を概観するに、自治寮の発展頗る順調にして、明治三十年南北寮事件の試練を経て愈々その基礎を固うし、三十四年には皆寄宿制度の完備するに至り、籠城主義を標榜して覇気満々、質実剛健の気風を養成し来たりし」¹⁵⁾ものであったと述べている。すなわち、木下以降校長が果たした役割の一つに質実剛健の気風を涵養したことがあげられる。具体的にはパブリックスクールシステムの全寮制を取り入れ、社会ダーウィニズムを背景とするエリート教育を行い、スポーツ教育によって人格陶冶を行なってきたのであり、質実剛健とはまさしくアスレティズムが重視したシンプル・マンリネスに他ならなかったと考察できる。日本の伝統精神と考えられてきた質実剛健について再考することは日本におけるスポーツ規範の形成を考える上で重要である。すなわち、質実剛健とはアスレティズムに基づくスポーツ精神の受容であったと言えよう。実際のスポーツ場面における選手の態度は、いかなるものであったのかについては、第3章で検討する。

『第一高等学校六十年史』は、木下校長時代の次の潮流として、「三十年代後半より四十年代にかけて盛なりし個人主義の思潮に従って自己批判を加うるものあり、新渡戸校長の所謂ソシアリティの感化の下に積極主義の精神を」¹⁶⁾掲げる時代に突入したことを指摘している。そこで、次節では、新渡戸に再び着目する。実業之日本社編集顧問を兼任しながらも、一高校長職に努めた新渡戸は一高に何をもたらしたのか。

註)

1) 「校長兼文部省参事官嘉納治五郎高等師範学校長兼心得兼勤を命ぜらる」と記されている(『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、224頁。)

2) 同上、194頁。

3) 同上。

4) 藤井泰「パブリック・スクール」松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『帝国社会の諸相』研究社出版、1996年1月、179頁。

5) 同上。

6) Lu Zhouxiang and Fan Hong, *Sport and Nationalism in China*, New York & Oxon: Routledge, 2014, p.27.

7) 同上、37頁。

8) 森敦監訳ドナルド・T・ローデン『友の憂いに吾は泣く(下)旧制高等学校物語』講談社、1983年4月、221-222頁。

9) 同上、222頁。

10) 藤井によれば、卒業生の進学先のトップが陸軍であり、さらに公務員職も3.7%いたことを指摘し、彼らの職場は海外であり、数の上でも英国人エリートが世界各地にいた(藤井、前掲書、178-179頁。)

11) アレン・グットマン (谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳) 『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』 昭和堂、1997年8月、78頁。

12) 同上、80頁。

13) 同上、40頁。

14) 深谷昌志 『増補 良妻賢母主義の教育』 黎明書房、1998年3月、11頁。(同書は『増補 良妻賢母主義の教育』(1981年)の復刊にあたる。引用は、1998年の復刊から行なった。)

15) 『第一高等学校六十年史』 第一高等学校、1939年3月、232頁。

16) 同上。

第4節 新渡戸稲造校長時代

新渡戸が校長職に就いていた期間は1906年から1912年であった。新渡戸が一高に与えた影響は甚大であった。例えば、それは、『第一高等学校自治寮六十年史』に新渡戸による「ソシアリティーの新風」と見出しがつけられるほどであった。

一高生徒は、新渡戸を西洋的で社交性のある著名人として認識していた。彼の言う社交性は一高生に影響を与えた。新渡戸は、毎週月曜日第一時限に「一年生を倫理講堂に集めて倫理の講義を行い、また、課外講義のほか、とくに週二日、学生との面会日を設け、さらに姉の家を借りて毎木曜日を校外における面会日とし、古今東西にわたる該博な学識を基礎に、特に西欧の文学、思想を教え、ソシアリティーを説いた」。¹⁾ 新渡戸は積極的に生徒と直接対話した。彼が説いた中身は、日本古来の「武士道」ではなく「特に西欧の文学、思想」を教えたと言われている。新渡戸著『武士道』の中身が、西欧流の「文明の精神」を啓発するものであったことは前章で示したが、彼は一高教育の中でもこうした西欧の近代的な思想を啓発していた。

新渡戸は、一高生にソシアリティー（社交）の重要性を教えた。これは籠城の精神に反するものであった。「ソシアリティーは、木下校長がその基礎を築き、狩野校長に至って、完成の域に達した籠城主義と明らかに対立する概念であることは、誰の目にも明らかであった。それだけに、ソシアリティーの鼓吹には新渡戸校長は慎重であった」²⁾ という。

これに関する新渡戸の講演の要旨（ただし新渡戸の校閲はない）が校友会雑誌に掲載されている。

Culture（進歩）と Restraint（制圧）の二潮流は相並んで永久に流れて、尽きることがないだろう。…中略…言い換えると、どこまでソシアリティーを実行し、どこまで籠城主義を実行してもよいか、この解決は至難のわざである。欧州の中世は籠城主義であった。美術、宗教、哲学、文芸、あげて従来と異なる形式のものが生ずるに至り、社会は混乱に陥り、僧侶の中には城を築いて僧院にたてこもる者がでてきた。Monasticism（僧院制度）がこれである。モナスティズムは籠城主義に実によく似ている³⁾

以上のように、新渡戸は、「籠城主義」が西欧において歴史的に行われてきたと述べた。そして、「社交性」と「籠城」の関係において、どちらが優れているかを明言することは困難であると論じた。そして、「籠城主義は一高の自治寮にとっては〈絶好のプリンシプル〉であると校長は評価」⁴⁾ した。しかし、それに伴って起こりうる弊害も述べる。

第一に、排他的になること。自分と同じ主義でないと一切受け入れない。

第二に、ややもすれば単なる Crowding（群集）に墮する恐れがあること。群衆のみで Spiritual sympathy（精神的共感）がなければ、Intimacy（親睦）は成り立たない

第三に、高慢心を起すこと。修道院の僧侶の傲岸。一高生もまた往々この非難を免れ得ないようである。

第四に、同年配、同傾向の人間の集まりなるがゆえに、ややもすれば単調に陥り、向上進歩が遅々となること。籠城主義は単調無味なる類型的人物を製造して自ら安んじる恐れがある。籠城主義は手段であって断じて目的ではないとし、加えて、「ソシアリティー」にはそれによって籠城主義を救うなどという、いかめしい意義があるわけではないと極めて遠慮がちに付け加えた。⁵⁾

以上のように、新渡戸は籠城主義によって起こりうる弊害を指摘した。籠城することで、排他的になり、高慢な人間に陥り、個性のない人間になってしまうという注意であった。そこで、新渡戸は、一高の伝統を気遣いながらも社交性が必要なのではないかと提言した。

この新渡戸のいう社交性とは、決して「文明の精神」に反するものではない。むしろエリートとして必要な素養であった。西欧では当然であった社交を浸透させるために、日本でも明治になると鹿鳴館などの西洋建築物を積極的に建設し、その中のダンスホールで、上流階級の人間が社交ダンスを行っていたことはよく知られている。

但し、「籠城主義」を徹底された一高生には理解しがたいものがあつた。西欧のパブリックスクールと日本の一高との違いとして、社交性の有無が存在する。なぜ、一高に社交性の概念が認識されにくいものであつたのかを推察すると、一つに木下が推奨した自治制寄宿舎での生活を封建的な意味での「籠城主義」と解釈した可能性があるだろう。先に述べてきたように、木下校長は、外部の墮落した学生である「書生」の影響を嫌い、彼らとの交流を排除した。それは、一高生を国家の特別なエリートとして育成するために外部との接触を断つ「籠城主義」が、社交という概念と対立するものとして曲解を生んだのではないかと推察できる。西欧社会で活躍し、アメリカ人の妻を家庭に持った新渡戸であつたゆえに、社交性の必要性を力説することができたと考えられる。

新渡戸が着任してから約1年後の1908年に、彼の唱える社交性を救済する文章が『校友会雑誌』に掲載された。筆者は後の哲学者、和辻哲郎である。彼は、「籠城主義は新渡戸先生のソシアリティーを迎えて狼狽措くところを知らず。ソシアリティーは、真の知識、新の人格は広き社会のほかには求めることは出来ないとする。われわれは小児ではない。なぜ社会と断絶しなければ高潔な生活を送れないのか。なぜ自治領を籠城主義で飾る必要があるのか。四綱領は立派な道德律である。しかし、籠城主義が四綱領を意味するわけではない」⁶⁾と述べた。和辻は、四綱領は籠城しなくても守れるし、新渡戸のいうように社会性が大切であると断言する。彼は運動部の作り出している一高の校風にも以下のように苦言を呈す。一高寮（向陵）は、「歴史の転地である。伝統・歴史を軽んずる者は異端視され、その言動は認められない。自治寮が帝都運動界覇権の地としてのみ意味をもち、豪傑的態度と駒場運動会や隅田川のボートレース、野球の勝敗のみが校風の重要部分とされるに至っては、われわれは絶対に反対せざるを得ない。校風とは“一千寮生の個人性格”で

ある。運動家が校風を作るものではない。なぜ、古びた校風に恋々とするのか。なぜ、古い籠城主義を打破しないのか⁷⁾と一高の現状を述べた。和辻のこの言葉から、いかに運動部が男社会であったかが分かる。陸上競技、ボート、野球での活躍は、一高生にとって学校の尊厳を守ることやエリートとしての価値を高めるものになっていた。しかし、こうしたスポーツマンによって形成された男社会一辺倒の校風に対して和辻は不満を覚えた。

こうした中で、新渡戸の教育を受けてきた和辻は、新渡戸のいう社交性に希望を見出した。和辻はこれまでの旧体制に批判を加え、新しい一高の姿に理想を抱いた。ただし、新しい一高を理想とした和辻も、木下が近代国民国家のエリートとしての「文明の精神」を説いた四綱領を重視していた。このことは、当時の一高において四綱領が浸透しつつあったことを示していよう。

新渡戸校長の教育的理想像

和辻論文から1年後の1909年に向陵は第十九回記念祭を迎えた。新渡戸校長らの演説が終わると、壇上に末広巖太郎が登壇した。彼は水泳部員であり、後に東大法学部長、全日本水泳競技連盟会長、日本体育協会理事長などを務めた、エリートスポーツマンである。このとき東京大学生だった末広は開口一番「諸君は新渡戸先生を信じ過ぎてはいないか。いかなる偉人も欠点があるのだが、私が在学中、いかなる悪影響を受けたかを考えて見るに、まさに忍びざるものがある。近ごろ新聞は先生を八方美人だと言っているが、私はそれに雷同するものでない。三年間の経験から言うのである」⁸⁾と、新渡戸と一高生を前に新渡戸批判を始めた。この時の様子を『第一高等学校 自治寮六十年史』は「場内騒然、賛否の野次が飛び交う」⁹⁾と記している。新渡戸の八方美人とは、栗野転校事件での新渡戸の事後対応批判であった。この事件は、新渡戸にとっては、校長職就任以前の問題であり、降りかかってきた火の粉であった。事後対応において、文部省と一高生の間に挟まれることになった新渡戸は、「事は文部省に属するから、生徒が直接関係するのは不利である。自分に一任せよ」と述べており、双方への配慮に苦慮して行動したと思われる。末広は、「先生の言は文部省と一高の両方を取りつくりようとするための言葉ではなかったか。先生の唱えられるソシアリティーは、単に他人の悪感情を買わないように努めることではありませんまい」¹⁰⁾と新渡戸を批判した。

彼にはもう一つ我慢ならないことがあった。「去年の秋、陸上運動会で屋台を作り、婦人席を設けたのは一高精神に反する。先生の責任を問おうとする第二の問題である。女尊男卑は墮落に他ならぬ」とし、「特に運動部員はなぜあくまで反対しなかったか。口で負けたら、なぜ手で戦わぬか、足で防がぬか」と「気炎万丈」で述べた。¹¹⁾一高は、特別な男社会であり、シンプル・マンリネスに反する思想は徹底的に排除せよという主張であった。こうしたエリートの男だけの社会は、まさしく英国のパブリックスクールと同様の世界である。

さらに、運動部の一高生の石本はこう述べた。「先生は僕の理想の人はトーマス・アーノ

ルドだとおっしゃった。…中略…校長は事務をとるばかりではありませんまい。先生は体育方面を軽んぜられるのは遺憾に思う。外交や国家のこのみをお話されずに、グラランドに出て野球部の練習の様子も見ていただきたい。¹²⁾

トマス・アーノルド校長とは周知のように、英国のパブリックスクールであったラグビー校において改革を行い、急死するまでラグビー校に人生を捧げた教育者であった。彼の後継者がアスレティシズムを完成させたことで知られている。アーノルドの教育理念は、生徒達に対し「礼拝堂の説教を重視」し、「毎日曜夕刻の礼拝に臨」み、「クリスチャン・ジェントルマンの育成を目指す」¹³⁾ ことであった。また、学校の内部組織を改革し、自治制寄宿舎のプリーフェクト・ファギング制を教育に活用した。彼の功績は、トマス・ヒューズが、アーノルド時代のラグビー校を描いた小説によって広く世間に知られることになった。¹⁴⁾ 『トム・ブラウンの学校生活』を読んだものは、主人公やアーノルド校長のスポーツの教育活動に魅了された。しかし、実際アーノルド校長は「スポーツ活動に対して積極的に奨励することはなかった」¹⁵⁾ こともよく知られている。集団スポーツに教育的意義を見出し、アスレティシズム教育を行なったのは、アーノルドの次世代の校長たちであった。¹⁶⁾

石本の発言から、一高生が『トム・ブラウンの学校生活』を教養書として読書し、エリート達が集団スポーツの中で、男らしく、フェアプレイの精神と肉体を鍛えられることは、一高生にとって理想であったことを伝えている。加えて、同書に登場するアーノルド校長は、一高生にとっても理想の校長であり、一高生は「トムの学校生活」を期待した。彼らは、英国の青年と同様に、トムがスポーツによって、エリートとしてふさわしい男に成長していく姿に自分たちを重ねたと考えられる。西欧流近代エリート教育システムの成立は、「トムの学校生活」を理想とする学生を創出した。スポーツに打ち込み、そこで男らしい人格（マンリネス）を育むことが理想とされた。一高生たちは、武術によって身を研ぎ澄まし、「武士道」精神によって「武士」らしくなることを理想としていたのではなく、スポーツによって男らしく成長する「トム・ブラウン」を理想とした。しかしながら、それが「武士道」と呼ばれたことにこの構造のからくりがあろう。

その証拠として、『武士道』の著者、新渡戸は石本に以下のように返答した。「なりたいものはアーノルド先生である。諸君が学校を出て二十年、三十年たったのち、トム・ブラウンのようにたった一人でも僕のことを思い出してくれる人があったら、それが僕の最大の満足であり、希望である。諸君はどこまでもピュアーに男らしく、学校のため、日本教育のため努められたい」¹⁷⁾ と述べた。ゆえにグラランドに出て、部活動を奨励するのではなく、アーノルド校長のように、毎週月曜日第一時限に、一年生を倫理講堂に集めて倫理の講義を行った。彼は、たしかにアーノルドと同じ方法で「文明の精神」を学生に啓発していた。

また新渡戸が運動部を酷く冷遇したかということ、協力的であったように思われる。例えば、新渡戸は野球部の要請でグラランドの整地工事を文部省の許可を取る前に実施し、予算

にない2000円の支払いを生じた。これにより、文部省から譴責処分を受けている。¹⁸⁾

木下校長から新渡戸校長までにおける明治期の一高の教育について検討してみると、「武士道」的精神ではなく、英国のパブリックスクールシステムを取り入れ、自治制寄宿舎や、スポーツによって人格を陶冶し、男らしさ（マンリネス）や質実剛健（シンプル・マンリネス）という態度が啓発されていたことがわかる。西欧社会に精通していた木下は、近代国民国家としての日本を完成させるために、パブリックスクールのシステムを取り入れ、日本のエリート教育を推進した。ローデンの指摘したように、一高生は世界中でみることができたエリート青年の姿であり、まさしく社会ダーウィニズムとともに拡大したアスレティシズムの影響が見られた。一高は、社会ダーウィニズムの伝播とともに世界的に普遍化を遂げていたパブリックスクールの一つであったと言える。

そして、マンリネスを中心とするアスレティシズムの理念は、西欧流の「文明の精神」を伝える手段としてスポーツを媒介に具体化された理念である。「明治武士道」は菅野のいう創られた伝統であった。すなわち、それは、西欧流「文明の精神」を、ナショナリズムを刺激する言葉の中に意図的に取り込んだ結果派生したものであったといえる。そのため、「明治武士道」は、近代国民国家形成の上で「文明の精神」の概念を含んだ新たな規範として誕生したと考える方が自然である。

しかし、「文明の精神」と「明治武士道」は近代国家を形成する際の鍵となる概念であったにも関わらず、両者の関係は西欧対日本のように二項対立してみえるために、歴史概念として捉える困難さを伴った。実際は、日本のエリート青年は、海外のエリート青年と同様に、スポーツを通じて「質実剛健」すなわち「シンプル・マンリネス」のアスレティシズム教育の中で要とされる徳義を身につけていた。日本の青年も大英帝国のエリートも自治制寄宿制度などを通じて、「文明の精神」を身につけていた。したがって日本では、積極的な浸透が意図されて第一章で述べたように「明治武士道」が定着した。

これまでの研究は「文明の精神」と「明治武士道」の関係について検討を十分に行なうことなく、一高の「武士道」論に言及してきた。しかし、以上述べてきた観念から一高野球部の学生たちの「武士道規範」に迫る必要がある。たしかに「明治武士道」は、日本の伝統的な価値観と捉え、評価することから始められがちであるため、この盲点を払拭するには、国際的視点、世界的共時性が不可欠であった。

次章では、英国流スポーツ規範の形成と「武士道」の形成の関係をより具体的に再考していくために、実際のスポーツマンたちは、どのような規範や態度を伴って、スポーツを行っていたのかに着目する。

註)

1) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、81頁。

2) 同上。

- 3) 同上、82頁。
- 4) 同上。
- 5) 同上、83頁。
- 6) 同上、84頁。
- 7) 同上。
- 8) 同上、86頁。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 同上、86－87頁。
- 12) 同上、90－91頁。
- 13) 藤井泰「パブリック・スクール」松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『帝国社会の諸相』研究社出版、1996年1月、167頁。
- 14) 同上、169頁。
- 15) 同上。
- 16) 同上、170頁。
- 17) 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年4月、92頁。
- 18) 同上。

第3章 フィールドにみるスポーツ規範と「武士道」

第1節 スポーツにおける「明治武士道」の形成

西欧のエリート教育に精通していた校長らが、一高のエリート教育に「文明の精神」をもたらそうとしたことは前章で述べた。本章では、そうした西欧流のスポーツ規範が実際のフィールドに生じていた現象面から考察していきたい。一高生といったエリートに向けて、初めてスポーツが紹介され、推奨された時期に一高生にとって、スポーツ規範は馴染みのないものであった。

しかし、一高生たちは積極的にスポーツに関与し、スポーツを通して新しい規範を身につけていく。そして、一高生野球部は自らの野球を「武士道野球」と呼ぶことになった。彼らが「武士道野球」と呼ぶようになるには理由があった。それは、1900年初頭の野球対外試合批判や、1911年に「東京朝日新聞」によって行われた「野球害毒論争」という野球批判及び野球擁護の社会的闘争によるものであった。そうした社会情勢の中、野球を行うことを正当化するために、精神修養としての「武士道」と野球とが結びつけられていく。この「武士道野球」について、ローデンと坂上が異なる見解を提示している事は先に述べた。坂上は一高の「武士道野球」論が登場した経緯について、英国との治外法権廃止、日清戦争の感動的な勝利、三国干渉による遼東半島返還、北清事変での日本軍の活躍といった事件が、「日本人のアイデンティティの賞揚へとかりたてたが、こうしたなかで、明治維新以降の急速な西洋化の嵐によって一度破壊されうち棄てられた日本の文化の見直しがおこなわれるようになる。欧米諸国への劣等感を強く抱き、それらの文化の摂取にひたすら力を注いできた日本人の態度に変化を生じ、日本独特の文化が再評価されるようになるのである」と述べ、「武士道の流行や武術の復興などもこうした文化状況の巨大な変化のなかにあった」と解説している¹⁾。加えて、野球部と撃剣部にみられた「武士道」論の差異を示すことで、野球部の「武士道」は社会ダーウィニズムによるものではないと結論づけている。すなわち、野球部の主張する「質素儉約の風」、「剛健勇武の気」、「直往邁進の概」を「武士的野球」とし、これに対して、撃剣部鈴木という「武士道」は「果敢勇往の精神」「活発進捗の気象」や「質朴武健」「礼節廉恥」「一致協同の念」に加えて、「万世一系の君主まします、万国無頼の国体」に随伴し、「国家道德の根本要素」である「忠孝、節義、愛国、尚武的なもの」をもふくんだ「秀美なる道德」²⁾であったと区別している。この差を、「つまり、鈴木の場合、天皇制イデオロギーとの関連が明確に意識されているのである。ここに決定的な違いがある。このようにイデオロギーの次元で比較すれば、野球と武術の違いは明白である。一高野球部の〈武士道野球〉論は、野球を国家主義的なイデオロギーによって価値づけられたものでもない」³⁾と指摘した。しかし、武術と異なる価値観であると区別することは、むしろ野球部の「武士道」論の社会ダーウィニズムと切り離しがたい面の指摘につながっているように捉えられる。

そこで野球部の状況を概観しておきたい。野球部は、1880年に日本に来たストレン

ジによって、ボート部と野球部が創始された。⁴⁾ただし、当時は、東京大学予備門時代であり、「第一高等中学校ベースボール会」は、1886年の第一高等中学校の設立とともに始まった。一高でのスポーツの始まりは1880年頃であった。木下校長が校友会を形成するのは、10年後の1890年である。

日本で最も古いスポーツジャーナルの一つとされている雑誌『運動界 *The Athletic World*』は1897年から1900年まで刊行された。また、1885年には、坪井玄道、田中盛業編『戶外遊戯法』が刊行された。同書は、ストレンジの『*Outdoor Games*』を多く参照している。著者の坪井玄道は、体操伝習所設立とともにリーランドの通訳となり、同氏の離任後は伝習所の中心教員として軽体操を指導し、あわせて、戶外遊戯の奨励に努めた。学校体育の確立に貢献した中心人物の一人であったと言える。⁵⁾そこで、『戶外遊戯法』においてスポーツがどのように紹介されたのかを考察し、次に、雑誌『運動界』から、スポーツ規範と「武士道」の奨励の関係性に注目したい。同雑誌は当時の体育関係者やスポーツ選手が書き手となった記事で構成されたものであり、スポーツ規範と「武士道」が関連していく様子が記事の中身に表れている。

第1項 『戶外遊戯法』、『*Outdoor Games*』

冒頭（序文）には、遊戯やスポーツによって「共同和諧の精神」が養えると述べられている。「和諧」には、調和する、仲良くするなどの意味がある。したがって、「共同和諧の精神」は、「協同一致の精神」を意味していよう。事実、英国の「クリケット」米国の「ベースボール」は、この精神に基づいていると説明されている。⁶⁾そして、坪井らは「我が邦の遊戯は、常に共同和諧の精神を発露するの有様に乏しきもの⁷⁾と述べているように、日本の伝統的な遊戯の中には、協同一致の精神は乏しく、これまでなかった価値観であると述べている。さらに、「学校の遊戯に於いても、常に此の精神を養成せんことを以て、一主眼とせざるべからず」とし、学校教育で、協同の精神を養うべきであり、「国技を産出する種子を」⁸⁾まきたいと述べられている。

緒言では、「輓近人文の一変せしより、教育の道大いに開け、智に徳に、其教育育成の法備はらざるはなし⁹⁾と述べ、明治期の到来による教育の変化に触れている。次いで、「独智、徳の根底たる身体教育の法に尚未だ備わらざるものあるは何ぞや」と述べ、知と徳の根底である身体を教育する方法論が未だに確立していないとしている。その理由として、「之を講究する機会を得ることの乏し」いことと、現在の教育の状況が、「学校部内に於る軽運動の一科は概ね必修化の一位を占め、…中略…体育上既に一步を進めたるものなきにあらず。而るに身体練成の法は、元来合式体操（軽運動）のみを以て、足るものに非ず。又併せて戶外運動（遊戯法）をも研究せざるべからず。蓋し戶外遊戯の利益たる啻に身体の強健を増進する」、「大いに心神を爽快にし、優暢快活に気風を養成¹⁰⁾できると述べ、軽運動ばかりでは、協同の精神は培われず、快活な気風を養成できないと説明されている。

こうした緒言からも、坪井らは、戶外遊戯を通じて日本に新たな気風を涵養できると期

待した。新たな気風とは、西欧流の近代スポーツのもつ規範に価値観に他ならなかった。

同書の「ベースボール」の項目では、「健康と愉快とを享有するに最も適当なる戸外遊戯にして、競争心を鼓舞するの性質を含有するものとす」¹¹⁾と評価されている。続けて、他のスポーツとベースボールを比較する。「玉突の遊戯は、大いに人をして快樂を感ぜしむると雖も、其の周圍に羅列する火酒は能く人をして誘惑せしむるの危険あるに」¹²⁾と、ビリヤードも人に快樂を与える楽しいものであるが、酒や煙草の誘惑の危険がつきまとうという。また「其の他の遊戯に於いても、一得一失は其の数なるか如し。然るに「ベースボール」は、其の人をして健康と愉快とを得せしむるは、他の遊戯に比して過ぐるあるも、及ばざるなし」¹³⁾と述べ、一長一短はどのようなスポーツにも存在するが、ベースボールは、健康と愉快を最も与えてくれると賞賛し、野球の魅力を伝えた。

それゆえ、1885年において、ベースボールは特段「武士道」規範を養うものではなく、単に、身体を健康にし、気持ちを晴れやかにすることが期待されていたのみであったことがわかる。しかも紳士という表記がみられる。すなわち、野球における紳士的態度とは、「遊戯の要用なる規則を熟知」し、「最も大切なる公平の心を保有するを要す」¹⁴⁾ことであり、知り合いである場合に片寄った判定をすることは許されないものであると述べられている。このように、審判の役割を通じて、フェアプレイの精神が伝えられている。

次に、雑誌『運動会』に着目したい。同書は1897年から1900年までの間に刊行された。日清・日露戦争といった時代状況の中で刊行されたスポーツ雑誌であると言える。しかも、英語名、「アスレティック・ワールド」の名を有していたにもかかわらず、同雑誌には、「武士道」という表記が再三登場する。そこで、このスポーツ雑誌の中で、スポーツにおける「武士道」がどのような脈絡で使用されていたのかに着目したい。

第2項 雑誌『運動界』にみるスポーツ規範と「武士道」の啓発

先にも述べたように、『運動界 *The Athletic World*』は、日本で刊行された初期のスポーツジャーナルの一つであり、しかも記事の担い手が体育関係者であることが特徴である。第1号の巻頭に、「かくして我国将来の継続者をして、剛健なる国民たらしめんことを期する者なり。幸に帝国大学及び第一高等学校の運動家諸子吾等が、計画を聞かれ、大いに其趣意を賛し、一臂の力を吾等に与えんことを約されたり」¹⁵⁾と述べられており、記事の執筆には一高生らが関わっていることが分かる。また、『運動界 解説』によれば、一高生以外にも「この引用は、懸賞文募集のための一文でしかないが、本紙の全体を眺め返してみると、中央にある官立の学校関係者だけでなく、早稲田大学、慶応大学および日本体育会体操学校などの私学関係者や、地方の尋常師範学校の学生までもが執筆の陣容に組み込まれていたことがわかる」¹⁶⁾。このように、本章の目的である一高生などのエリート学生のスポーツ観を知る上で、『運動界』に掲載された記事内容は重要である。

同書の目的は、日本の知育、徳育、体育の三育をみると、「体育は如何にと見るに、悲しい哉」、「智徳の二育に遙か遅れて、只に進まぬのみか、時としては退かんとするの狀態を

示すことあり」¹⁷⁾とされている。日本の青年は、「智に富み徳に明るかなるも、身体は薄弱にして、ややもすれば病に罹り、学業未だ成らず、君に報い国に盡すに至らずして、空しく夭死する者甚だ多し」¹⁸⁾と、身体が不健全にあり、若者が早世してしまうことを憂慮している。こうした課題を解決するためにも、「智徳に豊富ならしむると共に、身体を健全にし筋骨を強壯ならしめ、頭のみならず、兼ねて身体をも亦大ならしめんこと」を目的にし、以下の言葉を根拠に説いた。

「健康な精神は健康の身体に宿る」というのは、実に千古不拔の心理を道えるものなり。将来の我国は常識に富みて、能く業を勉め、法を守る国民を以て組織せざれば不可、かの如き良国民を得んと欲せば、先ず盛に我青年子弟に運動体育の事を奨励し、以て健康なる精神の宿る健康なる身体を得しむること最も大切なり¹⁹⁾

ここでいう「健康な精神は健康の身体に宿る」とは、元々は、「健全なる肉体に健全なる精神が宿らんことを」であり、「元首政期ローマの『諷刺誌』で知られるユエリナス」の言葉であった。それが、「十九世紀のH・スペンサーによって受け継がれた時、アスレティシズムの時代による十九世紀的解釈を通じて願望形の落された表現、〈mens sana in corpora sano 健全なるからだに健全なる精神が宿る〉に簡約化されて流布されることが一層増す。²⁰⁾そして、日本でも「近代学校体育の父」といわれるジョージ・アダムス・リーランドが後者を引用した。「このプロセスの源流にかかわった英国のアスレティシズムは、帝国主義を背景に構えた集団スポーツ倫理、協同の精神を鼓舞するスポーツ教育思想であった」。²¹⁾

ここでは、体育・スポーツに学ぶことで、良識ある人物を育てることが可能であると示されており、上述したように、西欧流の「健康な精神は健康の身体に宿る」の反映をみることができる。1897年において、スポーツは、プレイヤーにただ愉快さを与えるだけのものではなくなったといえる。

第1巻第1号の表紙には、アメリカ戦（野球）での勝利を祝い、「付録としては、外敵を蹂躪して、国の名誉を上げた十二勇の」²²⁾写真を掲載した。スポーツでアメリカに勝つことは、日本人にとっての尊厳を高めることにもつながった。一高野球部（対アメリカ人）の勝利は、当時話題となった。ボートもまたアメリカに勝利した。この記事には帝国主義の様相がみられる。

帝国主義の勢は、到る処として現われざるはなき中にも、我が敏活剛胆の健児が、長身怪力を以て誇る外人と彼れが得意の戸外遊戯に技を競いて、頻りに之を破るは吾人の最も痛快を感ずる所なり²³⁾

すなわち、帝国主義の様相が濃くなってきたことの実感と、その風潮の中でアメリカにスポーツで勝つことで得ることのできる格別な喜びが、表現されている。

周知のように、当時は日米修好通商条約（撤廃は、1899年）が締結されており、日本は不平等な条件下にあった。不平等な国家関係において、外敵をスポーツで打倒することは国民のナショナリズムを煽ることにつながった。

先に、坂上が、柔道部の言うスポーツ規範と野球部の言うスポーツ規範は異なったものであると述べたことに触れたが、以下に示す内容は、柔道においてもすでに近代的規範が備わっていることを示している。

『運動界』「近日の柔道界」

扶桑の男児意気須らく剛なるべし。日東桜花国の継続者たるものは強健鉄の如き身体と果敢勇猛高潔なることは、而も花の如き思想を修養せざるべからず。彼の擾々たる白面文弱の徒の如きは、一日も早く我が有望なる青年間に其の跡を絶つに至らしむべし。

…中略…

海内到る所に運動の隆興を見ざることなきに至らんとす。吾曹は、実に双手を挙げて国家の爲めに之を慶し、之を賀す。隅田の川に輕舸を飛ばし、櫂を握て怒号を睥睨するものは端艇界の壮夫なり。…熱球を弄し、豪壯の氣象をバットに写すは野球界の健児なり。或は鉄面革胴封建武士の昔を忍びて、劍を撃ち虎を叱して、瞋目奮闘するの劍客あり。或は碎身粉骨の辛酸に甘んじて…寒稽古に流汗瀑の如き三伏の熱暑に不屈不業、拳手技足の間、活殺死生の真諦を学の勇士あり。其の目的とする所或は異なるものあるべしと雖も、要するに皆青年の元氣修養上大に裨益あるの手段ならざるはなし。元氣胆力の養成は多くは体格の練磨に伴い、体格の練磨は常に運動にあり、運動の隆興は、即ち偉大なる国民を作るの基礎なり。「波斯の王の驚きし」彼のオリムピヤの競技が如何に「ヘレン」人種の氣風に至大の影響を与えしか、「テームス」河上に於ける兩大学の競争が如何に英国人士の進取の氣象に影響するかを知らば、蓋し思い半ばに過ぎんのみ。上下三千年神州の靈地に涵養し来れる尚武の風習は世界に多く其の比を見ざる勇敢の氣、敏活の質を国民に付与せり。我が同胞は、機敏勇猛最も運動技術に適するの資質を有す²⁴⁾

これからの日本を担う若者は、果敢勇猛で高潔な青年でなければならぬと述べた投稿者は、そのモデルを、ボート部、野球部、剣道部、柔道部などスポーツを通じて身体を鍛えた若者にみている。そして、スポーツの種目は異なっても、身体を鍛える目的は、国家を発展させることにありと主張している。その例として、エリートの理想像に英国のオックスフォードとケンブリッジのジェントルマンをあげ、英国のエリート学生がスポーツによって人格を形成していると説いている。また、日本人には、日本的な特性である尚武の精神が備わっているため、運動に向いていると述べた。

以上のように、投稿者は、将来の日本を担うエリートの創出とスポーツの必要性について

て、英国をモデルとし、英国のエリート学生と結びつけて論じている。これは、社会ダーウィニズムの影響下にあったこの時代の世界の至る所で言及された特徴である。また、柔道関係者ですら英国のスポーツ選手を理想像とし、スポーツを通じて身心を育むとことを重視していたことがわかる。つまりは、スポーツを通じて、男らしさを涵養し、国家を担うエリートを創出しようとする態度は、当時の柔道の場合を通じてもみてとることができる。さらに、本来、武士の守るべきものは領主としての主君であったが、「偉大な国民を作る」と述べられており、そこには近代国民意識が関与していたことも分かる。前章で述べたように、木下らが行なった一高のエリート教育を振り返ると、運動部員がスポーツを通じて、エリート精神を育むことが志しとされていた。こうした点を踏まえると、上述の「壮夫」、「豪壯の氣象」、「不屈不業」などの精神は、スポーツを通じて培われたエリートとしての備えるべき西欧流の「文明の精神」を指していると考えることができる。

「武士道」によるスポーツ論の登場

『運動界』において、「武士道」の文字を含むタイトルが登場するのは、第1巻第3号（1897年9月刊行）である。

ここで「武士道」とは、西欧スポーツと武道を区別する際に用いられている。むしろ「武士道」の退廃を嘆く記事であった。

西ノ内億次郎「武士道の要を述べて其振興策に及ぶ」では、日本が西洋主義に傾き、「古来の武道潰焉として荒頹しぬ」²⁵⁾と、武道の衰退を嘆いた。そして、「武士道の廢頹にありとす、故に今日の急務は、武士道を興起して、士気を練り、士風を励ます」べきであるという。彼はスポーツを以下のように区別した。

旧武術…本邦固有の武術にして、撃劍、柔道、騎射、遊泳、等

新武術…渡来の体術にして、器械体操、ベースボール、ボート、等

両者各其の特徴を異にすと雖も、其の身肢を鍛え、士気を練るに至りては即ち一なり。余輩殊に本邦固有という。彼の劍、柔、騎、射、泳等独り我国に限らず、支那にあり、朝鮮にあり、西洋諸国亦あるなり。而して余輩が所謂旧武術なるものは、支那に非らず、又西洋諸国にもあらず、真個に我国固有のものを称すなり。

若し彼の劍、柔、騎、射、泳、器械体操、ベースボール、ボート等にして我が国固有のものにあらずんば、僕のいわゆる武士道振作の手段として挙げたる武術にあらざるなり。其れ故何ぞや。彼にありては、唯一種の技芸に止まり、巧拙を競い…中略…即ち彼は形ありて神なく、形式の末に齷齪として、言わば、児童の喜戯に過ぎざるなり。

我が国固有のものに至りては即ち然らず、技芸の講究に道義の養成を加味し、形を兼ねるに神を以てし、所謂徳育と体育とを兼備せるものなり、是れ余輩が、武士道振作の手段として、殊更に新旧武術を選択したる所以なり。

…中略…

夫れ、劍を撃ち身体を練る豈に徒爾にして然らんや。緩急に処して国家を擁護せん素養のみ。即ち、忠君愛国の精神を養う所以なり²⁶⁾

投稿者は、スポーツに「武士道」規範を鼓吹せよという主張を行ない、忠君愛校の精神を養う必要があるなどした。スポーツを通じて忠君愛国といった規範を学ぶことが「武士道」的であると説明する。

しかし、これまで示してきたように、スポーツを通じて人格を陶冶することは英国的スポーツ観であり、ストレンジや木下らが一高を通じて、もたらしたスポーツ観である。日清戦争と日露戦争の狭間にあたる1897年において、ナショナリズムの高まりとともに、西欧流のスポーツ観が「武士道」として解釈され始めたと考えられる。ゆえに、以下に示すように、投稿者が「武士道」を担えるのは一高生に他ならないと述べていることが重要である。

武士道の苗芽勃焉として興起せざらんと欲するも、豈に得べけんや、…中略…尤も元気あり、尤も有望なるものは第一高等学校学生とす。彼等は濶淡にして素朴、豪壮にして洒落、華美を競う世の中に、敝屣を意とせずして大道を闊歩し、肩峰風を切り、浩歌一世を凌ぐの状、古壮士の風あり²⁷⁾

前章で示したように、一高生は、『トム・ブラウンの学校生活』に理想を抱き、スポーツを通じてエリートとしての規範を身につけることを理想としていた。そうした彼らが「武士道」の体現者であると評価された。このことは、西欧流のスポーツ規範や「文明の精神」が、「武士道」として解釈されたことを示していよう。すなわち、「武士道」が鼓吹されたのではなく、西欧のスポーツ規範が「武士道」と表現され始めていたといえる。

「武士道」のさらなる鼓吹を望む声が掲載されたのが1898年の第2巻であった。投稿者はペンネーム遠洋魚長と記載されているのみである。タイトルが「教育家に望む」であり、著者は、授業の改善を主張している学生であるように思われる。投稿者は、同雑誌に「和船の話」を定期的に投稿している。それらには、東京湾や隅田川という文字がみられ、東京でボート競技に関わっていた人物と推察できよう。また魚長生というペンネームが、「一高対二高柔道紅白勝負」（第2巻第5号）を掲載していることから、一高の関係者と推察できる。

投稿者の主張は以下の通りである

「教育家に望む」

蓋し運動なるものは、徒に吾人の肉塊をして肥満豚の如くならしむるを以て唯一の目的とするものに非ず、吾人の筋骨を円満に発達せしむると同時に、忍耐克己、剛毅

勇壯、廉恥礼讓の諸徳を修養せしむるにあり運動にして、果たして充分に体育の目的を達し得ると同時に、此れ等の武士的精神を發達せしむるを得は、運動は實に教育上須臾も惣にすべからざるものにあらずや。

我が国現に今の教育制度に於ては、独り智育に向ては、過重の課題を授け、体育の如きは僅かに一周二三時間を以て之に充て、而も之によりて、身体を發達せしめ得るの望なく、且つ更に精神上の快樂なき体操法を課すのみ。青年の身体は決して学科として授けらるる体操によりて發達するに非ずして、学科の余暇に自ら好んで選択せる、運動遊戯によりて、強健に趣くもの多きの事實は、教育者たるものの既に了知せる所たるべし。

試しに毎にある種の運動を続行せるものと、他の運動を好まざる学生とを比較せば、運動家たる学生が骨格建逞、士氣充実せるに引換へ、運動をなさざる学生が身体虚弱、薄志弱行の徒多きを發見すべし。放蕩遊惰の風ある学校に勤儉尚武の氣風なく、運動の隆盛なる学校に浮華淫靡の俗少なきは当然なり。

…中略…

聞く、上下運動に熱中せる欧米の諸国にあつても、運動は、ただに体力筋肉の發達を以て目的とせるのみならず、之を以て徳育の實踐修得場となせりと。就中英国の如きは、学校の課程は甚だ卑近にして、而も授業の時間、一日平均二三時間を出でずと雖も、運動に向ては、大に之を奨励し、以て人物養成の一手段となりせり。

例えば、中学生に多く行わるる蹴球に付て適例を示さんに、嘗て教師は日曜に於て〈殺店身以成人〉は基督の精神なりと教訓するところにあり。生徒は之を「蹴球」に応用しつつあるなり。此の遊戯は頗る強烈にして、時に非常の危険を醸すことあり。もし一人球を抱えて伏せば、十人二十人転附覆圧して之を争う。教師等も共に出て来りて、もし味方の一人敵の爲めに苦めらるるに際し、憤然挺身して敵中に突進するものあれば、教師は拍手して其義気を鼓舞奨励す。是に於てか、元來天真爛漫たる生徒の胸中には、惣ち犠牲献身の精神を勃興し来り、後には父母の爲め、一郷一郡の爲め、將た国家の爲めに其の身を擲つの大精神を養成するに至る。又其の隊長キャプタンの指揮に従い、協力一致するものは必ず勝ち、其の各自の意思に任じて進退するものは必ず敗る。是に於てか従順の正しくして、協同一致の利あるを悟り、此の思想は次第に發揚して、父母長上に対し、或は、国家社会に対して、秩序と一致を保つ、一大美德たるを覺悟するに至る。

…中略…

その他、ケンブリッジ、オックスフォード両大学の競漕の如き、読者の既に知るところなり。ああ英人の素養比の如し…の英人が至る所に跋扈し、太陽其領内に没するの時なく、国は富み兵は強く、優に列強の牛耳を執るに至りし所以のもの、豈に偶然ならんや。人生の目的吾人之を知らず。然りと雖も宇宙に優勝劣敗の道理あり。弱の肉は、強の食のみ。

…中略…

共同生活をなし、一国として天下に独立する以上は、国家組織に一要素たる其の人民をして、悉く剛強なる国民にあらずんば、よく平和を維持し、人生の安寧幸福を増進すること能はざるなり。国民をして剛強ならしむるの法、数多あるべしと雖も、競争的運動は、少なくとも将来の国民をして剛強ならしむるの一良方便たり。而して少壯の徒は常に之を好ましむるの天性あり。此天性を善用して、三千年來神州の靈地に發達せる、愛國尚武の特質を發揮し、敏捷鋭快の資質をして、円満なる發達を遂げしめ、骨格健逞、士氣充實せる一大国民を作らんこと、豈に快ならずや、世の教育者たるもの以て如何となす²⁸⁾

すなわち、肥満の解消が体育の目的ではなく、筋骨を鍛え、「忍耐克己、豪毅勇壯、廉恥礼讓」等の諸徳を修養することが、その奥的であると主張されている。それらは、スポーツを通じて涵養される徳育であり、「武士的精神」であると主張されている。しかし、現在の教育制度では、体育が軽視されており、かつ、正課体育の体操では、上にあげた徳目を修養できないと述べた。投稿者が、理想とした体育活動とは、校友会で行われる集団スポーツのことであった。その例として英国のサッカーをあげている。英国ではサッカーを通じて、協同一致の精神や、男らしさ、自己犠牲の特性を養い、そのことが国家を守るための精神につながると主張されている。実際、学生は校友会でのスポーツを通じて「骨格健逞、士氣充實」し、心身が發達していると述べている。

さらに理想の青年像として、英国のポートマンをあげ、スポーツで鍛えられたために大英帝国の繁栄が実現したとスポーツの重要性を説いている。ゆえに、投稿者は、学校体育に集団スポーツなどの近代スポーツを取り入れることで、帝国主義を勝ち抜く強健な国民を創出できると断言している。

また遠洋は、スポーツを通じて「武士的」精神を得ることができると力説するが、その理想は西欧にあった。投稿者は、スポーツによって涵養される規範の理想を西欧に求めた。その姿は、木下校長らと同様である。例えば、英国の蹴球（サッカー）では、集団スポーツを通じて献身犠牲（自己犠牲）や協同の精神を涵養できると述べている。そして、それらは、国民形成をうながし、忠君愛國につながると、近代国民国家を發展させる要因に言及している。ここで、遠洋が、英国のスポーツ教育事情に詳しい事に着目したい。集団スポーツを通して陶冶される協同一致の理念や、自己犠牲、集団の中に立ち向かう男らしさといった「アスレティシズム」で重要視されるスポーツ精神を意識している。さらに、それは国家において有用な規範であると述べている。国家の發展にスポーツ規範を必要とする遠洋のスポーツ観はスポーツと帝国主義の結びつきを意識させる。つまり、大英帝国が世界中に植民地を持つまでになったのは、スポーツによって身体と規範を磨いてきたエリートが活躍したからだという。さらに、「人生の目的吾人之を知らず。然りと雖も宇宙に優勝劣敗の道理あり。弱の肉は、強の食のみ」と強者が生存する世であると言い、社会ダー

ウィニズムの視点からスポーツの必要性を説く。日本が生き残っていくために、英国のようにスポーツを通じて徳育教育を施す必要があると説明した。以上のことは、日本が、近代国民国家として生き残っていく上で、英国流のエリートの実践した役割と同じものの必要性をとくものであり、必要な規範とは、アスレティズムを通して普及された価値観であった。

つながり、スポーツを通じて涵養される規範を、日本人として国を守るための精神へと変容させる必要があったことは、遠洋の「愛国尚武」の表現にみてとれる。このことは、スポーツにおける「武士道」規範の形成において、社会ダーウィニズムやアスレティズムが影響を与えたことを示唆している。すなわち、ローデンが指摘したように、社会ダーウィニズムと「武士道」は無関係ではない。そのことは、以下の記事からも裏づけることが可能である。

「運動界の気運」

『運動界』第2巻第4号に、エール大学（アメリカ）と第一高等学校の対抗試合（野球、競争、演説、討論）が行われることが巻頭にて掲載された。その中で、「我が日本帝国なる第一高等学校学生」と表現され、外国との対抗試合に臨む一高生と帝国主義が結び付けられた。さらに、「一高の健児が、奮戦之を破らんことを望むは、元より吾人の囑望するところ、全国の青年がますます運動を奨励して、武士的運動の好模範を海外に示すの期已に至れり」²⁹⁾と述べられている。一高生が国際的にスポーツマンシップを発揮することが望まれる中、アメリカとの対抗試合は、日本国家という共同体を容易に想像させ、ナショナリズムを発揚する機会となった。ここで、日本人の発揮するスポーツ精神が「武士的運動」であると表現されており、日本人らしさが強調されていた。つまりは、そこで、一高生によって発揮された西欧流のスポーツマンシップが「武士道」と表現されたにすぎない。しかし、外国との対抗試合を前に、西欧流のスポーツマンシップを日本人が発揮することを「武士道」と意図的に区別している。この意図された区別は、「武士道」が、日清・日露戦争期に創られていく過程の中で生じた文化ナショナリズムを投影する現象であったことを思わせる。事実、この対抗試合は「奮え、満天下の健児諸君、将来の戦場は欧山海米にあることを覚悟せずんば」³⁰⁾と、帝国国家との戦争になぞらえられている。スポーツは日本と外国の間で起こりうる闘争、すなわち、戦争と結びつけられたため、「武士道」の語が日本という近代国家の共同体を想像および創造する際の、分かりやすいシンボルとなった。言い換えれば、スポーツ規範に帝国主義的イデオロギーの様相が加わったことで、スポーツにおける「武士道」規範が形成された。

〈帝国大学運動会にみる菊池の運動精神〉

知雨山人著「帝国大学『運動会』を論ず」では、帝大・一高の運動会を通じて、彼等エリートが理想としたスポーツ規範について述べられている。投稿者は、「強壯なる身体を養

成すると同時に、精神上的徳性を涵養し、併て親睦団結の美風を作り「あり」³¹⁾とし、その精神上的徳性の説明に菊池大麓の運動の精神の演説を一部引用した。つまり、第一章で述べた菊池の運動精神（1899年）マンリネス、ブラック、フェアプレー、マグナニミティー（magnanimity）、オーダーが紹介されていた。菊池は、これらのスポーツ精神は、「古より武士気質として尊重したるものなり」³²⁾と、述べており、投稿者は同部分も引用している。したがって、英国のスポーツ精神が、「武士道」の表現を用いて語られ、日本的気質の中にもあったかのように用いられたことは、菊池に限ったことではなかったことを示している。

投稿者は、帝大運動会で「会員が、年々後進たる高等学生に綱引きに引きづらるの醜態と曰ざるべし」と、後輩の一高生に綱引きでまける現状を嘆き、それではいけないという。なぜならば、「大学が国家最高の学府たるが如く、其の運動会をして亦国家最高の名誉ある、恐敬すべき団体たらしむるにあり」と述べ、国家最高のエリートであるという自覚と名誉心を守れと促している。そして、エリートの名誉心はスポーツ大会を通じて勝ち取ることができた。さらに、「大学の運動会には春秋の大会毎に、皇太子殿下にも行啓あらせられ、「殿下の御知遇を辱ふし奉り、下は天下数万の学生の仰望する所たるに拘らず、〈運動会〉の不振、今日のは如くなるは、豈に堂々たる帝国大学の屈辱にあらずや、大学の運動会たるもの何すれぞ、努力一番其の運動会をして天下運動会の模範」³³⁾でなければならないとし、天皇家の前で、帝大生が運動会で負けることはあってはならないと述べている。

ストレンジや菊池が始めた運動会は、1898年には、スポーツを通じて帝大の威厳を示し、菊池の言う運動精神を携えたエリートたる姿を誇示する場になった。さらに、皇太子から「御知遇を辱ふし奉り」しことは、近代国民国家日本の象徴たる天皇制国家とエリート学生がスポーツを通して結びついたことを示している。エリート学生の国家への帰属意識やナショナリティーはスポーツを通じて育った。

〈武士の試合〉

『運動界』を分析すると、一高生らエリート学生は、しばしば武士と表現されている。一高と二高の第2回対抗試合が行われた事後報告及びその考察が『運動界』（「中傷者を排す」）に掲載されたのが第3巻第5号（1899年5月）である。この試合では、一高野球部が敗戦し、一高柔道部が勝利した。

この結果を受けて、二高生と思われる投稿があり、二高側から試合の結果について事後問題も含めて、スポーツ規範について言及している。

昨春第一回の戦終わるや、両者手を握って相別れ、勝負によくあり勝ちなる怨恨の痕跡だもとどめざりしは、武士と武士との晴試合として、好模範を世に示せしもの。

…中略…

今春の試合に至りては、一つの悲しむべき現象起きりすものあり。…吾人は、むし

ろ、二高健児の為に惜しむものなり。公等は盛んに、一高は卑劣手段を以て勝利を博せしと唱うるは何ぞや。…殊に敵の大將と組んで、百方自衛の道を取り、引き分けを希望せしは、普通の勝負法にも往々みるところ。…中略…

若し一層の詐術を用い、剛力なるものの「抑え込み」「絞め」をかけんことを恐れ、わざわざ帯の結びかたを考えて、一寸ひけば解け易からしむる如くするなど、のこを試むるあらんか。これこそ、卑怯者とし陋劣漢とも武士らしくなしとも評すべけれ。勝負法にそむかざる以上は、弱者が強者に対してあらゆる自衛の方法を試むるは、徹頭徹尾卑陋んばりとは断じ難からん。

…中略…

二校の健児、云うまでもなけれど、公明なれ正大なれ、女兒のくり言めきたること云う勿れ、…技術の範圍を脱して勝ちを得んことを意とせざれ、「テレ隠し」なるものほど、馬鹿げて醜なるものはなきなり。³⁴⁾

投稿者は、第一回大会を振り返ると、試合後には握手をすることで、互いの健闘を称えあい怨恨を残さなかったとし、それは、「武士の晴れ試合」であったと述べた。

しかし、第二回大会では、一高側が汚い勝ち方をしたと、二高の諸君は不満を述べているが、それは見当違いであると述べた。その理由は、ルールを破ってでも勝つという姿勢は卑怯であるが、ルールを守りながら負けないように戦うことは汚い行為ではないと説明した。そして、二高生に公明であり正大であるように求めた。

試合が終わると握手をし、ノーサイド（試合終了と同時に握手などで互いの健闘を称え、互いに勝敗の怨恨を残さない儀礼行為）とする儀礼行為は、現代でも見ることが出来る西欧流スポーツマンシップの一例である。決して、武士の作法ではない。しかし、明治期には、正々堂々としたスポーツマンの態度は武士的な行為と表現されていたことが分かる。闘うスポーツマンは武士であった。

「武士道」の虚偽性を指摘している佐伯は、「正々堂々とした一騎打ちをする武士」というイメージの形成は、新渡戸以降の「武士道」論に帰すべき部分も多いのではないかと提起している。³⁵⁾しかし、上述したことは、ややこれよりも早い時期のものであった。

以上、述べてきたように、「武士道」の形成過程は、『運動界』に掲載された記事に多く反映されている。しかも、スポーツにおける「武士道」規範は、特定の校長の私見だったのではなく、多くのエリート学生がそれに同調していたことが分かる。次節では、「武士道野球」と言われた一高野球部に焦点を絞る。一高野球部は、社会ダーウィニズムの影響を受けずに「日本独自の文化の再評価」の上に「武士道野球」を築いたのであろうか。

註)

- 1) 坂上康博『につぼん野球の系譜学』青弓社、2001年7月、97頁。
- 2) 同上、101頁。

- 3) 同上、102頁。
- 4) 『校友会雑誌 号外』第一高等学校校友会、1895年2月、1頁。
- 5) 木下秀明「坪井玄道」『日本近代教育史事典』平凡社、1971年12月、393頁。
- 6) 坪井玄道、田中盛業編『戸外遊戯法』金港堂、1885年4月、序文。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上、緒言。
- 10) 同上。
- 11) 同上、66頁。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上、93頁。
- 15) 「『運動界』発行の趣意」『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年7月、1頁。
- 16) 日本体育大学体育史研究室『運動界 解説』大空社、1986年2月、11頁。
- 17) 前掲雑誌、1頁。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 池田恵子「体育・スポーツ史の地平を考える—今、何が問われているか—」小田切毅一監修『いま奏でよう、身体のシンフォニー』叢文社、2007年9月、22頁。
- 21) 同上。
- 22) 『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年7月、表紙。
- 23) 「筑紫艦米艦を破る」『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年7月、18頁。
- 24) 「近日の柔道界」同上、19頁。
- 25) 西ノ内億次郎「武士道の要を述べて其振興策に及ぶ」『運動界』第1巻第3号、運動界発行所、17頁。
- 26) 同上。
- 27) 同上、18頁。
- 28) 遠洋魚長「教育家に望む」『運動界』第2巻第3号、運動界発行所、1898年3月、2—3頁。
- 29) 「運動界の気運」『運動界』第2巻第4号、運動界発行所、1898年4月、1頁。
- 30) 同上。
- 31) 知雨山人「帝国大学『運動会』を論ず」第2巻第11号、運動界発行所、1898年11月、3頁。
- 32) 同上。

33) 同上、3-4頁。

34) 「中傷者を排す」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年5月、5-7頁。

35) 佐伯真一『戦場の精神史武士道という幻影』NHKブックス、2004年5月267-268頁。

第2節 一高野球部にみるスポーツ規範と「武士道」

本節では、一高野球部に着目しながら、彼らの「武士道」論について考察する。一高野球部の創設に関しては、ストレンジの協力の下に「ベーすぼーる会」が誕生したことに始まる。一高野球部に詳しい資料として、『校友会雑誌 号外』がある。同資料は1895年2月22日に発行された『野球部史』に相当する。この野球部史の一部は、雑誌『運動界』にも定期的に掲載されている。『野球部史』には校風と野球部の関係が示されている。

我がベーすぼーる部は、実に校風と相俟い相助けて、他の校友会各部の共に油然として、進歩し来れるなり。余が殊に校風の発生を論ずる所以なり。団結の事を謀るに便なるや、久し凡そ人日夕相会すれば、必らず一定の気風を生ず。一貫の気風なきの集合は、夫れ猶烏合の兵の如き乎。戦わずして潰んのみ。何ぞ事を謀るに便ならんや。然れども風に美悪あり。気に雅卑あり…其の団結は即ち、堅硬なりと雖ども、其業は慕う可らず¹⁾

つまり、野球部は校風の誕生によって発展したと述べられており、団結心のない集団は烏合の衆であり、戦うことすらできないとし、野球は団結心を創る上で効果を発したと説明されている。校風がどのようにして生まれたのかについて以下のように綴られている。

校風の源は、必ず寄宿に在り。而して、如何せん当時の寄宿は自励自修の郷に非ずして、干渉叱責の場なり。

…中略…

木下校長全校を驅って寮生えたらしめんとすの議あるを聞くや、生徒は悉く異議を挟み往々怨言を洩せしか。寄宿舎は寮生の自治に任し、入寮は各自の随意を許すとの命下るに及び、前の怨言は変して歓呼となり²⁾

それゆえ上記は、校風の誕生と発展は木下の自治制寄宿制度によるものであったこと、そして団結心を強固にするのもまたスポーツであったことを学生が理解していたことを示していよう。

寄宿の一団結爰に生じ、剛果の精神木訥の行為已に各人の心頭に浮べるも未だ遊離して一となるの機を得さりしに、四月上旬に至りて、一大機会は期せずして至れり。明治二十三年四月帝国大学の招待に依じて我校と商業校との競漕是なり。…全校悉く目を注げり。特に、寄宿舎は其の新団結漸く成りて、鋭気磅礴たりしを以て相議して必らず勝を得しとして、先づ醸金し選手の労を問ひ、競漕の前夜悉く東寮の階上に会して、赤沼金三郎氏所選の凱歌「花は桜木」を歌ひ。四月十二日…我が選手に声援に声援して、天下公衆の面前に無双の勝を制せり。此の夜寮生は悉く祝杯を挙げ、凱旋

歌を歌い歓呼拊舞、夜半に達せり。此の一宵は、実に我が校風を発動せしめたる³⁾

また一高生は、寄宿舎の生活の中で団結し、剛健の精神を身に付けなければならないと思っていたが、なかなか団結する機会がなかったことが上記に示されている。しかし、商業校との競漕大会で、団結し、勝利を世間に示すとその夜には勝利に酔い、彼らの間に校風が誕生したと説明されている。

以上のように、スポーツ大会の勝利によって一高生は一致団結した。こうしたスポーツ活動を通じて、一高生に団結心が養われており、自治制寄宿制度とスポーツが結びつくことで、一高生に「文明の精神」が育まれた。

次に「インブリー事件」の記事についてふれておきたい。国家を担うエリート学生として対外試合において負けることは許されなかった。このような状況下で起きた暴動が「インブリー事件」である。1890年5月に、一高と明治学院の間に野球の試合が行われた。6回の時点で6-0と明治学院がリードしていた。一高の敗戦ムードにいらだっていたのが柔道部員であった。「彼らは試合途中で明治学院のアメリカ人教師 W・インブリーが一高の垣根を越えて入ってきたのを発見し、激怒して彼につめ寄った。その無礼な行為を批判する柔道部員たちに寮生も加わり騒然」とした。⁴⁾そして、暴動のすえにインブリーと明治学院の選手が負傷し、試合は中止された。この事件について先に言及の中馬は次のように述べている。

我が会が校風を発顕するの機会を校友に与え、校名を代表するの運動会となれるの初めにして即ち、校技となれるなり。故に、此の夜会員は、校威を損ねるを恥じて謹慎して校友に謝せり⁵⁾

部員であった中馬は、野球部の敗戦（一高生は、この試合を実質敗戦と捉えた）は、校威を失う行為であったと謝罪した。さらに、「ベーすぼーるの技は、ベーすぼーる会のベーすぼーるに非ずして、既に第一高等中学校の校技たり」⁶⁾と述べており、野球を一高の校技として捉えていることがわかる。坂上は、この事件を通じて中馬ら野球部員が「対抗試合を一高の威厳と名誉をかけた〈校技〉としてとらえるようになる」⁷⁾と評した。

一方で、ローデンは、インブリー事件の原因を「籠城主義」から説明している。「一高キャンパスはふだん正門は閉じられ、外部の者は一切入れなかった」⁸⁾が、その「聖なる場所」をインブリーが破り乱入したためであったと指摘している。事実、インブリー事件を通じて「木下広次は一高の籠城主義の推進者として学生たちを支持し、結局柔道部自警団に何も規則上の措置をとらなかった」⁹⁾。

四綱領を掲げ、国家のエリートとして行動するように支持したのは、たしかに木下であった。護国旗制定（1889）によって、校名を守るという愛校心が、忠君愛国につながった。イギリスにおいても各々のパブリックスクールへの忠誠心が、大英帝国への忠誠心

へと変容している。ボートレースにおける学校の徽章ないし紋章はまさしく護国旗同然であった。野球も同様のことが、護国旗制定の翌年に起きていた。国家のエリートを代表する一高が負けることは、威信の喪失であった。護国旗制定によって、こうした愛校心に拍車がかかったと考えられる。「インブリー事件」とは、野球が校技になったとことに加えて、護国旗制定翌年に、一高生に一高（国家）という共同体への忠誠心として、「愛校心」、「忠君愛国」の精神が高まっていたことを象徴する事件であったといえる。以上より、「インブリー事件」は、社会ダーウィニズムの影響下を物語っている。

一高野球部の最大の理解者といえる人物は木下であり、また「野球を尋常中学校の校長に推薦」するなど、¹⁰⁾ 野球という競技自体を奨励した。木下は、一高野球部へ金銭的な援助も行なった。

それは、三高（京都）野球部が同志社大学に二度敗北すると、一高野球部は、三高敗戦の名誉を取り戻すために、京都遠征を企画した。しかし、遠征費という問題が浮上した。そこで、中馬ら野球部は、木下前校長に寄付を願い出た。これに木下は50円の寄付を約束した。京都遠征計画は、最終的に同志社大学の対抗試合拒否により頓挫することになった。なぜ木下は野球部に対し、ここまで積極的な支援を行なったのだろうか。坂上によれば、部報から京都遠征の価値を「東西両都の学生が相会することになるが、その利益ははかり知れないものはある。とくに互いの校風が火のごとく輝き現われること、これはまさにそのおおいなる利益」と校風の発揚による。加えて、「〈校風を鑄て我が校風に化せしめん〉とするのが、いかに困難であることか。口舌紙筆ではそれをなしがたい。こうして、木下先生が主張する〈詩歌にあれ遊戯にあれ衆の与に共にする者〉の必要がうまれるのだ。木下先生の意図はまさにここにある」¹¹⁾と木下の言が引き合いに出されている。ここには、学生たちが、スポーツを手段に愛校心や校風を高めていた姿が映し出されている。

では、野球部の恩人であった木下自身は、野球をどのように考えていたのか。彼は、雑誌『運動界』の中で、野球を他の競技と比較しても良好な効果があるものとして評価している。

青年者の団体に対して、競技運動の欠くべからざるは、固より言を待たず年長者間にありても亦一必要物たるの地位を占むべきは、世の已に認むる所なり。然るに、此の種の競技は、従来我が邦に存在せず。今日各学校に於て行はるる所の運動会なるものは、元と輸入制の一にして其の実行日尚浅く。従て之に伴うべきの作法も未だ一定せず。特に何等の競技が最も我國民の性格に適當するのやの問題に至りては、今日に至る迄未だ充分に之が解答を与えたるものあることを聞かず。海國民として、又全国皆兵主義を執れる國民として如何なる種類の競技を執りて以て、我が特有のものとするべきやは、未決問題たり。

…中略…

第一高等中学校に在し時も亦た撃劍、柔道、端艇、野球、テニス、遠足等より…中

略…部を設けて悉く之を施行し以て、密かに我が大和民族に適應するの競技を選択発見することを期せり。

…中略…

野外の露營、夜間の勤務等頗る身体及心胆を練磨する点に於て、大に効力あることを認めたり、之に亞きて其の結果の良好なりしものは、野球及び、端艇なりし¹²⁾

上記のように、木下は学生の集団を陶冶する上で、スポーツが重要であると述べている。しかし、元来スポーツ文化は日本に存在しなかったため、どのような競技が日本人に適当なのか決め難い。青年が、国家を守る観念を持った日本の国民へと成長するためには、どの競技を推進すべきかを思案する必要がある。そこで、一高校長時代を通じて、どの競技が日本人に適應しているのかを発見したいと考えていた。その結果、木下は、野球と端艇がその役割を十分に果たすと結論づけた。

以上のような理由から、木下は一高校長職に就いていない時期も一高野球部を支援し、野球を学生スポーツとして奨励した。このことは、木下が理想としたエリートを育成する上で、一高野球部がその体现者たる集団に成長したことを示している。

また野球部も、木下の教育方針の下でスポーツを通じて国家に有用なエリートになることを目指した。言い換えれば、一高野球部は、近代国民国家の担い手として西欧流の「文明の精神」を身に付けることを理想としたに他ならない。

しかし、野球部の目的は異なっていたという主張も存在する。それは、学生スポーツと帝国主義との関係にある。そこで、先にあげた一高野球部の遠征問題について、一高野球部の視点を加えながら繰り返し述べたい。

同志社と三高との野球の対抗試合が開催され、結果三高が敗北した。後日、雪辱戦が行われたがまたも三高が敗北した。この結果を受けて、一高野球部は憤慨し、京都遠征を企画した。しかしながら、野球部は、遠征費という問題に直面した。そこで、野球部は、「部員、石井徹、小林政吉、中馬庚の三人亦座に在り。前校長に京都遠征費の五十円を謀る。前校長是を諾す。三人大に喜ぶ」¹³⁾とあり、野球部は、卒業式に来校した木下前校長に遠征費を頼むと、木下は快諾し、野球部に遠征費50円を援助した。1893年9月に遠征費用が届けられたが、10月に「校例に依りて、相州鎌倉にて発火演習を挙行せんとす。道途遼遠にして、生徒の出費稍重きに失するを患う」¹⁴⁾と、行軍を行なうために、遠征費を寄付せよと学校当局から「松田部長、鈴木幹事を以て命を伝え、即日の応否を促す」と伝えられた。これを受けて、「即夜十数人を東寮談話室に集めて是を議す」¹⁵⁾と野球部で会議が行なわれた。この会議では、以下のような議論が行われた。

伊木常誠曰く、此の金の費途一に我が部の権内に属す。若し、遠征果して行ふべきの必要あらば、断然頼みを辞すべし。…中略…我此の夏京都を過ぎりて…中略…庭球部の諸子と会して、其の技を察するに幼弱取るに足らず。想うに、同志社と雖も亦此

の類のみ。戦うも我が技を練るに足らず。勝つも以て校威を挙ぐるに足らず。適以て我が武を汚し、虐ぐるの誹を遺さんのみ。…中略…此の金の如きは、現に今我に於て無用の長物たり。

井原外助、森脇幾茂曰く、此の回の遠征単に壬申会の故のみにあらず。全国七同窓の為に、其の名を潔うせんが為のみ。敵の強弱は問う所にあらざるなり。

中馬庚曰く、今や我に校友会あり、仙台に尚志会あり、京都に壬申会あり…中略…七同窓の情就て見るが如し。今や壬申会敗て伝うる、これ再び各校憤慨を共にするの情其の紙上に躍然たり。而して環視して、敢て手を下さざるは何ぞや。蓋し、我が校列に於ては第一たり。技に於ては一日の長あるを以て想うに、我が部に待つあるなり。我が部今日の盛んあるは外寇の頻繁なりしと校風発動の具たりしに依る。而して今一たび遠征せば、外敵爰に生じ校風我を暇って旧都に発動せんとす機蓋し失う可からざるなり。若し我が校の為に之を謀らん乎…中略…遠征を主張すと議即ち、決し旨を具して、献納を辞せり。¹⁶⁾

野球部史によれば、伊木常誠は、夏に京都を訪れ、三高の野球部を見たが技量はあまり高くなかったとし、同志社も同量の技量であろうと述べた。そのような野球部に勝利したところで一高の校威を高めることは出来ないし、弱者を虐げるの誹りを受けかねないため、遠征費は行軍に用いた方が良くはないかと主張した。それに対し、井原外助、森脇幾茂は、遠征の目的は高校の名誉回復にあると説明し、相手の技量の高低は問題ではないと述べた。そして、中馬は、三高の二度の敗戦に全国の高校が憤慨しているとし、それを無視して対外試合を行わないことは認められないと主張した。特に、一高は全国の高校の筆頭であり、野球に一日の長があるため、全国の高校から期待が集まっていると述べた。また、一高野球部が隆盛を誇った理由は、積極的な対抗試合と対抗試合によって校風を発揚させたためであると説明し、遠征を行なうべきであると主張した。遠征費に関する議論は二度行われたが、両会議で遠征費は遠征に用いることが決議された。

以上の京都遠征に関する議論について、坂上は、「外への威信の表示と校内的団結の促進、この二つを内容とするものであったとしている。またそれは、学生たちの強烈なエリート意識やプライドに支えられたものであると同時に、学内の団結という現実的な課題ともしっかりと結びつけられたもの」¹⁷⁾であると述べ、「彼らは、〈校風〉の振起を基軸とする論理によって、忠君愛国という究極の国民の道徳＝教育勅語をまさに体現するものである。〈行軍〉をもうわまわる価値を野球部の活動に付与したのである」¹⁸⁾と解説している。これを根拠に、「当時の日本において、エリート中のエリートであった一高の学生たちとスポーツの強固な関係がこうして築かれていったのだ。エリートたちとスポーツが強固に結びつく時代が到来したのである。しかし、D・ローデンがいう帝国主義との結びつきは、まだ彼ら

の自己主張のなかに姿を現していない」¹⁹⁾と結論づけている。すなわち、行軍という帝国主義に対する野球部の抵抗を見出し、ローデン批判の根拠の一つとした。

しかし、この問題は別角度からの考察が可能であるように思われる。まず、木下が野球部の最大の支援者であった理由として、彼が理想としたエリートを育成する上で、野球という集団スポーツが有効であったと考えていたことは先に述べた。そして、木下の推進した学校システムは近代国民国家を完成させるために、パブリックスクールのシステムを取り入れていた。ローデンの指摘したように、一高生は世界中でみることもできたエリート青年の姿であり、社会ダーウィニズムとともに拡大したアスレティズムの影響があったことを示してきた。木下の教育方針の下にあった当時の一高生は、帝国主義の時代の中で国家を代表するエリートとしての自覚を有していた。それゆえ、一高生のスポーツ活動が、帝国主義と結びついていないとは言い難い。加えて、一高生はスポーツを通じて校風を高め、また高めることができると認識していた。こうした様相は、上の中馬の言動からもみることが可能である。

当時の校風とは、木下の護国旗制定によって生まれた「護国調」や、自治制寄宿舎を誇りとした「自治」、「正義」²⁰⁾に象徴されていた。野球部が京都遠征を企画した理由もまた、三高敗戦の雪辱を晴らすとことであり、高校の名誉を守ることにあった。こうした点において、野球部は、木下の理想としたエリートの体现者としての役割を果たしていた。前章でも触れたが、木下は、戦争と身体練磨の関係を明確に意識していた。「日清戦役に於ける我軍隊突貫の多き、或は敵火を望見して早く已に突貫の用意を為せる者あるに至れり」、「然らば駆足は一長技として大和民族専有に帰すべきもの。或は期するに難からざるべし」²¹⁾と、日清戦争では、兵隊が走って突貫したことで勝利したと木下は述べている。さらに、疾駆する場所とは、「支那四百余州を駆足するも善し。以て西邊^{シベリア}の広原を突貫するも可なり」²²⁾と中国やシベリアで戦うことを前提にしていた。こうした軍事目的も意識し、運動を通して鍛えられる身体能力や気質の重要性を述べたのであり、当時の帝国主義的風潮が彼の思想に反映されている。

また、この遠征問題を帝国主義の影響か否かという二項対立から考察するのではなく、グットマンのいう文化ヘゲモニーの概念から検討すれば、別なる視点を見出すことが可能である。先に述べたように、文化ヘゲモニーとは、文化帝国主義の影響を認めつつも、その構造の中にあつた微細な権力関係の構造を読み解こうとするものであり、文化帝国主義を否定する論理ではない。しかし、スポーツがただ文化帝国主義の影響だけによって伝播及び、発展したのでないという主張を補強しているのも事実である。一高の場合も遠征費を行軍費用にせよという学校当局からの力に対して、野球部は議論を重ね、結論として抵抗をみせた。そして、中馬らは、校友会誌に自身の考えを論稿した。こうした抵抗が野球部のあり方や校風論に微細な影響を与えたことは疑いようがない。この事例は、彼らのスポーツに対する純粋な思いの発露とも捉えられる。そうした純真なスポーツへの思いを排除し、別なる権力構造から彼らの行動を規定しようとする力に対し、抵抗をみせたことは、

むしろ自然な力学に基づくものであろう。しかし、そのことがスポーツ全体の普及過程を後押ししていた帝国主義権力への対抗図式であると提示するには、全体構造に対する否定要因を欠いているといわざるを得ないであろう。すなわち、文化ヘゲモニーの一側面として説明する方が妥当なのではないだろうか。

以上のように、木下は、一高校長時代の経験から国家に有用なエリートを形成する上で、野球が効果的であると考えた。また、野球部が校風論を重視していたことから木下の自治制寄宿舎や護国旗の影響を野球に投影していた。しかしながら、一方的に帝国主義に同調したわけではない。学校当局に対して、野球部が抵抗をみせたこの事例は、日本におけるスポーツ事象についても、文化ヘゲモニー論を用いて分析可能であることを示していると考えられる。

次に、野球部について形容された「武士道」と武道において表現された「武士道」について考察しておきたい。坂上は、野球部と撃剣部にみられた「武士道」論の差異について、次のようにまとめている。「質素儉約の風」、「剛健勇武の気」、「直往邁進の概」が野球部独自の価値観であり、これに対して、撃剣部鈴木という「武士道」は「果敢勇往の精神」、「活発進捗の気象」や「質朴武健」、「礼節廉恥」、「一致協同の念」に加えて、「万世一系の君主まします、万国無頼の国体」に随伴し、「国家道徳の根本要素」である「忠孝、節義、愛国、尚武的なもの」をもふくんだ「秀美なる道徳」²³⁾となる。両者の差を、「天皇制イデオロギーとの関連が明確に意識されている」²⁴⁾と指摘した。そして、「この〈武士的野球〉論をもってしても、やはりD・ローデンがいう帝国主義との強固な結びつきを見いだすことはできないのである」²⁵⁾と説明した。

しかし、その差異を強調することが、社会ダーウィニズムの否定にはつながらないように思われる。たしかに、武道には寒稽古などの日本的とされる身体訓練が残されており、武道関連の部と野球部が理想とした「武士道」論は、全くの同一のものを指したとは言えないであろう。しかし、個々の地域の主君に対して抱かれていた忠誠心ではなく、武道家が、武道に国家意識を反映させることこそがこの時期に見られた新しい特徴であり、帝国主義の広がりとともに世界に拡大した「アスレティシズム」のような西洋的スポーツの価値観が柔道や剣道をも貫いたことを示している。スポーツを通じた近代国民国家形成は、世界中の国家で用いられた。日本においてもその手法を用いたのが木下であった。「国家道徳の根本要素」である「忠孝、節義、愛国、尚武的なもの」をもふくんだ「秀美なる道徳」は柔道部だけの価値観ではなかった。護国旗により、忠君愛国の精神を養い、四綱領を教育したエリートの道徳心などの近代国民国家の根幹たる思想を、一高生に啓発したのは木下であった。彼が、理想とした集団であった野球部もまた忠君愛国や節義、天皇制イデオロギーなどの近代国民国家の根幹となるイデオロギーを共有していた。

したがって、木下と野球部との深いつながり、木下が一高生に与えた影響、野球部の愛校心やエリート意識を踏まえれば、彼らのスポーツ規範、すなわち「武士道」は、その形成過程において、帝国主義における社会ダーウィニズムの影響の上で形成されたのであり、

人気を博した野球に大いに投影されたと言える。しかも、それは野球に限られたことではなく、武道を含めた多くの体育活動にも少なからず影響を与えていたと言える。ただし、現象面でみれば、文化ヘゲモニー論によって分析可能な様々な抵抗の力学の影響も存在したことを考慮しておかねばならないであろう。

註)

- 1) 『校友会雑誌 号外 野球部史附規則』第一高等学校校友会、1895年2月、12頁。
- 2) 同上、13頁。
- 3) 同上。
- 4) 坂上康博『につぼん野球の系譜学』青弓社、2001年7月、36頁。
- 5) 前掲雑誌、14頁。
- 6) 同上、15頁。
- 7) 坂上、前掲書、37頁。
- 8) 森敦監訳ドナルド・T・ローデン『友の憂いに吾は泣く(下) 旧制高等学校物語』講談社、1983年4月、14頁。
- 9) 同上、15頁。
- 10) 坂上、前掲書、65頁。
- 11) 同上、66頁。
- 12) 「木下京都大学総長の運動意見」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年5月、1頁。
- 13) 『校友会雑誌 号外 野球部史附規則』第一高等学校校友会、1895年、2月、38頁。
- 14) 同上、39頁。
- 15) 同上。
- 16) 同上、39-40頁。
- 17) 坂上、前掲書、74頁。
- 18) 同上、75頁。
- 19) 同上。
- 20) 高橋佐門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』昭和出版、1978年9月、49頁。
- 21) 「木下京都大学総長の運動意見」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年5月、3頁。
- 22) 同上。
- 23) 坂上、前掲書、101-102頁。
- 24) 同上、102頁。
- 25) 同上。

第3節 極東アジア選手権大会にみる日本選手団とアマチュアリズム

近代日本におけるスポーツ規範形成の問題を考える際、英国のスポーツ教育思想、「アスレティズム」が日本のスポーツ規範に与えた影響はたしかに存在したといえる。当時のエリート学生は、スポーツを通じて、「愛校心」や「忠君愛国」、「自己犠牲」、「男らしさ」、「質実剛健」など、「アスレティズム」に見られるスポーツ規範を「武士道」として身につけた。しかし、本節ではスポーツが、国家のイデオロギーに翻弄され、ただナショナリズムを発揚する装置としてのみ機能したのではないことを示したい。そこで、以下では純粋な英国スポーツ規範が日本で定着していた事実を示す一例として、日本人のアマチュアリズムに対する態度を紹介したいと考える。この点は、スポーツ規範としての「武士道」を考える上で、より示唆的な意味の提示にもつながる。

それは極東選手権競技大会（以下極東大会と略す）での出来事であった。極東大会は、アメリカのYMCAが設立に深く関わっていた。極東大会の構想が日本に伝えられたのは、1912年であり、ソルトレイクシティYMCA体育主事E・ブラウンが来日し、極東オリンピック協会設立の交渉を行った。日本にはYMCAの主事がおらず、またスポーツ界への影響も皆無に等しかったため、交渉の相手として誕生後まもない大日本体育協会が選ばれた。極東大会の主だった参加国は、日本、中国、マニラ（アメリカ植民地）であったことから、帝国主義下の国家闘争の影響を受けた大会でもあった。

1925年に開催された第7回大会は、マニラで開催された。本大会期間中に、日本人選手団はフィリピン審判団の判定に対し、監督を通じて30回以上も抗議し続けた。このときの陸上選手の様子が雑誌『體育と競技』に掲載されている。当時の様子を記録していたのは水泳選手宮畑虎彦であった。退場前日の様子は、「陸上選手は、あんまりひどい審判をするので、今日は退場しようとして一同フィールドに集合したけれど止められた」と言い昨日にもまして憤慨していたと手記に綴られている。¹⁾

こうした不満を押さえ込んだ中で迎えたのが、翌日19日の400メートル競走決勝であった。

当時のスタートレーンの決定についてのルールは、予選順位等に関係なく抽選方式で決めるのが規定であった。しかし、大会中に幾度もあきらかにフィリピン選手のスタートレーンが絶好の位置にあったという。400メートル決勝もその例外ではなかった。同決勝レースは納戸徳重選手が優勢に進めたが、フィリピンのダナオ選手が、最終直線で納戸選手のレーンに侵入し、肘で納戸の胸突き走行を妨害した。結果、1位ダナオ、2位納戸の着順でゴールした。このときのダナオの不正に日本人選手団は、抗議しなかった。このとき抗議しなかった理由を納戸は『體育と競技』に以下のように語っている。

私は、ダナオは除外すべきだと思った。コーチャーは我慢せよと私に言った。私は、すぐにあきらめた。一昨年のお阪の極東大会を思い出したからである、ダナオは…中略…私に敗れていた、私は当時ダナオの心中を察して、私の今日の胸中にひき比べて

これはいさぎよくあきらめようと思うたからである²⁾

以上のように、納戸は前回大会からライバル関係であったダナオの心情を理解していたからこそ、抗議をしないことを決めたと述べた。

納戸の抗議は行われなかったが、レース後に審議が行われた。日本人選手団は、ダナオの失格の審議であると考えていたという。審議の結果は、日本人選手団には納得のいかないものであった。なぜならば、失格になったのは納戸であり、失格理由はスタートカーブでガルシオ選手のコースへ侵入したためと判定された。同大会を通じて、いくつもの不満に耐えかねていた選手団は、この納戸の不当と思われる失格に、神聖なスポーツが汚されていると判断し、総退場を決断した。

しかし、この退場に対して、総合優勝を勝ち取りたい大日本体育協会は競技を続行するように指示した。また退場した場合には、重い処罰（マニラに抑留）を課されることが告知された。

突如として選手たちは、フィリピンを中心としたアメリカ帝国主義の不正に抗議の意を示して、アマチュアリズムを貫くために総退場を決意するのか、もしくは、総合優勝という大日本帝国主義の使命遂行の圧力を介した大日本体育協会による試合続行の決定に従うのか、選手としての判断を問われることになる。

結論的に選手団は総退場を選んだ。その重い処罰として、宣告どおりに選手はマニラに置き去りにされた。その後、マニラの日本領事の権限により、日本に帰国することができた。帰国後、選手団は『體育と競技』で、その心境を告白した。³⁾以下に示す記述は、「日本代表陸上監督選手一同」の筆名で記載されたものである。

退場の理由は簡単明瞭であり、「アマチュア競技者として…競技を継続する事が潔よく退場するよりも遥に不名誉であり厳粛なるべき運動精神を汚す者だと」信じたためであった。

4)

競技者は如何なる事情の下にも審判の下す判決に絶対に服従すべきものであつて、もしそれが誤った判決であっても之に向かって抗議することなく、勝敗を度外視し、競技を続けて行く事が真の運動家とされ、其の忍従する態度こそ男らしい競技者の精神だと考えられて居たのであります。吾々も今日まで飽くまで之を信じ、之に終始して来た積であります⁵⁾

その心情とは、競技者はいかなる場合があつても、審判の判決に従い抗議せず、勝敗に捉われない態度が真の競技者であり、男らしいことであると述べていることから、アマチュアリズムやアスレティシズムの浸透をみることができる。しかし、アマチュアを信奉した選手団にとっては、第7回大会は尋常な競技会ではなかった。

ゲームに神聖さが保たれて居る限り例へ其の審判に誤審があり規定の適応が誤って居たとしても我々はゲームを放棄してよいとは思いません、否競技者はゲームを遂行すべき義務を負っている⁶⁾

彼らは、審判が誤審を行なったことを理由にしての退場は許されない行為だと自覚していた。しかし、ゲームに神聖さが保持されていない場合はどうなのかと問う。その神聖さを汚したのは「審判及び観衆と言う外のものから」であった。これは、選手団が極東大会の政治的性格をよく表しており、帝国主義との対峙を表現したものであったと考えられる。

審判に対して、次のように裁断する。「今回の大会に於ける審判員の大多数は、常識を通し越し、まるで無茶であったと言うより形容の言葉は無い」と述べた。そして審判をしている大多数の役員に対しては、「其の人格を疑い、彼等の競技精神に諦めをつけた」とし、「大会としての普通の約束を無視せる九ヶ条の事件対し、無慮三十回以上の抗議を行ったのであります。しかも、其の中にはスポーツマンとして口にするに忍びざる人格的なものさへ含んで」いたという。競技会自体が異様であり、選手やコーチをつけて、競技場に居る役員などを「監視して居らねば安心して競技が出来ないのでありました」と述べ、このような「不名誉な競技会が世界何れの所にありませう」⁷⁾かと、その悲痛な訴えを述べた。第7回大会は、日米の政治闘争にスポーツ大会が翻弄された。

選手団は競技に参加することを尊いとするアマチュアリズムと抗議のための退場を区別し、外からの競技精神の冒涇を理由とする退場行為を「新アマチュア精神」と呼んだ。さらに、大日本体育協会についても言及した。

国際的とか帝国の名誉とか言う言葉を頻りに、強制せられました。我々は、たとえ国際的競技であっても我々の運動に対する精神を曲げることは到底できませんでした。否国際競技なればなるだけ、又帝国の人民であるという名誉を思えば思う程又我々が一個のアマチュアスポーツマンたる精神を高く持すれば持する程我々の信条は正しいと思いました⁸⁾

選手団は、帝国の名誉という言葉によって、スポーツマンシップを棄てなければならぬ窮地に陥った。しかし、アマチュアリズムの態度を貫くことが帝国の名誉を守るとし、スポーツマンとしての誇りを遵守した。このように、大日本体育協会の背後にあった帝国主義を退け、アマチュアリズムの信念を貫いた。

こうした例は、当時の選手は帝国主義の圧力の中にあっても、陸上競技におけるアマチュアリズムに誇りを持ち、その信条を重視して、競技と向き合っていたことを示している。そこには帝国主義的な勝利ではなく、スポーツ競技者としてゲームに参加し、正々堂々と全力でプレイすべきであるという考えが、選手たちに浸透していたことが示されている。

退場後の納戸選手の様子を、日本選手総監督である高瀬養がとりあげている。「彼れの双

類には、涙の流れを認めることが出来た。思うに納戸選手はレースに悲憤と、選手の退場とに…両面の心痛から唯独り胸を痛めていた」⁹⁾と回顧した。この一文から納戸選手のスポーツマンとしての深い悲しみや悔しさをみることができる。

このように、第二次世界大戦以前の1920年代において、帝国の圧力に潰されずに、陸上選手が純粋なアマチュア精神を発揮していた事実は重要であろう。この例は、一高野球部の遠征問題にもみられたように、文化帝国主義による権力関係のベクトルが、上から下という単線的であるという考えに修正を迫り、文化のベクトルは時として政治・経済のベクトルとは逆向きとなり、文化帝国主義を微細な権力構造から捉え直す、アレン・グットマンの提唱した文化ヘゲモニーの考え方に合致している。彼ら陸上競技団の行動は、後日雑誌『体育と競技』で取り上げられ議論を呼んだ。彼らの行動は、紛れもなく権力への抵抗であり、スポーツのあり方に一石を投じるものであった。

以上のように、帝国主義という圧力に屈することなく、純粋にスポーツ愛し、アマチュアリズムを貫き通した集団も形成されていた。彼らはこれを「武士道」とは呼ばず、新アマチュア精神と述べた。注目すべきは、ここで彼らは「武士道」に反するとは言わず、「新アマチュア精神」の語を選んでいる点であろう。スポーツ精神は、確実に戦前の日本人選手に浸透していた。

註)

- 1) 宮畑虎彦「マニラの十日」大日本体育学会編『体育と競技』第4巻7月号、目黒書店、1925年7月、30頁。
- 2) 納戸徳重「問題の動機となった4百米」同上、24頁。
- 3) 日本代表陸上監督選手一同「陸上選手退場に就きて」同上、14-22頁。
- 4) 同上、15頁。
- 5) 同上、16頁。
- 6) 同上、17頁。
- 7) 同上、17-18頁。
- 8) 同上、21頁。
- 9) 高瀬養「絶対不出場問題の真相」同上、43頁。

第4節 英国スポーツ規範の普遍化の事例—「一日一善」の形成—

最後に、英国規範の影響を受けて、スポーツ規範が、実際にどこまで普遍化したかという点に関心を向けておきたい。これまで一高を中心としたエリートの状況を焦点化してきたため、エリート階層を超えた広がりについて補足しておく必要があると考えるからである。そこで、着目したのが少年義勇団である。同団体は、英国のボーイスカウト運動が日本に定着することで発足した。英国でのボーイスカウトの誕生は、1899—1900年のボーア戦争が契機となった。創始者は、周知のように当時陸軍大佐であったベーデン・パウエルである。ボーイスカウトは、戦時における少年の活動から誕生し、ボーア戦争では実際に少年達が戦争地域で活躍した。

日本では、「少年義勇團」として訳出された。紹介した人物は幾人かいる。今西嘉蔵もその一人であり、『英国少年義勇団の組織と其教育』（今西嘉蔵、同文館、大正4年7月）を出版し、規範や訓練を以下のように紹介した。注目しておきたいのは、ここでも、「一古武士的精神の養成」にみるように、英国規範を日本の「武士道」になぞらえて紹介している点である。

一 古武士的精神の養成

国王、宗教及び自己の体面の為には身命を賭するに躊躇せず…中略…弱を助くるは古武士の精神なりき。英国人は虚言を忌むこと他国人より太だし。されば、団児虚言を吐き、又他人の物を盗むよりは、寧ろ死すべしと教えられる

二 忍耐

忍耐の必要なるは論を俟たず。されど之を教えるに、ただ口舌を以てするも何の効果あらん。…中略…長途の強行軍露営等をなし、日本の柔道をも之を奨励す

三 愛国心

国家的生活に最も必要なのが愛国心也。されば、本団に於いては深く愛国心の養成に勤む。英国が今日の如き偉大を致したるは、一に父祖の愛国心の賜物なる…中略…国家を先にして自己を後にせよ。遊戯娛樂を後にして国家を先づ念とせよ

四 規律

本団は共同生活を完全に営み得べき。国家社会有用の材たる第二の国民を作るを以て目的とせるものなれば、規律を尚ぶは当然なり

五 公共心

一日に必ず一の善事¹⁾

今西の解釈によると「義勇団の目的は、此少年の品性を、其白熱時代に補へて、鑄て以て、正しき型に作らんとするにあり」とし、「古代騎士の武士道に加うるに、当代殖民の備うべき勇氣、堅忍、知略、確實等の性質を以てしたるもの即ち是」²⁾と説明されている。「二忍耐」の項目では、柔道を推奨することで、あたかも行軍に柔道同様の効果があるように

記載した。このような修辞を用いることで、スカウトに、日本的な道徳心が養えるように説明した。

また、「中将は曰う。〈少年義勇團の目的の一は、吾人の間に古代騎士の信条を復活せしめむとするにあり〉」とし、「日本武士道が今日に至るまで其精神界の花なるが如し」と、英国の騎士道と「武士道」を同様のものであるように説明した。加えて、「不幸にして我が国の武士道は殆ど廢滅に委せられたり。而して吾人の目的は、此の武士道によりて団児を訓練するといふよりは、寧ろ之によりて団児自ら訓練する事を教へん」と、英国のボーイスカウトから習得される規範を「武士道」として復活させると述べた。

さらに今西は、ベーデン・パウエルを理想の古代騎士としながらも、「中将は真に英国古武士の典型なり。而して義勇團の設立も、亦実に此の武士道復活の為なり」とベーデン・パウエルを古武士になぞらえた。本来は異なる英国騎士と日本武士を徹底的に結びつけた。³⁾

このように、今西は、衰退した日本の「武士道」を隆盛にするためには、ボーイスカウトを学ぶことが必要であると考えた。今西の解釈によれば、英国の騎士道規範を訓練することで、本来は別物である日本の「武士道」を身につけることができることになる。こうして、ボーイスカウト運動の規範は、「武士道」精神になぞらえて解釈されたことで、「武士道」化した。

次に、ボーイスカウト運動の普及に努め、「青年会の母」と称された山本瀧之助の著作に注目し、両者の関係を明らかにしたい。山本瀧之助著『地方青年團體』（熊谷辰治郎編「山本瀧之助全集」日本青年館、1909年12月）には、以下のような記載が見られる。

五〇 少年義勇團

外国に出来ているような少年義勇團の精神なり技能なりを、今日我国の青年会に取り入れることは急務であろうと思える。参考の爲めに東京義勇團の団則を左に掲げる。⁴⁾

上記のように、山本もボーイスカウトの存在を、早々に認知しており、青年会に取り入れることを望んだ。具体的には、ボーイスカウトの規範を紹介し、青年会でも実践すべきとした。中でも、山本が紹介する「一日一善」の理念に注目してみたい。これは「確に明治四十四年頃の事であつた。彼の英吉利『少年義勇團』の組織が追々我が邦に伝わるに連れて、其の義勇團の掟の一であるの事〈一日一善〉が漸世間に知られて来た」⁵⁾と紹介している。さらに山本は、著名人の格言を引用することで、日本の伝統的な精神であると述べて「一日一善」の日本化をはかった。その手法は、安永に明の袁了凡の書物にも「一日一善」の記述があるとしてアジア的親和性を指摘して、受容の土壌を用意した。しかし、ボーイスカウト運動が紹介される前の日本において、「一日一善」は民衆に広く認知されておらず、それまでは存在しなかったも同然の規範であった。また「一日一善」を日本に広めたのがボーイスカウト運動であったことは、冒頭にボーイスカウトの掟であると紹介し

ていることから明らかであるし、漸く世間に知られてきたと述べている。このようにして、英国的スポーツ規範を紹介する脈絡を通じて「一日一善」は日本に浸透し、スポーツ用語として定着した。また山本は「一日一善会」を創り、この規範を青年会で推奨し実行させた。山本の著作集にも『一日一善』（1913年）があり、彼がこの理念を重視していたことが分かる。

一方、山本は、当時の青年団を『団体訓練』（1928年）の中で厳しく批判した。「団といはないで従前通り会と称した方が、寧ろ今日の青年団には、相応しいのではあるまいか」と主張し、「団といえば先づ団体の団である。団結の団である。…中略…要するに会の臨時的なのに対して団は常時的ある。今日の青年団は果たして常時的のものであらうか。団員同士が相互に団結して、真に団の体を成しているのであらうか」と述べた。そして、「今試に青年団を掌に載せて、フット吹いて見たとすると、それは恐らくは忽ち四方に飛散してしまうのではあるまいか」⁶⁾と例えた。

このことは、1928年当時において、山本の理想とする青年団がまだ確立していなかったことを表している。山本は、青年団には小学校が重要であると考えており、「青年団の指導上今日最も大切な点は一口にいえば、小学校を振り向いて見よ。小学校に立ち戻れということである」⁷⁾と述べ、小学校教育へ青年団の基礎を据え付けることを望んだ。つまり、「これ又要するに学校時代に於て青年団を期待させると共に聊かたりとも団体訓練を施して置けという外ならぬ」⁸⁾という主張の通りである。集団訓練について山本は以下のように述べている。

いくら生徒に対して協同一致の理を説いたり、実例を示したりした所で、それで決して完全に精神の獲られるものではない。これはどうしても生徒をして団体の一員たらしめて、自ら団体の事に肉薄させるといふことの外に最も勝れた方法はない筈である⁹⁾

以上のように、団体活動を行う上で、協同一致の理念を重視した。当時、協同一致の理念は英国規範を通してもたらされていた。阿部生雄は、「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成」を解釈する際、『トム・ブラウンの学校生活』の中でチームスピリットとは、「同朋意識を媒介とした団結、利己心を滅し切った協同、位階制に基づいた規律、相互信頼や統率力を培うチームゲームを礼賛する」ものであると説明しており、「近代スポーツマンシップの柱の一を構成する」¹⁰⁾と述べている。英国が、協同一致の理念を養うために団体を重視したように、山本も協同の精神を養うために、「一員たらしめて、自ら団体の事に肉薄」することを必要とした。チームゲームについても以下のように推奨している。「少年たるや、果して団体訓練の可能性を有しているかということである。これは問題にするまでもない。心理書の中には幾多もこれを説いてある」とし、「良習慣が形造られ、結果本能があらはれる時には、フットボールとかクリケットとか尊き遊戯を供給せ

られる。これらの遊戯は精力を十分に出す事ばかりでなく協力、指揮者に対する服従、己の組の為に己を犠牲に供する云う風の性質を養う¹⁾とドラモンドの言葉を引用し、フットボールやクリケットという英国の「アスレティズム」が重要視した集団スポーツを推奨した。すなわち、青年団の団体精神を養う上で、山本も英国スポーツを奨励し、その精神を受容した。

以上より、ボーイスカウトの規範は、今西や山本らによって、青年教育や青年会組織に取り入れられたと言えよう。その過程において、あたかも、元から存在した日本的規範すなわち、「武士道」と融合するものとして紹介され、受容された。それは山本が青年団に英国規範を取り入れようとし、団体訓練においても、実は英国の集団スポーツの形式を賞賛していたことから分かる。山本は、青年会に英国スポーツ規範という西欧流の「文明の精神」を加えた。またそれらは、「武士道」や「一日一善」に象徴されるように、日本的修辭をなし、日本の伝統的規範として取り入れられ、実践される根を形成した。

1920年代においても、英国スポーツ規範が「武士道」として啓発されていたことが分かる。ボーイスカウトの掟であった「一日一善」が、日本に美徳のように定着していることと同様に、西欧流の「文明の精神」もまた「武士道」として日本人の美徳へと変換されたといえよう。また、こうした例は、西欧流のスポーツ規範が、ただエリート学生にだけ伝えられたのではなく、1920年代に突入すると、一般の青年が活動する場でも活用されたことを示している。

しかしながら、エリート、民衆の双方に伝えられたスポール規範としての「武士道」は、転機を迎える。終章では、ファシズムによる転機を踏まえ、近代日本におけるスポーツ規範形成について再考を試みる。

註)

1) 今西嘉蔵『英国少年義勇団の組織と其教育』同文館、1915年7月、24-27頁。

2) 同上、243頁。

3) 同上、150-151頁。

4) 山本瀧之助『地方青年團體』熊谷辰治郎編『山本瀧之助全集』日本青年館、1909年12月、212頁。

5) 山本瀧之助『一日一善』同上、1913年、59頁。

6) 山本瀧之助『團體訓練』同上、1928年、431頁。

7) 同上、440頁。

8) 同上、441頁。

9) 同上、454頁。

10) 阿部生雄「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成」岸野雄三教授退官記念論集刊行会編『体育史の探求』岸野雄三教授退官記念論集刊行会、1982年3月、126頁。

1 1) 山本瀧之助『團體訓練』前掲書、4 5 7頁。

終章 ファシズムによる「武士道」の変容

一高生らエリート学生は、スポーツを通じて、西欧流の「文明の精神」である「忠君愛国」や「質実剛健」、「男らしさ」、「自己犠牲」といった諸徳目を学んだ。エリートの規範であったスポーツ規範が、日本的価値に迎合するさいに「武士道」に集約された。しかし、そもそも「武士道」はナショナリズムを高め、国体思想と一体化する要素を胚胎した言葉であった。結果、ファシズムと迎合し、太平洋戦争が始まると「武士」の生き様として、戦争で「死」ぬことと明確に結びついた。例えば、江戸時代の武士の死生観は、以下のよう説明された。大道寺友山著『武道初心集』の中で、「一年中、常に死を覚悟して過ごせ」という教えは、しかし、死に急げというのではない。逆に、死という最悪の出来事を想定することによって緊張感を過ごせば、無事に長生きできる¹⁾ことや、現代でも『葉隠』が「武士道と云うは死ぬことをみつけたり」で知られているが、この条の末尾までを読めば、「死ぬ覚悟をしていれば一生無事に過ごせる²⁾」と述べられていた。このように、実際は、武士として、安易に死ぬことを奨めているのではない。しかし、これらの武士の死生観にも、前述した「mens sana in corpora sano 健全なるからだに健全なる精神が宿る」に生じた曲解と同様の現象が起きた。すなわち、「武士道と云うは死ぬことをみつけたり」という部分が誇張解釈されたことである。

1942年に刊行された『新日本体育』では、「〈葉隠論語〉の中に〈武士道というは死ぬことと見つけたり〉と云っているが、スポーツ場も亦、日本人として如何に死ぬるかを訓練する場所³⁾」と教えている。このように、「武士道」は、ファシズムを通じて、超国家主義のイデオロギーの中に埋没する。とりわけ、『葉隠』の一文が都合よく利用された。スポーツに「死狂」という価値が付与されたケースもあった。スポーツの理想の究極は、「日本人である限り〈忠孝〉にあらねばならない⁴⁾」と主張された。その理由は、「われわれが生きており、スポーツを楽しめるのは、畏くも陛下のお陰であり、国家のお陰であるためであり、「スポーツによって身体を練り、身心を育成してゆくのも、君のために喜んで、死ぬることの出来、親のために惜みなく己を棄てんがため⁵⁾」であった。

国家のために惜しげもなく命を捧げることができ、真に国家のために「死狂」の行業をなすことができるようにせんがために、真にわが身を愛し、わが生命を愛惜するのであるから、真に体育心を起さしめるには、このことを措いて外にないといえよう⁶⁾

上記のスポーツ論にみられるように、「体育心」とは、「武士道」精神を養い、国家のために「死狂」する心と身体を育てるためのものであった。このように、ファシズム下において、スポーツにおける「武士道」とは、もはや西欧論者のいうエリート教育の要ではなく、青年を超国家主義に誘うために「滅私に向けての闘争欲の培養手段として教育を規定⁷⁾」する際に用いられた理念となった。

そもそも「明治武士道」の登場以来、「武士道」という言葉は、ナショナリズムを発揚するための役割を果たし、日本近代国民国家のエリートが素養として持つべき「愛国心」や「自己犠牲」の根拠となった。しかし、「武士道」は、ファシズム下においては、自己を肉弾に変える根拠となり、多くの日本人が激戦地に赴いた。

また、スポーツ競技に着目してもファシズムと迎合することでスポーツの本質が変容した。例えば、陸上競技も以下のように変容した。1938年5月15日に「国防力増強的体育運動大会」（以下「国防大会」と略す）が明治神宮外苑競技場で初めて開催された。開催者は、陸軍省、海軍省、文部省、厚生省、東京府をはじめとした1府4県の後援の下で、新しく組織された関東地方青年学校国防体育振興協会と東京日日新聞であった。開催主旨を白藜は以下のように説明した。

国防的な数種の運動種目を制定したものである。…中略…政府は先に国家総動員の訓令によって、此の時局に善所するの態度を明確にし、これと共に国民精神総動員運動をもって、非常時局下に最も緊要な、堅忍持久、困苦缺乏忠君愛国の日本精神を昂揚せんとして居り、国民撃つて協力一致、皇国の理想を実現せんとしているのである⁸⁾

つまり、国家総動員法に基づいて、堅忍持久や忠君愛国といった日本精神を発揚するためのスポーツ競技大会であると述べられている。まさしくファシズムを反映する大会となり、競技項目は国防目的の様相に染められた。国防大会の運動要目は以下の通りである。

大会項目⁹⁾

総則

- 1・スパイクの禁止・陸上運動場のような適切な施設で行う。
- 2・『位置に就け』で（伏せ）になる。（陸軍体操教範第四十二図の一）（図1）
- 3・『用意』で（出発姿勢）になる。（陸軍体操教範第四十二図の三）（図2）
- 4・号砲で発走。



図1 陸軍体操教範第四十二図の一

図2 陸軍体操教範第四十二図の三

出典 大日本体育学会編「国防体育運動要目」『体育と競技』第17巻4月号、1935年、93頁。

採点種目

- 1・行軍競走 (一組一ヶ小隊の56名)
(四千米を四列側面縦隊で走る。脱落者がでると減点)
(服装は執銃帯剣)
- 2・団体障害物競走 (様々な障害物等がある)
(水壕・木製障碍・乗越用板塀など) (図3)

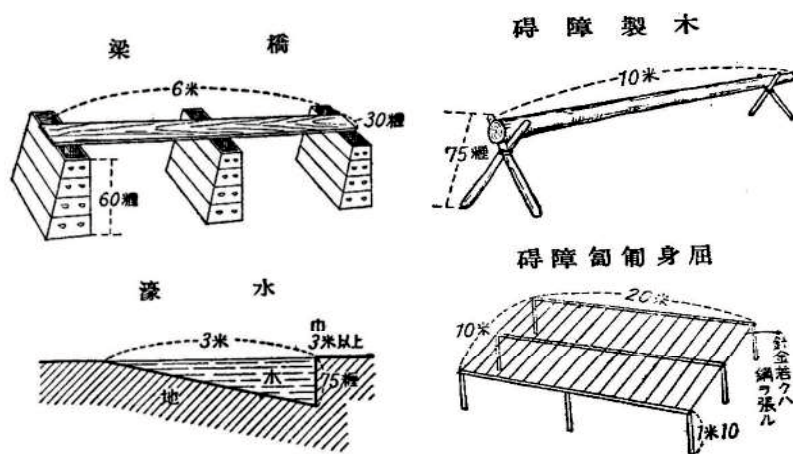


図3 団体障害物競走の障害物の図

出典 編集部「国防体育運動要目」『体育と競技』第17巻4月号、1935年、95頁。

- 3・早駈継走 (五名一組で千米を二百米分走)
(高学年の服装は執銃帯剣)
- 4・土嚢運搬継走 (五名一組で五百米を百米分走)
(土嚢を次走者に渡す。重量は高学年で十貫)
- 5・担架継走 (三名一組で一名を担架に乗せ運搬)
- 6・手榴弾投擲 (人像に当たると三点。五米円内で二点。十米円内で一点)
- 7・綱引 (一組十名で行う)
(三米以上引っ張ると勝負有り)

公演種目

- 1・戦闘教練
- 2・瓦斯攻防演習
- 3・銃剣術試合
- 4・自転車訓練
- 5・建国体操
- 6・分列式

図1, 2からも明らかなように、選手は銃剣を帯刀し、戦争を前提とした種目を競わされた。これは、スポーツではなく軍事訓練であった。このような種目が陸上戦技として、競技内容に加えられた時に、陸上競技はスポーツではなくなった。また選手は、スパイクの禁止により記録を求めることが困難となり、東京オリンピックの中止も告げられ、純粋な競技形式の全国大会という目標も失った。何よりも優秀な選手が戦死し、当時の陸上競技選手のスポーツへの意欲が減退した。¹⁰⁾ 国防大会の出現は、スポーツ界がファシズムにとりこまれた事実を象徴している。

次に、青年会で推奨されたボーイスカウト運動は、ファシズム期になるとヒットラーユーゲントに迎合した。1944年になると、ドイツのヒットラーユーゲントを行軍の理想と考えるようになった。日英同盟期にもたらされた英国のボーイスカウト運動が、ドイツのヒットラーユーゲントに置きかえられたことは、世界史的に見れば皮肉な一例である。実際、宮本守雄著『勝利への道』（1941年刊行）では、ヒットラーユーゲントとの関係が強調されている。当時文部大臣であり、大日本青少年団長を兼任した橋田邦彦は、その序文で、第2次世界大戦でのドイツの快進撃を賞賛し、「わが国はドイツとは特に深い関係を有ち、我が国青年少年団とヒトラー・ユーゲントの間には交換訪問が行われている程である」とし、「ドイツの勝利がドイツ青少年教育訓練に負っていること甚だ大なること想う時、彼等の生活はわが国青少年の特に時局下に於て、幾多の参考とすべき」¹¹⁾と述べている。

同書の序文を担当した二荒芳徳は、少年団日本理事連盟理事長も歴任した人物であり、上平泰博は、国粹主義者と評している。¹²⁾

二荒は、戦時下に入ると『勝利への道』の序文の中で、「我が神武天皇即位紀元二千六百年を…中略…世界は新しい、神々しい、従来より遙に高度の偉大な精神生活の大目標に向って進発したと云い得る。而してその先驅をなすものは東に於ては我が日本であり、西に於てはドイツである」とし、「我に於ては皇祖皇宗の宣示し給うた八紘爲宇の高遠なる大理想に基き、彼に於ては稀世の英傑ヒットラー総統の生新なる世界観によって、この地上に新しき秩序を建設せんとするの気運を醸成した」と述べ、日本とドイツの関係を強調し、天皇とヒットラーを同列に置いて賛辞した。また、「この故に日独は当然に相結び協力して…中略…あらゆる困難辛苦を突破撃滅して、天命の実現に向って、敢闘又敢闘するの烈々たる意思と、炎々たる情熱を持たなければならぬ」¹³⁾と親ドイツ路線を強調している。さらに特筆すべきは、「軍人の占領地に於ける厳粛なる武士的態度は実にヒットラー・ユーゲントの透徹、正確なる鍛錬より流出している」¹⁴⁾と述べ、ドイツ軍人の規範を「武士道」になぞらえている点である。すなわち、理想の「武士道」を、アマチュアリズムなどの規範を兼ね備えた紳士的人物ではなく、ヒットラーユーゲントの規範を兼ね備えたドイツ軍人に求めた。

そのヒットラーユーゲントとの交流を深めたのは、少年義勇団であった。それは二荒が

「回顧すれば昭和十二年の夏、余が大日本少年団連盟の代表派遣団を引率して欧州に赴いた際、時のドイツ国青少年指導統監フォン・シラッハ氏は一行を迎えるに国賓の礼を以て」¹⁵⁾ 歓待してくれて感動したとの記述があり、二荒は、積極的に少年義勇団にヒットラーユーゲントの規範を取り入れようとしていたことが伺える。なぜボーイスカウトはドイツと交流を深めたのだろうか。そのことを考察するために、1924年のコペンハーゲン決議宣言に立ち戻りたい。

コペンハーゲン決議宣言（1924年）では、ボーイスカウトとは「国家的、国際的、普遍的」であると宣言した。そして当時の日本では、「少年団は国際的であって、しかも日本的でなくてはならぬ。進歩的であって保守的でなくてはならない。即ち、国粹を保存して、しかも国際的でなければならない」¹⁶⁾ とした。このことは、上平によると、「国家的であり、国際的であるという矛盾した二重構造」を持っており、「〈この異質な二重構造は〉、昭和期に入ってから、少年団日本連盟の国際平和主義と国防国家主義の均衡論は政治情勢の転換によって破綻しつつあった」¹⁷⁾ と解釈されている。すなわち、ナショナリズムに傾倒していく国家体制に続いて少年義勇団も、ナショナリズム的側面が強化されていったことを示している。

それは、ヒットラーユーゲントとの交流が盛んになることから分かる。少年義勇団は、イタリアの青少年団であるバリラにも派遣団を送り、ムッソリーニとも会見し、ドイツ、イタリアの青少年団との関係を深めた。上平によると「〈満州事変〉下において少年団日本連盟の〈少年団〉が防衛と称して果敢に對外侵略に加担し、国際協調精神の欺瞞性を内外に露呈している」とし、「日本政府の国際連盟脱退もあって決定的な転換を余儀なくされる。つまり、少年団の国際関係は次第に日独伊の青少年団に挟まり、ファシズムとナチズム青少年団との対外交流が濃密となって、ボーイスカウトの〈本家〉であった英米との関係は冷却していく」¹⁸⁾。以上のように、少年団が軍部と密接な関係を持ち、英国から伝来したボーイスカウトは、政治の展開とともに英国伝来の団体組織ではなく、日本の国体観念の則した団体へ変化したと言える。このことは、国際連盟を脱退し、本家の英国が敵国となり、ドイツ・イタリアが同盟国となった結果でもある。このように政策と運動しながら英国的ボーイスカウト運動は衰退し、ヒットラーユーゲントとの結びつきが強化された。

以上のように、日本がヒットラーユーゲントと結託したことは、ボーイスカウトの純粋性の限界を象徴する出来事であった。『勝利への道』や平沼良著『国家国民の体育』（目黒書店、1941年刊行）が刊行されたことで、日本の少年義勇団はドイツに学び、ドイツと歩む必要があるという主張がなされた。こうして英国的なボーイスカウト運動は、純粋なスポーツとして限界を迎えた。

以上のように、明治以降に日本に受容された英国スポーツ規範は、日本がファシズム国家としての様相を色濃くなるにつれて変容した。スポーツにおける「武士道」は、ドイツ流の精神と合致するものとして発揚され、ヒットラーユーゲントが用いる用語や理念に置き換えられた。その結果、「武士道」は、英国的なスポーツ精神を理想とするのではなく、フ

ァシズム期のドイツを理想とした。

以上のように、ファシズム下において、スポーツ規範における「武士道」は変容したといえる。「武士道」における「死」に対する概念が拡大誇張され、そして「武士道」の理想が英国からドイツに移ったことは、つねに「武士道」が、国体に合致した時代の精神を発揚する装置の役割を果たしたことを示している。

註)

- 1) 佐伯真一『戦場の精神史』NHK ブックス、2004年、207頁。
- 2) 同上、211頁。
- 3) 前川峰雄『新日本体育』教育科学社、1942年8月、155頁。
- 4) 同上、158頁。
- 5) 同上。
- 6) 同上、180頁。
- 7) 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年9月、221頁。
- 8) 白藜「新興「国防体育」大会を賛す」大日本体育協会編『體育と競技』第17巻4月号、1938年、2-3頁。
- 9) 編集部「国防体育運動要目」同上、93-99頁。
- 10) 織田幹雄『陸上五十年』時事通信社、1955年、124頁。
- 11) 橋田邦彦「序」宮本守雄『勝利への道』朝日新聞社、1941年、1-2頁。
- 12) 上平泰博「戦時体制下の少年団」上平泰博、田中治彦、中島純編『少年団の歴史』萌文社、1996年、190-193頁。
- 13) 二荒芳徳「「勝利の道」に序す」宮本、前掲書、3頁。
- 14) 同上、5頁。
- 15) 同上、4頁。
- 16) 小柴博、奥田秀彦、寺岡一義編『少年団日本ジャンボリー』東京連合少年団、1922年、2-6頁。
- 17) 上平、前掲論文、194頁。
- 18) 同上、256頁。

結論 日本的スポーツ規範「武士道」の再考

これまで、近代日本におけるスポーツ規範は、西欧規範と日本的な伝統的価値観の折衷によるものとされてきた。しかし、近代における「武士道」は明治期に創られた伝統に他ならないという指摘がなされた。本研究もスポーツにおける「武士道」を考える際この点を重視した。

明治期に「武士道」を創り、世界に『*The Soul of Japan*』としての「*Bushido*」を広めた新渡戸稲造は、西欧流の「文明の精神」を伝えるために「武士道」の語を用いた。新渡戸の伝道活動において重要な役割を果たしたのが、雑誌『実業之日本』であった。これまで、『実業之日本』は経済誌の側面から分析されてきたが、馬静は、同誌のもつ政治や思想の資料として注目した。これを受け継ぎ、拙著「日本における近代スポーツ規範に関する研究—増田義一著『思想善導の基準』（1928）にみる英国化とその限界—」では、実業之日本社の刊行物が、西欧規範の啓発を目的の一つとしていたことを明らかにした。鈴木範久が『新渡戸稲造論集』で、『武士道』以外、どういう考えの持ち主であったかとなると、ほとんど知られていないのが実情である¹⁾と述べているが、彼の伝道活動を考察する上で、実業之日本社での活動を無視することはできない。

新渡戸は、一高校長職にありながらも同社の編集顧問に就き、同雑誌に毎号投稿するなど積極的に執筆活動を行なった。その中身は、数十万人の人々に読まれた。彼がそこで説いたのは、決して伝統を回顧する「武士道」ではなかった。事実、新渡戸の編集顧問就任を祝福したのは、徳富蘇峰や浮田和民らであった。彼らは、社会ダーウィニズム論に立つものであったと、入江克己や W. G. Beasley らが指摘している。すなわち、浮田が新渡戸の「武士道」を「世界的武士道」と呼んだように徳富や浮田が新渡戸の啓発発動に祝辞を送ったのは、新渡戸も西欧社会の論理である「文明の精神」を啓発出来る第一人者と考えたからであった。こうした事実からも、新渡戸の「武士道」論は、西欧流の「文明の精神」であったと解釈できる。事実、新渡戸の編集顧問着任を依頼し、招致を成功させた社長増田義一は、西欧思想を啓発した人物であった。増田と新渡戸の共通の目的は、国民を教育することにあった。当時すでに、『武士道』の著者としての名声、一高校長という立場を持っていた新渡戸が、世間に名を売ろうとする必要はなかった。むしろ、新渡戸の名を付すことで、『実業之日本』が世間の注目を得ることが出来た。すなわち、新渡戸と増田の啓発思想の方向性が同じであったからこそ、新渡戸は編集顧問に着任した。増田が理想とした国民の規範とは「新士道」であった。「新士道」とは、英国におけるエリートの素養を兼ね備えた、サミュエル・スマイルズが言うところの「真のジェントルマン」の模倣であった。社会への影響という点で、新渡戸や実業之日本社の刊行物を通じて、西欧流の「文明の精神」が「武士道」として啓発されたことを傍証している。

次に、明治期のスポーツの担い手であった一高生は、F.W.ストレンジや、菊池大麓、木下広次ら西欧論者の教育者に影響を受けながら、スポーツを通じてエリートとしての素養を

身につけた。教育者たちが、一高生に啓発したスポーツ規範とは、フェアプレイやアスレティシズムなど英国のスポーツ規範であった。ストレンジが始めたスポーツ活動である運動会や、野球、ボートは、スポーツの持つ魅力やその精神を一高生に伝えた。加えて、集団スポーツを教育に取り入れた木下の影響は無視できない。しかし、これまでの日本近代スポーツ規範形成に関する研究は、木下のスポーツ教育や教育方針にあまり触れることなく、スポーツに関与した一高生の言動を史料的根拠としてきたように思われる。事実、木下は、一高に自治制寄宿舎や校風、校友会、護国旗、四綱領をもたらすなど、一高精神を創りあげた教育者であった。一高は木下の教育方針によって、まさに「極東のパブリックスクール」へと変貌した。マーティン・ポリーが、カリブ海に熱帯地域版『トム・ブラウンの学校生活』があったとまとめているように、極東にもパブリックスクールが存在したという見方も可能かもしれない。

すなわち、一高精神とは、木下の教育方針の下で、集団スポーツによる人格陶冶や自治制寄宿舎を通じて校風を発揚させたことで誕生した。その中身は、近代国民国家を担うエリートとしての態度やスポーツマン的態度を重視するものであり、世界的な潮流から考察すれば、「武士道」ではなく、「アスレティシズム」であったと言える。第2章で示してきたように、「マンリネス（男らしさ）」、「シンプル・マンリネス（質実剛健）」、「ロイヤリティー（忠君愛国）」、「セルフ・サクリファイス（自己犠牲）」、「オーダー（規律）」、集団スポーツによって啓発される協同一致の精神は、留学経験があった菊池や木下によってもたらされた。こうしたスポーツ精神は、一高生だけでなく世界中のエリート学校および集団スポーツを通じて啓発されたものであった。

また木下は四綱領を説くなど、一高生にエリートとしての規範を一から教育した。その過程の中で、木下はスポーツや運動会、自治制寄宿舎を重視した。さらに、「護国旗」を創ることで愛校心を一高生に芽生えさせ、近代国民国家を担うエリートを創出させた。以上を踏まえると、木下が、一高生に伝統的な価値観としての「武士道」を根付かせることに尽力したという結論は導きだせないだろう。木下は、帝国主義とそれに連なる社会ダーウィニズムという世界情勢を通じて、一高で西欧式のエリート教育を行なったに過ぎない。こうした環境の中で、一高生は、一高を誇りにしながらエリートとしての素養を身につけた。

木下校長時代が始まったときに、既に野球部に在籍していたのが野球の名付け親²⁾とされる中馬庚であった。中馬は1887年に一高に進学し、1897年に帝国大学を卒業した。木下の校長就任が1889年であったことから、中馬は、木下校長時代を通じて一高の野球に携わっていた。そして、中馬率いる野球部にとって、木下校長は恩人となった。木下にとっても、野球部は一高のエリートとして理想的な規範を兼ね備えたエリート集団であった。野球部は、木下の教育理念の影響を受けながら成長した。彼らは、木下が理想とした集団スポーツを通じて「アスレティシズム」を備えた集団であった。言い換えればそれは、近代国民国家を担う有用なエリート集団であった。なぜならば、木下の理想とし

たエリートとは、帝国主義の世を勝ち残るために、智育に片寄らず、徳育、体育を備えた身心が健全に発達した人物であったからである。

しかし、日清・日露戦争を契機として、西欧流のスポーツ規範が「武士道」と表現されることが増す。その傾向は、雑誌『運動界』においても確認することができた。しかし、『運動界』にみられた「武士道」の表記も、日本独自の文化の再評価を行っているわけではなく、西欧流のスポーツ規範を日本的な表現になぞらえたにすぎないものであった。

以上を踏まえると、近代日本におけるスポーツ規範形成とは、ローデンの指摘しているように社会ダーウィニズムの影響を受けながら形成されたと言える。ただし、ローデンが伝統的な価値観と評価した「武士道」すらも、新渡戸ら実業之日本社の伝道活動が示しているように、西欧流の「文明の精神」を啓発するものであった。加えて、近代日本におけるスポーツ規範は、世界中で見られたエリート教育と共通するものであり、帝国主義のイデオロギーから形成されたとする、一高を「極東のパブリックスクール」と呼ぶことも、あながち外れた見解ではないであろう。日本は帝国主義国家として、近代国民国家を完成させるためにエリート教育とスポーツを結びつけた。そして、エリート校で培われたスポーツ精神とは、社会ダーウィニズムの影響を受けた「アスレティズム」であった。日本では、新渡戸による「武士道」ブームや日清・日露戦争期のナショナリズムの高まりとともに、日本という共同体の結束力を表す言葉として「武士道」が用いられるようになり、声高になった。つまり、「アスレティズム」は、「武士道」を通して、日本のスポーツ規範に反映されたのである。

しかし、ナショナリズムが超国家主義に陥った際に「武士道」は変容する。体育の中で「死狂」の根拠となった。入江は、「日本主義体育論の展開」について、「体育は、死をその内に含んでいる生命をもったところの指導者が、真に身体を統御し得るような主体として力強く働くこと、かかる生きた動きによって教育者を指導する」と説明し、当時の体育観を「滅私奉公」³⁾の正当化と指摘した。また、ドイツの軍人精神を「武士道」として啓発していた事実や、ボーイスカウト運動がヒットラーユーゲントに迎合したように、スポーツとファシズムが結びついた。こうしたことから、戦時中の「武士道」論は、ファシズムを擁護するものへと変容した。

スポーツにおける「武士道」は、明治期にはフェアプレイやアスレティズムを啓発する時代の精神であったが、ファシズム期には、ヒットラーユーゲントなどを啓発する時代の精神へと変容した。

それゆえ、「武士道」はこれまで語られてきた西欧規範と日本の伝統的規範との折衷論ではなく、西欧流の「文明の精神」が、日本的な表現になぞらえて啓発されたことで誕生した「創られた伝統」であった。そして、その目的は帝国主義下で日本が近代国民国家として成長し、生き残っていくためのエリート育成にあった。その結果、一高は「極東のパブリックスクール」として、西欧流の「文明の精神」やスポーツを通じて「アスレティズム」を備えた近代国民国家を担う西欧流のエリートを創出した。西欧流の規範を身につけ

たエリートであった一高生は、ナショナリズムの高まりとともに武士に連なる表現を鼓吹されたにすぎない。

「武士道」を日本だけでなく世界に広めた新渡戸稲造も、伝統を復興させようとした訳ではなかった。彼の「武士道」とは、まさしく西欧の規範であった。彼とともに文壇活動を行なった増田義一社長も、英国のエリート精神である「真のジェントルマン」を「新士道」として啓発した。新渡戸の執筆活動に賛辞を送った、浮田や徳富も西洋の研究者の目からみれば社会ダーウィニズムを啓発する論者であった。すなわち、こうした「武士道」の実際が西欧規範であったことは、決してスポーツの世界だけでおきたことではなく、近代日本の社会現象でもあった。

以上のように、日本におけるスポーツ規範としての「武士道」とは、まさしく社会ダーウィニズムの影響によって伝播した「アスレティズム」であり、時代の精神の反映であった。ファシズム期に見られた「武士道」の変容は、つねに「武士道」が各々の時代の精神に対応し続けていた事実を補強している。

註)

- 1) 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年5月、319頁。
- 2) 坂上康博『につぼん野球の系譜学』青弓社、2001年7月、31頁。
- 3) 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年9月、229頁。

引用・参考文献一覧（50音順、同著者の場合は、刊行年数順に記載した。）

1・一次史料（雑誌及び全集については、項目を作成し、まとめて掲載した。）

F.W.Strange『*Outdoor Games*』丸家善七（出版人）、1883年。

今西嘉蔵『英国少年義勇団の組織と其教育』同文館、1915年。

浮田和民「帝国主義の教育」『教育時論』第五八七号、1901年。

小柴博、奥田秀彦、寺岡一義編『少年団日本ジャンボリー』東京連合少年団、1922年。

櫻井鷗村訳新渡戸稲造『武士道』丁未出版、1908年。

第一高等学校編『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年

『校友会雑誌 号外 野球部史附規則』第一高等学校校友会、1895年。

中馬庚『野球』前川文栄堂出版、1897年。

坪井玄道、田中盛業編『戸外遊戯法』金港堂、1885年。

二荒芳徳「勝利の道」に序す」宮本守雄『勝利への道』朝日新聞社、1941年、3-5頁。

新渡戸稲造『*Bushido The soul of Japan*』Kodansya USA、2002年。

新渡戸稲造「序」山方香峰『新武士道』実業之日本社、1908年、序文。

新渡戸稲造『修養』実業之日本社、1911年。

橋田邦彦「序」宮本守雄『勝利への道』朝日新聞社、1941年、1-2頁。

前川峰雄『新日本体育』教育科学社、1942年。

増田義一『大国民と根底』実業之日本、1920年。

増田義一『思想善導の基準』実業之日本社、1921年。

増田義一『青年出世訓』実業之日本、1925年。

宮本守雄『勝利への道』朝日新聞社、1941年。

武藤徹男『肥後先哲偉蹟 後編』1928年『肥後文献叢書 別巻（二）』1971年、歴史図書社所収。

山方香峰『新武士道』実業之日本社、1908年。

以下、雑誌『実業之日本』掲載史料。

浮田和民「博士は世界的武士道鼓吹の最適任者」『実業之日本』実業之日本社、1909年1月15日号、17-18頁。

菊池大麓「余の英国にて感じたる競争上に於ける武士道」『実業之日本』実業之日本社、1908年6月15日号、20-22頁。

徳富猪一郎「記者としての新渡戸博士は天下の逸品」『実業之日本』実業之日本社、1909年1月15日号、15-16頁。

新渡戸稲造「新時代に処する実業家の武士道」『実業之日本』実業之日本社、1908年5月15日号、24-29頁。

新渡戸稲造「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」『実業之日本』実業之日本社、

1909年1月1日号、5-11頁。

濱口瞻「英人の紳士道と我国の武士道」『実業之日本』1908年5月1日号、24-28頁。

雑誌『運動界』は全体（第1巻第1号から第4巻第3号まで）にわたって参考にしたが、本文引用箇所は以下の通り。

遠洋魚長「教育家に望む」『運動界』第2巻第3号、運動界発行所、1898年、1-3頁。

菊池大麓「運動の精神」『運動界』第3巻第2号、1899年、1-3頁。

木下広次「木下京都大学総長の運動意見」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年、1-4頁。

知雨山人「帝国大学『運動会』を論ず」第2巻第11号、運動界発行所、1898年、3-4頁。

西ノ内億次郎「武士道の要を述べて其振興策に及ぶ」『運動界』第1巻第3号、運動界発行所、1897年、17-18頁。

『運動界』発行の趣意『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年、1頁。

「筑紫艦米艦を破る」『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年、18頁。

「近日の柔道界」『運動界』第1巻第1号、運動界発行所、1897年、19頁。

「運動界の気運」『運動界』第2巻第4号、運動界発行所、1898年、1-2頁。

「中傷者を排す」『運動界』第3巻第5号、運動界発行所、1899年、5-7頁。

以下、雑誌『体育と競技』掲載史料。

高瀬養「絶対不出場問題の真相」大日本体育学会編『体育と競技』第4巻7月号、目黒書店、1925年、38-46頁。

編集部「国防体育運動要目」大日本体育協会編『体育と競技』第17巻4月号、1938年、93-99頁。

日本代表陸上監督選手一同「陸上選手退場に就きて」大日本体育学会編『体育と競技』第4巻7月号、目黒書店、1925年、15-22頁。

納戸徳重「問題の動機となった4百米」大日本体育学会編『体育と競技』第4巻7月号、目黒書店、1925年、22-25頁。

白黎「新興「国防体育」大会を賛す」大日本体育協会編『体育と競技』第17巻4月号、1938年、2-10頁。

宮畑虎彦「マニラの十日」大日本体育学会編『体育と競技』第4巻7月号、目黒書店、1925年、27-34頁。

以下、『山本瀧之助全集』収録史料。刊行年数は、原本の初版の刊行年を記載した。頁数は、全集に掲載されている部分にあたる。

後藤文夫「序文」日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1931年、序文。
山本瀧之助『田舎青年』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1896年、1-69頁。
山本瀧之助『地方青年團體』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1909年、70-217頁。
山本瀧之助『團體訓練』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1919年、429-562頁。
山本瀧之助『少年団研究』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1921年、563-633頁。
山本瀧之助『一日一善』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1925年、757-840頁。
山本瀧之助『実践一日一善講和』日本青年館編『山本瀧之助全集』不二出版、1926年、1029-1171頁。

2・二次史料

一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校 自治寮六十年史』一高同窓会、1994年。
織田幹雄『陸上五十年』時事通信社、1955年。
日本オリンピック委員会監修『近代オリンピック100年の歩み』ベースボールマガジン社、1994年。
日本体育大学体育史研究室『運動界 解説』大空社、1986年。
岬隆一郎訳新渡戸稲造『いま、拠って立つべき“日本の精神” 武士道』PHP文庫、2005年。
山本邦夫『陸上競技史（上）（中）』道和書院、1967年。
ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、1975年5月、493頁。

3・邦訳書

アレン・グットマン（谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳）『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂、1997年。
E.バーガー（堀豊彦訳）『イギリス政治思想IV—H.スペンサーから1914年—』岩波書店、1954年。
E.ホブズボウム・T.レンジャー編（前川啓治、梶原景昭他訳）『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年。
ドナルド・T・ローデン（森敦監訳）『友の憂いに吾は泣く（上）（下）』講談社、1983年。
トマス・ヒューズ（前川俊一訳）『トム・ブラウンの学校生活（上）（下）』岩波文庫、19

62年。

ピーター・マキントシュ（水野忠文訳）『フェアプレイ』ベースボール・マガジン社、1983年。

ベネディクト・アンダーソン（白石さや、白石隆訳）『創造の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年。

4・研究書・論文集

H.Kinmonth“*Nakamura Keiu and Smuel Smiles:A Victorian Confucian and a Confucian Victorian*”*The American Historical Review*, Number 3 June,1980.

Lu Zhouxiang and Fan Hong, *Sport and Nationalism in China*, New York & Oxon: Routledge, 2014.

Peter Alter , *Nationalism*, Great Britain: A member of the Hodder Headline Group, 1989.

W. G. Beasley, *The Rise of Modern Japan*, Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1990.

池田恵子「ジェントルマン・アマチュアとスポーツ—十九世紀イギリスにおけるアマチュア理念とその実態—」望田幸男、村岡健次監修、有賀郁敏編『スポーツ』ミネルヴァ書房、2002年、3-39頁。

今村嘉雄『日本体育史』金子書房、1951年。

小田切毅一監修『いま奏でよう、身体のシンフォニー』叢文社、2007年。

石橋武彦、佐藤友久『日本の体操』不昧堂、1966年。

井上俊『武道の誕生』吉川弘文館、2004年。

入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂、1986年。

入江克己『日本近代体育の思想構造』明石書店、1988年。

笠谷和比古『武士道その名誉の掟』教育出版、2001年。

上平泰博、田中治彦、中島純編『少年団の歴史』萌文社、1996年。

菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年。

岸野雄三、竹之下休蔵『近代日本学校体育史』東洋館、1959年。

木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年。

木下秀明「坪井玄道」『日本近代教育史事典』平凡社、1971年。

佐伯真一『戦場の精神史』NHK ブックス、2004年。

坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年。

相良亨『武士道』講談社学術文庫、2010年。

鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年。

高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師』小学館、2012年。

高橋佐門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』昭和出版、1978年。

井口和起編『日清・日露戦争』吉川弘文館、1994年。

寺島善一、川口智久体育原理専門分科会編『スポーツの概念』不昧堂、1986年。

中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』平凡社、2001年。

深谷昌志『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房、1998年。

松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『帝国社会の諸相』研究社出版、1996年。

馬静『実業之日本社の研究 近代日本雑誌史研究への序章』平原社、2006年。

吉見俊哉、白幡洋三郎、平田宗史、木村吉次、入江克己、紙透雅子『運動界と日本近代』青弓社、1999年。

5・論文

阿部生雄「“筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成—チャールズ・キングズブリを中心として—」『岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求』岸野雄三教授退官記念論集刊行会、1832年、99—117頁。

上杉進「英学事始め—in Iwakuni—岩国英国語学所と英国人教師ステーベンス」『英学史研究』日本英学史学会 第31号、1998年、27—42頁。

小野瀬剛志「野球害毒論争（1911年）に見る野球イデオロギー形成の一側面—「日本のスポーツ観」再考論—」『スポーツ史研究』第15号、2002年、61—71頁。

清水正典「近代日本におけるスポーツの社会的発展過程とその思想的変遷—武士道精神に基づく日本の伝統的価値観と欧米スポーツ思想の相互作用—」『国際社会学研究所研究紀要』第10号、2002年、79—101頁。

田代正之「中等学校野球の動向からみた「野球統制令」の歴史的意義」『スポーツ史研究』第9号、1996年、11—26頁。

富岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成—木下広次（一高校長）を中心に—」『京都大学教育学部紀要』第40号、1994年、237—246頁。

マーティン・ポリリー（池田恵子訳）「スポーツと帝国・外交—19世紀及び20世紀における英国のイターナショナルなスポーツ—」2014年3月日英比較スポーツ史研究会当日配布資料。

リチャード・ホルト（池田恵子訳）「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン—スポーツ文化の分析—」『体育史研究』第27号、2010年、75—94頁。

村岡健次「「アスレティシズム」とジェントルマン—十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて—」村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年、228—261頁。

6・拙稿

Funaba, D & Ikeda, K, “*Britain and the Development of Modern Japanese Sport: from Sporting Amateurism to Fascisms during the period of Japanese Imperialism*”, *Pan Asian Journal of Sports & Physical Education*, Vol.3 No.1.Mar 2011,pp9-16.

船場大資「日本における近代スポーツ規範に関する研究—増田義一著『思想善導の基準』

(1928)にみる英国化とその限界―」山口大学大学院教育学研究科修士論文、2012年。
船場大資「第7回極東選手権大会(1925)にみる日本人陸上競技選手のスポーツ規範
に関する一考察―失格判定を巡る選手行動をてがかりに―」山口県体育学会『山口県体育
学研究』No. 56、2013年、11-18頁。

謝辞

本学位論文を完成するうえで、様々なご支援や、細やかなご指導頂きました指導教員の森下先生に深謝いたします。また、多くのアドバイスやご指導を頂きました副指導教員の石井先生と村上先生に感謝いたします。そして、学部生時代から現在に至るまで、あたたかいご支援とご指導頂きました池田先生に感謝の意を示します。協力して頂いた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

平成27年3月吉日